IP～インフィニット・ストラトス・パラドックス～

サンダイオンっぽい人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IPインフィニット・ストラトス・パラドックス

【Nコード】

N6860R

【作者名】

サンダイオンっばい人

【あらすじ】

というわけで一夏改変モノです。最近のノリに乗ってみました。ちなみに初心者です。そして更新遅めです。頑張っつて週一かな？できればもっと早くできるように頑張りたいです。

第1話 大体最初って皆同じ感じだよね（前書き）

なんとなく始めちゃいました。なんか無性に書きたくなって・・・
。書き始めたからには更新が遅れることかもしれないがきちん
と書いていきます。

ではこれからよろしくお願いします。

第1話 大体最初って皆同じ感じだよ

「全員そろってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

俺、織斑一夏は今とてつもなく気まずい空気のする教室にいる。普通ならここで緊張などで固まるだろうが俺はそんな失態は見せない。
・・・うん、でもキツイなこれ・・・

先ほど言葉を述べたのは小柄でメガネを掛けた1年1組副担任山田真耶先生。この人本当に先生なのか？ と思ってしまうような容姿をしている。もっと言うなら・・・子どもっぽい。

3

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「・・・」

・・・沈黙・・・妙な緊張感のためか誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

何か反応すればよかったのだろう、だが今の俺にそんな事は不可能に近い。

まあ、なぜ俺がこんな状況に陥っているかということ……俺以外のクラスメイトが全員女子だからだっ！！

……そこリア充爆死しろとか言っただろ？そんな風に考えられる君たちがスゴイと俺は思う。実際こんな状況になってみる。マジできついから。（ちなみに作者は似たような経験があります。マジでキツイです。女って怖いって思いました）

……って誰に言ってるんだ俺？まあ、とりあえず回想どうぞ。

〈数ヶ月前〉

「・・・眠い・・・」

丁度二ヶ月程前、俺は中学3年生で受験真っ只中だった。

「なんで俺だけが別会場なんだ・・・他の皆全員同じ会場だったのに・・・」

ふこくだく、とそんなこと言いながら俺は受験会場へと行く電車の中に立っていた。

去年起こったカンニング事件とやらのせいで受験会場のお達しが二日前というとんでもハードスケジュールのせいで俺はてっきり本校で受けると思っていたのを4駅先の所まで行くことが急に決まり、かなり精神的ショックを受けた。

まあ、何を言ったとしても無駄なのは先刻承知、大人しく行くことにしたのだが・・・

「・・・寒すぎる・・・」

寒さの所為で早速挫けそうだ。でも、受けるしかない。というか受けなきゃいけない。

俺が受けようとしている私立藍越学園は私立でありながら『自宅から近い・学費が超安い・就職決まったも同然』の三拍子揃った、俺にとってヒジヨーに魅力的な学園なのだ。

何故魅力的かというところには両親がいない。年の離れた姉である織斑千冬に養ってもらっているのが現状だ。俺はそれがひどく悔しかった。なので中学を卒業したら働こうと思っていたが、姉さんによる鉄拳制裁で止められた。だったらせめて・・・という理由で金銭的負担の少ないこの藍越学園に行こうと思ったわけだ。うん、あれはマジで痛かった・・・

まあ、中学はやんちゃしながらも成績はソコソコ優秀。そのおかげか、ついこの前の模試では判定はA評価。まあ、模試の評価なんてアテにならないのは知ってるから油断は禁物。なのでエリート刑事である『照井竜』さんに満を持して勉強を教わったわけだ。

まあ、それはさておき・・・この学校に受ければ就職したも同然なのだ。これで少しでも姉さんの心労を減らせることが出来ればいいんだが・・・

「まあ、それは受かってから考えるとするか」

そんな事を言ってるうちに会場に到着。結構人が多いな・・迷いそうだ。

「さてと・・・確か二階だったな・・」

俺は受験票に書かれている場所をチェックしその場所を目指す。が・
・
・

「・・・迷ったか・・」

というかこの会場が非常に分かりにくい構造をしていて何が何だかわけがわからん。なんでこんな場所にしたんだよ。絶対に迷うじゃないか。

「・・・はあ・・・」

仕方ない。次にあったドア開けて中にいる人に場所聞くか・・・

そう思い近くにあった扉を適当に開ける。するとそこにあったのは・・・

「・・・IS?・・・」

IS・・・正式名称は『インフィニット・ストラトス』。現代最強と言われてる兵器だ。

なんでこんなモノが・・・って考えたら分かるか。

「ここでIS学園の入試があるわけか・・・」

この兵器には致命的な欠陥が存在する。それは『女しか使えないこと』。これはもう世界一般常識として知られている。

「そういえば、こんなに間近で見たのは初めてか・・・まあ、それはそうか。男には関係の無いシロモノなわけだし」

なので、俺はそれを無用心に触ってしまった。

キンツッ！！

「ツッ!？」

すると、突然意識の中に高い金属音が響いた。そしてすぐ、電撃のような感覚と共にISに関する様々な莫大な情報が俺の意識の中に流れ込んできた。それらは全て、初めて見るものはずだった。しかし、それが全て理解、把握できるっ！

そして俺はそのまま導かれる様にISのコックピットと思われる場所に移る。身体にISのアーマーが装着される。ISと一体になるのが解る。

スキンバリアー
皮膜装甲展開・・・完了

スラスタ
推進機正常作動・・・確認

近接ブレード・・・展開

ハイパーセンサー最適化・・・終了

そして俺は理解した。

これが一体なんなのか

なんのためにあるのか

・・・ツ！？マズイツ！！こんなトコロ誰かに見られたら・・・
っ！！

そこまで理解した瞬間、俺は慌てて冷静になる。が、時既に遅く、

「君っ！！そこで何を・・・えっ！？なんでISがつ！？」

「嘘っ？起動してるっ！？男なのになんでっ！？」

おそらくES関係者であろう人たちが入ってくる。最悪だ……っ
！！逃げようがないっ！！

その瞬間、俺の進学先は確定した。

回想終了。

いまさらながら自分の運の無さに呆れるしかない。で、しかもその後
はトントン拍子に進んでいき、いつの間にかここにいたって感じ
だ。まあ、その間に出来ることはやっといたが……

「……くん。織斑一夏くんっ」

「ん？」

……あ、しまった。

ふと顔を上げると山田先生が涙目で俺のことを見ていた。

「あ、あうっ！ご、ごめんなさいっ！え、えとっ！で、でもねっ！あのねっ自己紹介、『あ』から始まって今『お』なんだよねっ！だからね、ご、ゴメンねっ！？自己紹介してくれるかな？」

涙目というか若干泣きかけな状態の山田先生がペコペコ頭を下げながら話しかけてくる。な、なんかいじめてるみたいで非常に罪悪感が……っ！！

「ああと、すいません。ちょっと考え事してたので……」

「ほ、本当ですかっ？怒ってませんかっ？」

「ええ。ついいつもの癖で……。こちらこそ本当にすみません」

「あ、あのっじゃあ自己紹介お願いしていいかなっ？」

「はい。分かりました」

そして自己紹介のために後ろに振り返った瞬間、俺以外の全てのクラスメイトの視線が俺に突き刺さっていることを改めて実感し、顔を引きつらせた。

「……織斑一夏です。史上初の男のIS操縦者ということですが、ISについてはほとんど知りません。学園でたった一人の男と言うことでいろいろ迷惑をかけることもあると思いますが、よろしくお願いします」

取りあえず、無難に済ませたと思う。が、なんだろう。この『もっともっとうっ！』言いたげな視線は……。

……どうしたものか……

そう考えこんでた時、タイミングよくドアが開いた。

「なんだ、まだ終わっていないのか」

その声を聞いたとたん、頭の中にダースベーターのテーマが流れる。
・・・この声はまさかつ!!

「まさかつ!! 白い魔王っ!?!」

そう言った次の瞬間、パアンッと頭を叩かれた。この痛み間違いないっ!

「誰が19歳でありながら魔法少女を名乗る頭がパーなヤツだ。この大馬鹿者が」

マテマテマテ。何で千冬姉さんがここにいるんだっ!? 職業不詳で月に一、二度しか帰ってこない絶対性格や眼つきで損してる24歳・未婚・彼氏いない歴イコール年齢がっ!

パアンッ!

「なんでまた叩くっ!？」

「何か馬鹿にされたような気がしてな」

「心を読まれたっ!？」

「パンツ!!!」

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

再び叩かれて突っ伏してる俺の聞いた事もない優しい声。魔王はどこに行った？あれか？過去さかのぼってなのちゃんにでもなったのか？え？あれは世界が違う？……嘘だっ!!!

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠一五才を一六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

・・・さすが鬼教官。言ってることが理不尽気回らない。でもこんな言葉を言ってもこの人のカリスマ性は半端ない。その証拠に・

「キヤアアアアアアッ！ 千冬様、本物の千冬様よっ！」

「ずっとファンでしたっ！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんですっ！ 北九州からっ！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいですよっ！」

「私、お姉様のためなら死ねますっ！」

これだ。我が姉ながらあっぱれだな、うん。そしてこれが所謂女子高生パワーというヤツか・・・凄まじい・・・

そんな女子達の言葉を千冬姉さんはうつうつしそんな顔で見る。

「・・・毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

案外そうかもね。それかここに入学してくる人の殆どはこれとか？
・・・うわ、想像したくねえ・・・

「きゃあああああああつ！ お姉様っ！ もっと叱ってっ！
罵ってっ！！」

「でも時には優しくしてっ！」

「そしてつけあがらないように躡をしてっ！」

千冬姉さんは額に手を当ててため息をつく。それすら見とれてしまっている人がいる。ダメダコイツラナントカシナイト……………

千冬姉さんの視線が今度は俺に向けられる。その貫く様な視線に俺も否応なしに現実逃避から帰ることに。

「で？何をしてるんだお前は、緊張で挨拶が出来んという性格でもないだろう？」

「それより千冬姉さん、聞きたいことが一つ。なんでここで教員やってることを」

パンツ……………言い切る前に4度目の出席簿アタックが俺に炸裂。何故っ!？

「織斑先生と呼べ」

「……………はい、織斑先生」

ああ、公私を分けると言うことね。

そしてこのやりとりにより教室中に俺と千冬姉さんが姉弟であることがバレた。

「えっ……織斑くんって、あの千冬様の弟……?」

「それじゃあ、世界で唯一男でISが使えるっていうのもそれが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあ」

随分好き勝手言ってくれるなあ、オイ。

というわけで俺はここ、IS学園に通うことになってしまったのだ。実際に藍越学園の試験はそこで行われていたものの2階ではなく1階だったというオチだ。……おっかしいなあ。受験票はちゃんとエックしたのに……

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だか、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

さすが鬼教官。言ってることが理不尽気回らない。…………このセリフ二回目な気がする…………。

「やれやれ…………何とかついていける感じが…………」

現在、一時間目のIS基礎理論の授業が終わった休み時間だ。ぶっちゃけてキツイ。どうにかこうにか理解は出来てるが本当にギリギリだ。3月中に頑張っというてよかった…………

まあ、それは置いてこの状況はどうかできないものか。俺は客寄せパンダかつ！……っていうくらいな状況です。

廊下には他のクラスの娘や2年、3年生が詰めかけている。が遠回りに俺を見てはひそひそと話していて誰も俺に話しかけようとはしない。が、『話しかけてっ！！』オーラを大量に放出していて、妙な緊張感が満ちている。

……ダメ。俺こういうの苦手。……外には出さないけどキツイわ。

内心そう思いつつ、外では真面目な顔で次の授業の準備をしているとき、俺の前に誰かが来るのを感じた。おお、あの空気から抜けたした猛者がいたか……っ！！

「……ちよっといいか？」

「ん？」

あれ〜どっかで聞いたことのある声だな〜と思いつつ、顔を上げるとそこには……どこか見覚えのあるポニーテール美人がいました。

「・・・お前、箒か？」

「・・・」

シカトかコラ。

そこにいたのは幼馴染の篠ノ之箒だった。・・・と思う。いやだ
って返事返してくれないし。

「お前・・・篠ノ之箒だよな？」

「・・・ああ。・・・廊下でいいか？」

「ああ」

そのまま廊下にいこうとするとザァーと道が開けた。・・・俺は
モーゼかっ!？

そして廊下にでると野次馬が俺たちをある一定の距離を保ちながら困った。

「……………」

「……………」

……………そして何も話さない。……………そっちから呼び出しておいて何も話さないのはずるいと思うんだ。皆もそう思うだろう？……………って俺は誰に言ってるんだ？

仕方がないのでこちらから話しかける。

「……………そういえばこの前剣道の大会で全国優勝したそうだな。おめでとう」

「なっ……………!? 何でそんな事を知っているんだっ!？」

すると、顔を真っ赤にして怒鳴られた。……………え?なんで?俺褒

めたよね？

「・・・新聞に載ってた。お前の名前を久しぶりに見たからな・
良く覚えてる」

「なっなんで新聞なんか読んでるんだっ!？」

君は俺から新聞を読む権利をはく奪する気かね？新聞ぐらい自由に
読ませてくれ。

「俺だつて新聞ぐらいは読むさ。・・・それと・・・」

「こ、今度はなんだっ!？」

また、怒鳴られました。相変わらず怖いです。小さいころもこんな
感じだったなあ・・・

「久しぶりだな、箒。相変わらずそうで何よりだ」

昔を思い出しつつつ算に笑いかけると、算は顔を真っ赤にして俯いてしまった。

あれ？なんでまた怒ってんの？俺何かまずいこと言った？

俺がどう対応していいのか分からずじまいになったとき、丁度チャイムがなった。

それに合わせて野次馬たちも散っていく。

「俺たちも戻るとしよう」

「あ、ああ・・・そうだな・・・」

やれやれ・・・次の授業も一杯一杯になりそうだ。

第1話 大体最初って皆同じ感じだよね（後書き）

最初の方はやっぱりどれも同じ感じになっちゃいますね。

次からはちょっとずつですが頑張って変えていこうかと思っています。

第2話 なんでこう、金髪の人って偉そうにしてる人が多いんだろう？（前書き

なんかさっさと出来ちゃったので（本人比）投稿しちゃいます。

私、結構セシリア好きなんですよ？でもこの頃のはあまり好きじゃありません。

第2話　なんでこう、金髪の人って偉そうにしてる人が多いんだろう？

「で、あるからしてISの基本的な運用には現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合、刑法によって罰せられ・・・」

というわけで次の授業。・・・うん、難しいね。どうにかこうにかついていってる感じだよ・・・。

というか教科書5冊も使う授業なんて初めてだよ・・・

でも成績不振者にはなりたくないので頑張ってノート撮ってます。でも節々でまったくわからないところがあるんだよね・・・しようがない、放課後あたりに山田先生に聞きにいくか。聞くはひと時の恥聞かぬは一生の恥（であってるよな？）だしな。

「・・・今までの所で分からない人はいますか？」

すると山田先生が張り切ってクラス中にわからないところがないか

質問する。

・・・丁度いいか。後で聞きに行きますっていつとけば・・・

俺は素直に手を上げる。

「あ、はい。織斑くん。どこがわかりませんか？」

「すみません。かなりの所がわからないので放課後聞きに行きたいのですが、お時間よろしいでしょうか？」

「え、えと、わかりましたっ！バンバン聞きに来ちゃってくださいっ！！」

「・・・織斑、事前に渡した参考書は読んだか？」

すると、今まで静観していた織斑先生が俺に質問する。ああ、あの分厚いやつか・・・

「・・・一通りは読みました。ですが一カ月とちょっとではすべては理解できませんでした」

「・・・そうか・・・」

そうなんだよな。読みはしたんだけど難しくってさ・・・何度か読み返したんだけど、一か月ぐらいじゃキツイって・・・

「ほ、放課後・・・放課後にふたりきりの教師と生徒・・・。あつ！だ、ダメですよ、織斑くん。先生、強引にされると弱いんですから・・・それに私、男の人は初めてで・・・で、でも、織斑先生の弟さんだったら・・・」

妄想力逞しいな、おいつ！？・・・IS学園の人は男性に対する免疫がないというのは本当だったか・・・

その後織斑先生が山田先生をもとに戻し、授業は再開した。

二時間目が終わった後、俺はひたすら復讐……あ、間違えた。復習。……うん。やっぱり難しい。いや、分かってるんだ。こんなに難しいのは訳があるって。

ISは『兵器』だ。簡単に色々なものを破壊することができる。そして兵器を深く理解せずに使えば必ず事故が起こる。そうしないためにこうやって勉強しているのだ。

だとしても……うん。難しい……

「ちよつとよろしくって?」

俺が内心うんうん言いながらノートと教科書を見直していると、いきなり声をかけられた。

「・・・何か？」

「まあっ！なんですの、そのお返事っ！わたくしに光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「・・・」

で・た・よ。

正直に言って俺この手合いすっごい苦手。女は絶対的に偉いんだ〜みたいなヤツ。こついの基本関わらないようにしてきた。だって相手にするとつざいんだもん。

「申し訳ない。だが、俺は君のことは知らない。初対面の人にそう言われても困るだけなのだ」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットをっ！？イギリ

スの代表候補生にして入試主席のこのわたくしをつ！？」

「……セシリア・オルコット？ああ、あの第3世代型IS『ブルーティアーズ』のパイロットか……」

それに確か名家の出だったはず……

「それは失礼した、ミス・オルコット。名前は知っていたのだが顔までは知らなかった。……まことに失礼した」

「ふん、ならばいいですね。まあ、わたくしは心が広いですから許してあげましょう」

自分で心が広いつて言ってる人って大体広くないよね。

「それで、俺に何か用かな？エリートたる代表候補生の者が」

「そうエリートなのですわっ……！」

・・・なんだこの人。急にテンション上がったぞ。

「本来なら私のような選ばれた人間とあなたのような者がクラスを同じくするだけでも奇跡・・・幸運なのよ。そこるところをもう少し理解していただけないかしら？」

まあ、そうだろうな。男で代表候補生と一緒にクラスになるなんて俺が初めてだろうし。

「そう言われてもな。ミス・オルコット・・・今の俺にとっては何もかもが衝撃的すぎるんだ。確かに君と同じクラスになれたのは幸運だと思いがな・・・エリートたる君なら理解してくれるだろ？」

「・・・むっ・・・まあ、それは仕方ありませんわね・・・」

おお、理解してくれたよ、このエリート（笑）。おじさんは嬉しいよ・・・って俺はおじさんじゃないだろうが・・・

俺が内心で一人突っ込みをしてると、チャイムがなり、ミス・オルコットは自分の席へと戻って行った。

ああ・・・せつかく見直ししようと思ったのに・・・

次の時間はどうやら織斑先生がやるようだ。

織斑先生は教壇に立つと次の言葉を言い放った。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

そういえばあの人に頼んでおいた（というか既に作り始めていた）俺のIS、どうなってるんだろう・・・一応希望は言っておいたからいいかな？

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

何それ？めんどくさそ〜・・・俺はやりたくないな〜

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会などへの出席…まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが競争は向上心を生む。一度決まると何か大事が無い限り一年間変更はないからそのつもりで」

・・・それって別々にした方がいいと思うのは俺だけ？強いイコール統率力があるってわけでもないんだしさ・・・

「はい。織斑君を推薦しますっ！」

ウェーイ。やっぱりね〜

予想はしてたさ。どうせ唯一の男だからそうした方が面白い、とか
そういうオチだろうが。

「私もそれがいいと思いますっ!!」

「では候補者は織斑一夏・・・他にはいないのか？ 自薦推薦は問
わんぞ」

とりあえず、織斑先生にしつもん。

「先生、質問があるんですが・・・」

「何だ？」

「他薦の場合、拒否は「出来るわけないだろう」・・・分かりま
した・・・」

イギリスも島国だよ。そしてついに人扱いじゃなくなった俺涙目。

「いいですかっ！？ クラス代表とは実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわっ！」

確かにね、代表候補生ってうちのクラスじゃあんただけだし。確かに他には4組に一人だけ？

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては苦痛」

「そこまでしておいたらどうだ？ 品格を疑われるぞ？」

「なっ！？」

クラスの視線はミス・オルコットの言葉に口を挟んだ人間、つまり俺に注がれた。

・・・あちゃあ、つい口出ししちゃったよ・・・いやさ、いくらなんでも言い過ぎだからつい、ね・・・

「大体、イギリスも日本と経済的な差は対してないだろう？・・・違いがあるとするれば、それこそ文化や言葉の違いぐらいだな」

「あ、あ、あ、あなた！私の祖国を侮辱しますの！？」

「今の発言でどこが侮辱になるのか気になるところだな。更に言えば先に侮辱したのはそっちが先だと俺は思うが？」

俺は頬杖をついてオルコットを見る。・・・こいつに敬称はもつけないな。

そんな俺の態度が気に入らなかったのか、オルコットは机を叩きながら宣言した。

「決闘ですわっ！！」

「・・・ふう・・・なんでそこで暴力的解決になるのか、かなり気になるところだな。イギリスでは気に入らなかつたらすぐに決闘を申し込む国なのか？」

「一度ならず二度までも・・・絶対に許しませんわっ!!」

「・・・この人、そもそも自分の行動がイギリスを貶めているって気づいていないのかな？」

「・・・そつちがそれで納得するのなら、それでいいだろう」

「言っておきますが、わざと負けたりしたら私の奴隷にしますわよ」

「・・・わざと負ける理由がどこにあるのか、聞きたいな」

「そう？ 何にせよ丁度良い機会ですわ。イギリス代表候補生、この私、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわねっ！」

「・・・ダメだ。そろそろ切れそうだ。まるで俺が悪いみたいな風に言

つてくるし、俺の負けが確定みたいに言ってくる。ここまで侮辱されるとさすがの俺も、ね……

「それで、ハンデほどの程度つければよろしいのかしら？」

「結構だ」

一瞬、教室に静寂が広がる。遅れて爆笑の渦が起こった。

「お、織斑君、君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強いなんて大昔の話だよ」

「……別に俺はそんなこと思っちゃいないがな。」

俺はキレそうなのを必死に堪えている。

すると、黙っている俺に向かって、周りの女子が気さくに話しかけ

てくる。その苦笑と失笑が混じった表情は、俺が負けるのを確信してる表情だった。

「ねー、織斑君。今からでも遅くないからセシリアにハンデつけて貰ったら？」

「代表候補生を舐めすぎだよ」

「……あゝもうダメだ。我慢できない。……意外と沸点低いなあ、俺。」

「ならば、俺も言わせてもらおう。男を舐め過ぎた貴様ら」

俺がそう言い放った瞬間、周りが静まり返った。

「ISなんて所詮一介の兵器にすぎない。それにISは借り物だろ？ なんせ自分じゃ作り出せないんだからな。その借り物がなければ威張れないようなやつらが偉そうにするな。これこそまさに虎の威を借りる狐だな」

』・・・・・・・・』

・・・・で、だんまりか。どうやら、IS無しでも胸を張れる人間はここにはいないみたいだな。というかこの程度の話なら、論破しようとするのなら出来るのに・・・

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

そして我が姉上は何事もなかったよーに授業を始めた。・・・・千冬姉さんやっばあんたすごいわ・・・

その言葉を聞いてクラスが再び起動し始めた。俺も授業の準備を始めるとするか・・・

・
・はあ、やっぱり人生って日々平穩ってわけにはいかないのね・・・

あの時キしなければよかったなあ〜トホホホ、と内心泣きながら俺は今日の残りの授業を受け続けた。

……というか、入学式の日にこれって……もしかしてこれが毎日続くのかっ!?!それはさすがに嫌だぞ……助けて〜だれか

第2話 なんでもこう、金髪の人って偉そうにしてる人が多いんだろう？（後書き

PVが早くも2000越えて・・・早すぎですよ・・・

マジで驚きました。では、今後もよろしくですっ！！

第3話 ナオミさんのコーヒーはコーヒーじゃないっ!! (前書き)

え、昨日、更新できずに申し訳ございませんでした。実はワタクシこの4月から大学生なのです。そのための準備に多々追われていまして・・・本日も夜遅くになってしまいました・・・誠に申し訳ございませんでした。

ではこんな駄文でよければ・・・どうぞっ!!

第3話 ナオミさんのコーヒーはコーヒーじゃないっ！

「……………」

「……いや、もう無理……何この世界初の珍種みたいな扱い……
つて俺まさしくそうじゃん……orz……」

机に思いっきり突っ伏したいが、周りの目があるのでそれを我慢。
今は山田先生に質問したい箇所を纏めてるところです。あ、ちなみに今は放課後です。

「ああ、織斑君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「……山田先生。今丁度質問にいいことと思ってたところです」

「そうだったんですか……入れ違いにならなくてよかったです」

「それで、何か用ですか？」

「あ、そうでしたっ！・・・えつとですね、寮の部屋が決まりました」
へ？寮の部屋？・・・おつかしいな、確か俺ってしばらく自宅通いのはずだけど・・・

「・・・山田先生、俺は少なくとも一週間は自宅通いと聞いていたんだが・・・」

「そうなんですけど、事情が事情なんで一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したみたいです。・・・織斑君はそのあたりのことって政府から聞いてます？」

最後の方は俺にだけ聞こえるように耳打ちしてきた。

・・・なるほどな、政府としても『世界初の男性操縦者』の保護と監視を同時にしたいわけだ。

まあ、下手したら誘拐もあり得るからな・・・いや、やるにはリスクがデカイ、か？まあとにかく、守るに越したことはないな。

・・・おおつ、ガツチガチになるのですか・・・プライバシーはあるよね・・・？

「そういう訳で、政府特命もありまして、とにかく寮に入れることを優先してみたいです。一ヶ月もすれば個別の部屋が用意できるので、それまで相部屋で我慢してください」

ほうほう・・・相部屋か・・・・・・・・ん？相部屋？

「山田先生・・・相部屋とい「山田先生、いつまで織斑とくっついてるんだ？」」

「あ、すすすいませんっ！！」

おおつ、この声は我が至上の姉上・・・もう何いってんだかわけわかんなくなってきた・・・

千冬姉さんの方を改めて見ると、何故か不機嫌そうだった。いや、弟である俺から見てね？・・・なんで不機嫌？あれか、将来有望の先生に愚弟がくっついていたからか？

「・・・織斑先生、相部屋というのは？」

「ん？ああ、そのことが・・・安心しろ、部屋は篠ノ之と同じだ。そして荷物も必要最低限のものは持ってきた」

「・・・いや、どこをどうもって安心しろと？幼馴染とはいえ、6年近くも会ってなかったんでよ・・・あ、間違えた。だよ？そして準備速いなおいっ！？」

「織斑先生、年頃の男女が相部屋というのはマズイと思うのですが・・・」

「そういう風に言うヤツに限って間違っただことをするなんぞありえん」

「・・・それって俺を信じてるのか、俺をへタレって言いたいのか、分かんないんですけど・・・」

まあ、どのみち断れないのは分かってるんだよね〜・・・

「・・・織斑先生、この事、箒には言ってるのですか？」

「いや、まだだ」

「・・・ウエイっ！！！！何でそんなこと言っておかないのさっ！？」

「・・・では、織斑先生・・・俺は山田先生に質問があるので、その間に箒に知らせておいてくれませんか？」

「・・・まあ、それくらいならいいだろう。・・・あまり遅くなるなよ」

「分かりました」

やれやれ・・・面倒だが、仕方が無いか・・・

一夏はその後すぐに荷物をまとめ山田先生と一緒に職員室に向かった。私が教えても良かったんだがな・・・あいつは身内贔屓は好まないし、山田先生が先に約束していたからな・・・

二人が教室を出たのを見届けた後、私は一夏が住む寮の部屋である、1025室に足を運んだ。

扉の前に立つとノックをして篠ノ之がいるか確かめる。

コンコンッ

「私だ。篠ノ之、いるか？」

『お、織斑先生っ！？ちょ、ちょっと待って下さいっ！...!』

・・・ドタバタ、音が聞こえる。何をそこまで慌てる？まあ、いい。待ってやるか。

『ぎゅ、ぎゅぎゅ・・・』

「失礼する」

少し待ったら許可が出たので遠慮無く入らせてもらう。

入るとそこには少し緊張した様子で椅子に座ってる篠ノ之がいた。

・・・少し髪が湿ってるな・・・シャワーを浴びていたのか・・・

「そ、それで一体何の用でしょうか？」

「ああ。お前のルームメイトについてだ」

「そういえば、まだ着いてませんが・・・何かあったのですか？」

「いや、そういう訳ではない」

「ではどういう・・・？」

いざ、その話題に行こうとして、私は急に胸の中に現れた激情を抑えるために深く深呼吸した。

「・・・非常に、非常にっ！不本意だがっ！！・・・
・お前のルームメイトは一夏に決まった」

「・・・ええええええっ！？」

パンツ！

「しゅん」

「す、すいません・・・」

気持ちは分からないでもないが、あまりにもうるさかったので、手に持っていた出席簿で頭を叩いた。

・何でこいつが一夏とルームメイトになるんだ・・・っ！

「お、織斑先生っ！！さすがに年頃の男女が同じ部屋というのはマズイのではっ！！!?」

「今、寮には空室がなくな・・・それに政府が寮に住ませろ、と特命を出してきた。相部屋にするにはまだ幼馴染であるお前のほうがいいだろうと判断した。・・・非常に不本意だがな」

(そこまで不本意ですか・・・)

「当たり前だ」

「心読まないでくださいっ!!」

篠ノ之の言葉は無視して、私は筭に近づぐ。

「あいつに負担をかけるようなことをしてみる。ただではすみません」

「……はい」

side out

「とまあ、こんな感じですね」

「どうもありがとうございました」

「い、いえ……これも教師のつとめですからっ」

ふむふむ……そういつことが……さすが、山田先生……分かりやすかった。

「では、失礼します。今日は本当にありがとうございました」

「あつ・・・ちよ、ちょっと待ってくださいっ！」

「何か？」

「え、えつとですね。まだ伝えていないことがありました。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど・・・織斑くんは今のところ使えませ
ん」

あゝそっか・・・男女別になってないもんね・・・風呂結構好き
なんだけど、仕方ないね

「分かりました。しばらくはシャワーで我慢します」

「すみません・・・お願いします」

「・・・では失礼します」

「あ、はいっ！またいつでも来て下さいっ！！」

「はい」

「1111か」

俺は現在、1025室前に来ておりますっ！

さあ、この扉の向こうにはぶっちゃんけ子供の頃から『この子、阿修羅かつ!!』とっておりました篠ノ之箒がいるわけですよ!!

朝の時はおそらく周りの目があったからおとなしかったのでしょ。

・・・

皆さん、俺の遣唐を・・・間違えた・・・健闘を期待してくださいっ!! 今までのご愛読アリガトウございましたっ!!

・・・冗談ですよ? 2割くらい。

さて気をとりなおして入るとしますか・・・

コンコンッ

『誰だ？』

「俺だ。箒入っていいか？」

『い、一夏かつ！？・・・入っていいぞ』

「分かった」

許可が入ったので入りまゝす。

入るとそこには剣道着を纏った箒がいた。おお、凛々しさが5割増ぐらいになってるぞ。

「織斑先生から話は聞いてると思うが、俺がルームメイトだ。よろしくな」

「あ、ああ・・・」

何故か勢いがない筈……何故？

「…………お前が…………」

「ん？」

「お前が希望したのか…………？私の部屋にしろと…………」

「いや、勝手に決められていたな」

「そ、そうか…………」

……………何故か雰囲気グズーンと沈んだ筈。り、理由が分からない……………同世代の子ってこんな感じなのかっ！？

「俺にとっては、お前との相部屋はかなり嬉しかったが…………いやなら変わってもらっぞっ？」

「い、いやっ！！そんなことはまったくないっ！！！まったくだっ
！！！！！！」

み、ミミガー・・・じゃなくて耳が・・・あれ意味似てる？

それはおいといて。箒、声大きすぎ・・・

「・・・・・・・・箒、声が大きい。周りに迷惑だ」

「あっ！す、すまない・・・・・・・・っ」

そしてシュンと落ち込む箒。・・・ああ、もうっ！入れ替わり激し
すぎっ！！

俺はとりあえず話題を変えることにした。

「箒、とりあえず決まりを考えよう。お互い暮らす上での線引きは
必要だ」

「わ、分かった」

・・・ふう。ようやく元通りだぜ・・・

「何かあるなら言ってくれ。最大限そちらの言つとおりにしよう」

「で、では・・・まず、シャワー室の使用時間なのだが、私は七時から八時。一夏は八時から九時を提案する。部活後に直ぐシャワーを使いたい」

部活・・・剣道部か。相変わらずやってるんだねえ・・・

「部活棟にもシャワーがあったと思うが？」

「わ、私は自分の部屋でないと落ち着かないのだ・・・」

「そうか・・・分かった。それでいい。・・・他に何かあるか？」

「いや・・・特にはないな・・・」

そかそか。ならよかった・・・

あ、そういえば・・・最低限つてことはあれは入ってないよな・・・
・今度の休みに取りに行くしかないか。

「次は俺からだな。・・・今はここにはないが、俺はコーヒーマ
ーカーを持っててな。基本自分で淹れて飲んでるんだ。だから淹れ
てもいいか、許可がほしいんだ。嫌なら食堂でやるのだが・・・」

「別にそれくらいならいいぞ。・・・というか、一夏。お前、コー
ヒー好きだったんだな・・・」

「ああ。・・・前にちょっとあつてな・・・」

おやつさんが自分で淹れて飲んでたからな。それから自分でも淹
れ始めてコーヒー飲み始めたんだっけ？

そこから更にハマったのは愛理さんのコーヒーが美味かったから、自分でも出せないか模索し始めたんだよね。今だにあの味は出せないな・・・うん、コーヒーは奥が深い。

その後、俺と篤は色々決め事をした後、夕食を取って、眠りについた。

あゝそうだ・・・今度デンライナーの皆に会いに行こうと・・・最近忙しくていけなかったからね。

第3話 ナオミさんのコーヒーはコーヒーじゃないっ!! (後書き)

文章を考えるのは結構好きなんですよ。ただ、あまり時間がないのと、今まで読み専だったので打ち慣れていないんですね・・・

では、感想待ってますっ!!

第4話 天才とは常識を塗り替える存在である(前書き)

また遅くなってしまいました・・・申し訳ございません。

ではでは、どうぞっ！

あ、出来れば感想をください。やっぱりあるとないとはある方が断然やる気が出るんで。

第4話 天才とは常識を塗り替える存在である

翌日、俺は筭と共に食堂に行き、朝食を取ることになった。

筭は和食メニュー、俺は洋食メニューだ。じゃないと、コーヒーが付いてこないんだ……

毎朝俺はコーヒーを欠かさない。前までは朝早く起きて自分で淹れてたぐらいだ。

でも、このこのコーヒーはな……イマイチ……でも、少なくとも一週間はこれで我慢か……

「お、織斑君っ、隣いいかなっ!？」

「ん？」

話しかけられた方を見ると、そこには朝食のトレーを持った女子が

三名、俺の反応を待ちわびるが如く立っていた。

「ああ。一緒に食べようか」

大勢で食べたほうが美味しいからね。早く友達作りたいし。

俺がそう言うと声をかけてきた子は安堵の溜息を漏らして、後ろの二人は小さくガツポーズ。そしてその際に聞こえた周囲の声は無視。・・・うん、なんか嫌な予感がしたんだ。

その後、その3人と色々と話しながら朝食を終えた。その際、箸が不機嫌になって先に行ってしまったが・・・何故？

さてさて、休み時間。だとしても、何処へ行っても、何をしても女の子ばかりのここ、IS学園。

やれやれ・・・ひとりだけの時間が欲しいんだぜ・・・。

「ねえねえ、織斑くんさあ！」

「はいはい、質問しつもん！」

「今日のお昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

山田先生と織斑先生が出ていった途端、女子の半数がすごい勢いで俺の机に詰めかけてきた。

・・・怖いです・・・

「とりあえず、落ち着こうか。一編に聞かれても、少なくとも俺は答えられない」

そしてそこっ！何整理券（有料）配ってんのっ！？人を使って商売

するなっ！！少なくとも許可とろっよっ！！

しかも、筈がまた不機嫌になってるしっ！！何でっ！？何でっ！？
もう訳分かんないっ！！！！！！

・・・ウエイ・・・取りあえず落ち着こう・・・・・・ビークール、
ビークール。

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの？」

「それは言えないな」

「え？なんで？」

「女性というのは秘密というボールを纏ってるからこそ美しいらしい。それに・・・」

「それに？」

「本人のいる前では喋れないだろう？」

「へっ?」

「とつとと席につけ。バカども」

俺の周りの女の子たちが素っ頓狂な声をあげた瞬間、その子たちにはまさに地獄からの呼び声が響き渡った。

まあ、俺は気づいてたけどね。いやいや、皆の慌てる姿は面白いね。

その後、皆が席についた頃を見計らって、授業は始まった。

「そつだ、織斑。お前のISだが準備まで時間がかかる」

へっ？・・・それって政府で用意してること？

「・・・織斑先生、それは政府で用意してるということですか？」

「そつだ」

「・・・・・・申し訳ありませんが、その必要はありません」

「・・・どういう事だ？」

「自分のツテを使って用意しているからです」

俺がそういうと、織斑先生はハア〜とため息をついた。・・・うん。千冬姉さんなら分かるよね。俺がIS関係でツテを持つてるのはあの人と千冬姉さんぐらいだし。

「どういふことですので、政府にはそう伝えてください」

「・・・・・・・・分かった」

あの人のことを言えば、さすがの政府も黙るでしょう。

クラスメイトは話しについていけないのか、疑問符を頭の上に出してる。あ、箒以外ね。箒は分かってるからね。

その後、箒とその姉についての暴露があったが、概ね原作通りと言った感じだ。・・・・・・・・原作って何だ？

「間に合つのですか？」

「・・・・・・・・さあな。あの人は気まぐれだ」

一瞬、何を指してるのか分けわかんなかったけど、次の瞬間には返

答してた。・・・やっぱり会話においては、主語は確実に必要だと思うんだ。

「まあ、訓練機ではないようであんまり安心してましたわ」

「さすがに、そこまでは馬鹿ではないつもりだ」

「どのような機体で来ようともこの私、セシリア・オルコットにはかないませんけどっ！」

「まあご期待に添えるようにやらせてもらっさ」

兎にも角にも、まずISに慣れなくちゃいけない。でも、昨日聞いた話だと、訓練機の申請にはかなりの時間が掛かるみたいだ。

「・・・どうしたモンかな。今やれること・・・情報収集かね？それなら一番適した人いるね。」

という訳で、昼休み。え？飛ばし過ぎだった？気にしちゃいけない。

箒やクラスメイトの誘いを断り、俺は屋上である人に電話をする。

『はい。こちら鳴海探偵事務所』

「久しぶりだな。兄弟子」

『お前っ！その声、一夏かつ！？久しぶりだなっ！お前色々大変みたいじゃないかっ！TVで見たぞっ！！』

「あゝまあ、これについては大体、予測はついてる。まあ、そこは置いて、フィリップさんはいるか？」

『ん？何か探しものか？』

「ああ。対戦相手の情報っていうな・・・」

そう言つと電話の向こうからため息が聞こえた。

『お前・・・早速厄介ごとに巻き込まれてるのかよ・・・』

「ただ一人のISを動かせる男だ。巻き込まれないほうがおかしいな」

『やれやれ・・・分かった。変わるからちよつと待ってる』

「ああ」

こつちだつて巻き込まれたくないって・・・でも、向こうからかわせないスピードで突っ込んできたら無理でしょ？

『もしもし？』

「久しぶりだな。フィリップさん」

『久しぶりだね、一夏。なかなか面白いことになってるじゃないか。一体どうしたらそうなるのか、興味深いね』

「生憎とその質問には俺も答えられない。．．．それより、調べてほしいことがある」

『対戦相手の情報だったね。．．．それでキーワードは？』

「キーワードは『セシリア・オルコット』、『ブルーティアーズ』の二つだ」

『分かった。．．．では検索を始めよう』

その後、対策を練るのには十分な情報が集まった。．．．なるほどね、そんな弱点が．．．

「なるほど．．．十分だな。これだけあれば対策は十分に練れる」

『それはよかった。ところで、いつ対戦するんだい？』

「月曜だ。結果はおつて連絡する。依頼金も振り込まなくてはいけないしな」

『依頼金は入らないよ』

「いや、払わせてもらう。こういうのはちゃんとしたケジメが必要だ。それに・・・」

『それに?』

「そろそろ、所長の結婚式だろう。そのための準備金に使えばいい」

『・・・・・・分かった。ありがたくもらうよ』

「是非そうしてくれ。ではまたな」

『ああ。勝利を祈ってるよ』

激励を受けて、俺は通信を切る。・・・・さあてと、十二分に対策を練るとしますか。

そうして、放課後。寮への帰り道。

只今、頭の中でシュミレートちゅ〜。うむむ、やっぱり自分の機体がどの程度か、正確に把握してないからな〜。

そんなこと考えながら歩いていると、道のど真ん中にウサミミがあった。そしてその横には『引き抜いて下さい』と書かれた看板が立っていた。

……とりあえず、千冬姉さんに連絡。

『どうした、織斑？』

「千冬姉さん。あの人 came た」

『……………何っ!?!どこにだっ!?!』

「寮への道のと真ん中。ウサミミがある」

『分かったっ!今からそっちに行くっ!』

そして連絡を切った。……………とりあえず、引き抜くか。

俺はウサミミを思いっきり引っこ抜いた。するとその先には……………
『外れ』と書かれた紙が付いていた。

……………あれ?じゃあ、どこに?

すると上空から風を切り裂く音が聞こえた。

キイイイイイイインツ!!!!

思わず上を見ると、そこにはニンジン型のミサイルが落ちてくる様子が見えた。

……ミサイルっ!?

俺は慌てて後ろに下がる。そして次の瞬間、着弾。

「にゃははははっ!!--引っかかったね、いっくんっ!!--」

その言葉とともにニンジンが縦にぱっくり割れた。そこから現れたのは、

「一か月とちょっとぶりだな。束姉さん」

篠ノ之束。現在行方不明とされるIS発明者だ。

「とりあえず、健康そうで何よりだ。東姉さん」

「東さんはいつでも元気だよっ！ブイブイっ！！」

「千冬姉さんがもう少しで来るから待ってくれ」

「うんっ！分かったよっ！」

ちよつと待つと千冬姉さんがすぐにやってきた。

「ちーちゃんっ！ー！やっほーっ！ー！」

「東・・・お前は少しは周りのことも考える」

「千冬姉さん、それを東姉さんに言うのは無駄だと思うが」

俺がそう言つと千冬姉さんは思いつきり溜息をついた。

「とりあえず、このあたり一帯は封鎖しておいた。．．それで束、
一体何のようだ？」

「いつくんのISを持ってきたんだよ〜っ！もちろん、いつくんの
ご注文通りに仕上がってるよっ！！！」

あ〜それで来たのね。どうやって持ってくるのか気になってたけど、
まさかこんな派手に持ってくるとは．．．

「あ、後ねっ！いつくん分の補給に来たんだよっ！！！」

そう言つちや否や、瞬時に俺に抱きついてきた。

「う〜久々のいつくんのぬくもりだ〜」

「・・・相変わらずよく抱きついてくるな、束姉さん」

「だって一か月も会えなかったんだよ？」

「そこまで長くないと思うが・・・」

「束さんには十分に長いんだよ」

そのまま俺が抵抗せずに抱き合っていると、なぜか不機嫌になった千冬姉さんが無理矢理引き剥がした。

「もういいだろう。それよりISはどこだ？」

「うゝもうちよっと抱きついてたかったのに」。ま、いいや。ではではっ！上空を「覧あれっ！！」

すると、上空から金属の塊が降ってきた。・・・危なっ！？当たったらどうするんだよっ！？

その塊は黒と赤でカラーリングしてあった。

「これがいつくん専用機、『黒菊』だよっ!!」

「……………黒菊……」

また大仰な名前なこと。……………菊、ね。花言葉は高貴、真の愛とかか……………俺には似合わないな……

まあ、名に恥じぬようにやるしかないか……

第4話 天才とは常識を塗り替える存在である（後書き）

正直に言っていてISのなかで束さんは3番目に好き。あの自由奔放さがなんと微笑ましい・・・

第5話 ガンマン気持ちいいよっ！！（前書き）

感想書いてくれた方々、ありがとうございましたっ！！そして前回催促を求める書き方をして申し訳ございませんでした。

では、どうぞっ！あ、今回ご都合主義が入ってると思われまますのでそれが嫌な方はお戻りください。

第5話 ガンマン気持ちいいよっ!!

「じゃあ、フォーマット初期化と最適化ファイティングをとっと終わらせちゃおうっ!」

「ああ、分かった」

俺はそのまま黒菊に近づく。すると、自然に開いて俺が入れるようになる。俺は臆せずに装着する。嫌、だって束姉さんには全幅の信頼を寄せてるからね。

あ、ちなみに外見は原作の白式にバイザーを付けて、色を黒と赤にして、メカっぽくした感じ。……また電波が……

「まあ、一か月前のデータを入れてるから、ちょっと調整するだけなんだけどね」

「そうだとっても、やらなくてはいけないな。一つの綻びが重大故を生む」

「うんっ！ちゃんと分かってるよ、いっくんっ！」

そうこうしている間に全部の調整が終わったのか、黒菊につながっていたコードが全部外れていった。

「これで、黒菊はいっくんの完全な専用機になったよっ！で、色々試したいんだけど」

「・・・アリーナがある。そこまで移動しよう」

「分かった」

なので、一旦黒菊を待機状態に移行させる。すると、黒菊は黒いブレズレットに姿を変えた。

俺たちはそのまま、アリーナまで歩いて行く。束姉さんはニコニコしながら、俺はそんな束姉さんが微笑ましく、小さく笑いながら、千冬姉さんはそんな俺たちを見て呆れながら。

ちなみに、アリーナも封鎖状態にしてるらしい。こうなることは予測できたとか。……さすが我が最強の姉上。幼馴染の事になると勘が冴え渡りますなあ。

で、アリーナ到着。そして誰もいない。……なんか超嬉しい。……いや、姉さん達いるけどね。

「そういえば、束姉さん……箒に会いに行かなくていいのか？」

「んー今日はいいや。それよりもいっくんと一緒に居たいから」

「……そうか」

「……まあ、箒は束姉さんのことあまり好きじゃないみたいだしな。いいか。」

「じゃあ、展開してねっ！」

「分かった」

言われるがままに黒菊を展開する。

「まずは基本武装だね。基本武装は拳銃だね。ちなみに注文通り二丁だよ」

そう言われて俺は武装を展開する。すると、両手に黒い拳銃が現れた。・・・かなりゴツイ・・・

「今右手にあるのは威力と速度重視の拳銃、『黒雷』。で、左手にあるのが連射重視の拳銃、『黒嵐』。手の入れ替えも、実弾とビームの入れ替えも可能だよ」

とりあえず、試し打ち。・・・ヤッバイ。超俺好み。

「そして、その背中の翼にレールカノンが二つ、収納されてます」

また言われたとおり展開。見た目は肩から砲門が突きでてる感じ。再び試し打ち。もちろん、方向は空中だよ？

・・・威力は全く問題なし。というか何も言う事なし。

「この翼はね、スラスタにもなっててね、瞬時的加速は全I S T
ツプだよっ！そしてレールカノンを取り外し可能だからね。そして武装はもう二つあるのだ」

まだあるのっ！？俺はそこまで注文してないよっ！？

「二丁のショットガンなのだ。これも実弾とビームの入れ替えが可能だよっ！ちなみにエネルギーパックを3つつけてるから、武装によるエネルギー切れは心配しないでいいよ」

というわけで、ショットガンを取り出しての試し打ち。・・・もうサイコーっ！！もう完璧っ！！

「そして、これが最後。 雪片式型」

っ!?!? 雪片

俺は何も言わず、何も思わずただ雪片式型を取り出す。 そ
つくりだ。千冬姉さんが使ってたのと

「ちーちゃんが使ってたのの後継型。 零落白夜も発動可能
だよ」

「まで。それだと、最初から単一仕様能力ワンオフアビリティが使えるということか?」

「そうだよ。 ちーちゃんといっくんには言っとくね。黒菊
にはコアを二つ使ってるの」

「何だっ!?」

「その一つに雪片式型と零落白夜を入れてるの。そしてそれ以外の
武装とかをもうひとつの方に入れてるんだ」

「……正直に言って今の俺にはあまり頭に入っていないかった。何故なら、今の俺には雪片式型で頭がいつぱいだったからだ。」

でも、事の重大さにそれを頭の隅に追いやる。

「……つまり、この黒菊には二人分の意思が入ってるわけか……」

「うん、そうだよ。……あんまり驚かないね、いつくん」

「正直に言って束姉さんがやることにいちいち驚いたらキリがない、と思ってるな」

「……ああ、確かに」

「あーっ!! いつくんもちーちゃんもヒドイっ!!」

俺はISを待機状態にして、ブンブンと怒り始めた束姉さんの頭を撫でる。

「ありがとう、束姉さん。この機体なら絶対に戦っていける」

「はにゃ〜。……うん、それなら何よりだよっ！束さん、大満足っ！！」

機嫌が直ったようで何より。

「それで、他には言いたいことはあるか？」

「ん〜特にないかな〜。今日はこのために来ただけだし〜」

「なら、そろそろ帰ったほうがいい。探知されないからな。まあ、束姉さんならありえないと思うが念のためな・・・」

「ん〜……いっくんがそう言うならソロソロ撤退しようかな〜・・・うん。今日はもう帰るね〜」

「ああ。気を付けてな、束姉さん」

「今度来るときは連絡の二つでもしてから来い」

「うん。分かったっ！ーじゃあねっ！ー！」

束姉さんはそう言つと、再び二ンジンを展開。そして逆噴射して飛んで行つた。……あの二ンジン、空飛べるんだ……

「やれやれ……やっと静かになつたな……」

「そう言つてやるな、千冬姉さん。……俺は好きだがな。あの自由奔放さは……」

「あいつのは自由奔放じゃなくて、身勝手と言つんだ」

「ふう……相変わらず厳しいな、千冬姉さんは」

「「いねぐらひ、普通だ」

イヤイヤ。絶対普通じゃないって……ああ、でもこうやって姉弟として話すのは久しぶりだなあ……

「……さて、そろそろ戻るとするか。何時までも封鎖してるわけにはいかんからな。……という訳だ。練習は明日からだな」

「ああ、分かった」

その後、俺は先に部屋に戻り、織斑先生は職員室へと戻っていった。

「只今」

「お帰り、一夏。帰りが遅かったがどうした？」

部屋に戻ると、どこか心配した様子の篤が待っていた。

「ああ。ISの受け渡しをした」

「ISの？・・・ということとは？！」

「ああ、来てたよ。東姉さん」

俺がそう告げると、篤は複雑そうな顔をした。

「・・・やっぱりまだ嫌いか・・・」

「そ、そういえばどんなISなんだ？」

「ん？ああ。・・・これだ」

俺は、篤の急な話題転換に突っ込まず、普通に対応する。

「……これはやっぱり個人の感情の問題だしな。……俺が口出していいモンじゃないよな」

「名前は黒菊。世代までは聞いてなかったな。……まあ、おそらく第3世代だろう」

「……黒菊か……いい名だな」

「ああ。こいつの名に恥じぬように頑張らないとな」

「そうだな。……で、では一夏……」

すると急に篤が顔を真っ赤にして話しかけてきた。

ん？どっ たんだ？

「何だ？篤」

「・・・わ、私がISの操縦について教えてやるっつ！」

「いや、大丈夫だ。山田先生に教えてもらっつ」

俺がそういつた瞬間、空気が固まった気がした。・・・ん？一体どうした？何があったのっ！？

俺が内心オロオロしていると、筈がすごい形相で掴みかかってきた。

「何故だっ！？何故私ではなく山田先生なのだっ！？私は幼馴染だぞっ！？・・・あれかっ！？あの胸かっ！？わ、私もあれほどはな
いが大きいぞっ！！それに私のほうが将来性があるっ！！！」

「・・・何の話をしてるのか、さっぱりだ」

うん、ごめん。まったく何言ってるのか、分かんない。

とりあえず、山田先生に教わるのが原因なのかな？

「・・・箒、俺が山田先生に教わるのは、あの人が教師だからだ。それにあの人は実力もある」

「・・・何？そんなのか？」

おお。少しは落ち着いたみたいだ。

「あの人は元代表候補生だ。それにあの人は人に教えるのが上手い」

「うっ・・・」

「それに生徒が教師に教えを請うのは普通だろう？」

「うっ・・・」

「更に言えば、俺は射撃型だ。箒はおそらく近接型だろう？教えられることはないと思うが・・・」

「・・・」

．．．．．沈黙。というか、泣きそう。．．．．．あれっ!？
俺なんかまずい事言っただっ!？極めてふつつのコト言っただよねっ!？
．．．と、とりあえず慰めないと．．．

「．．．まあ、気持ちは嬉しい。今度何か別のことで頼らせてもら
うよ」

「ほ、本当か．．．？」

涙目で上目づかいをしてくる筈。．．．うん、何かひじょーに罪
悪感が．．．

「ああ、本当だ」

「わ、分かった。約束だぞ」

「ああ」

俺が頷くと満面の笑みを浮かべる筈。 本当に女って分かんない。もう、いや

翌日から俺は放課後、山田先生にマンツーマンで教えてもらった。おかげでだいぶISSの操縦が出来るようになった。山田先生様々だな。もうマジで上手い。

さすがに雪片式型の訓練は山田先生には無理だったので、織斑先生に頼んだ。

. うん、超スパルタ ほぼ実戦形式なんだモンなあ
. でも、心構えは出来た。その点は感謝だな、うんうん。

そして日曜。 ようやくコーヒーマーカーを取りにいけました

っ！！もうこれがあれば、ずっと戦えるっ！！！！

・・・いや、さすがにそれは嘘だけど・・・でも、だいぶマイツてた精神が回復出来た。

筭曰く、自分で淹れたコーヒを飲んでる俺は天国に居るかのよう
な笑みを浮かべてたそうだ。・・・どんな笑みだよ、それ・・・

そして・・・試合、当日を迎えることになった。

第5話 ガンマン気持ちいいよっ!! (後書き)

本日、進学する大学が決まりました。いや〜面白くなりそうだった
あ、でも入学式が延長して16日になってしまいました。・・・
どうしよう。やることが殆ど無い・・・

第6話 戦闘って・・・書くの難しい・・・（前書き）

いや～皆さん。こんな駄文を見てくれてありがとうございます。

ちょっと皆さんに聞きたいことがあります。先日、この小説のPVが二万超えました。・・・これってすごいのでしょうか？それとも普通なのでしょうか？

無知な作者にどうか教えて下さいっ！！！！

ちなみにあとがきにお知らせがあります。

第6話 戦闘って・・・書くの難しい・・・

「あら、逃げずに来ましたのね」

「逃げる理由もないしな」

試合開始のブザーは既に鳴っているのに、話しかけてくるとはね。
・・・馬鹿？

まあ、いいや。俺もおとなしく待ってあげますか。

「最後のチャンスをおげますわ」

オルコットがビシッ、と人差し指を俺に向けて突きだして言う。

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくつてよ」

警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。

・・・やれやれ、何がチャンスなんだか・・・

「・・・知ってるか？オルコット」

「あら？謝る気になったのですか？」

「・・・日本にこんな言葉がある。『弱い犬ほどよく吠える』」

「なっ!?!?」

「御託はいい。かかってきたらどうだ、サニーガール？」

「サニー・・・青二才ですってっ!?!?・・・もう我慢なりません

わっ！！徹底的に痛めつけてあげますっ！！」

そう言い放つとオルコットは手に握られている2メートル超えの銃器 検索、六七口径特殊レーザーライフル スターライトmk？から閃光を放つ。

俺はそれを半身になってかわす。そしてオルコットの死角になっている手から『黒雷』を取り出す。そして数発、放つ。が、オルコットは普通にかわす。

「このわたくしに銃撃戦を挑む気ですかっ？笑止ですわっ！！」

そう言い放つと、オルコットは、空いている右手を横に振り、『ブルー・ティアーズ』のフィン・アーマーに付いているビット、4機がパージされ、宙を舞う。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

「生憎とダンスは得意ではなくな・・・早めに切り上げるとしよう」

ビットからの絶え間ないレーザーの弾雨が俺に降り注がれる。しかも一つ一つが俺に正確に向かってくる。

俺はそれを翼にあるスラスタを瞬時に連続して噴出し、細かく動くことで完璧にかわし切る。

「なっ!？」

「言っただろう?早めに切り上げるとな」

おおっ……ぶっつけ本番の動きだったけど、なんとか出来たぜ・
……

俺は拳銃をしまい、ショットガンを取り出す。そしてオルコットが驚いたことで動きが止まっているビットに向けて数発、打ち込んで破壊する。

「残り3つ」

「っ!?!?・・・くっ!?!」

ビットを落とされたことに驚いたのか、再びレーザーを大量に放つてくる。

「同じ手は二度は喰らわない」

再び、レーザーをかわしビットに一気に近づく。そしてショットガンを至近距離で放つ。

「くっ!?!?また・・・」

「残り2つ」

今度は遠距離からのビット攻撃。・・・まあ、ビットとライフルともう一つしか武器ないもんな・・・

俺はそれをかわしつつ、ショットガンをしまつ。そして『黒嵐』を取り出し、ひたすら連射しまくる。

・ ・ ・ 乱れ撃つぜえええつ！！！！！！

・ ・ ・ ・ ・ ごめんなさい。言ってみたかったです。 ・ ・ ・ ・ ・
でも、実際は言っていないもんねっ！

そしてそのまま残りの2つとも一気に破壊する。

「 ・ ・ ・ これで全部」

俺は『黒嵐』をしまい、雪片式型を取り出す。ビットを破壊されたことに怯んでるオルコットに向けて突っ込む。

「かかりましたわねっ！」

不意にオルコットが笑った。そしてその腰部に広がったスカート状

のアーマーから突起が外れ、動いた。

「残念でしたわね。ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

しかもさっきの四機と違い、レーザー射撃型ではない。これはミサイルだ。

だけど、

「ああ。知ってるぞ」

「え？」

俺は翼にあるレールカノンを展開。そしてミサイル目がけて放つ。すると、俺が放った弾丸はそのままミサイルに激突し貫通した。

そしてそのまま突き進み。オルコットに激突した。

「きゃあっ!」

俺はその隙に零落白夜を発動。すると、雪片式型が輝きだした。

・・・零落白夜・・・まさにISにとっては一撃必殺。・・・うん、チートだよな。

「・・・お前の罪は二つ」

オルコットは慌てて体勢を立て直し、ライフルを連射してくるが、俺はそれをかわしつつ突っ込む。

そして一気に切り捨てる。

「男を馬鹿にし過ぎたことと驕っていたことだ。・・・さあ、お前の罪を数えろ」

驚愕に染まったオルコットの目を見ながら、俺はその言葉を突き付けた。

『試合終了。勝者、織斑一夏』

・・・これにて一件落着、つてか？・・・つてやばっ！？

一息ついた俺の目に飛び込んできたのはISが解除されて、自由落下していくオルコットだった。

俺は慌ててオルコットの元へ飛んでいき抱きかかえる。・・・やれやれ、気絶してるのか・・・

仕方がないので、そのままビットに行くことにした。

「いい御身分だな。織斑・・・」

ビットに着き、ISを解除すると、俺の耳に何やら不機嫌そうな声が入ってきたので、何事かと思いきやそちらを見る。

そこには何故か不機嫌になっている織斑先生と筈、そして何故かうらやましそつにこちらを見る山田先生の姿があった。

「どうやら俺に切られた衝撃で気絶をしているようなので、ここまで運んできました。保健室に運んでください」

「……………分かった」

……………なんで返事が遅いわけ？

俺は救護の人にオルコットを渡すと、改めて織斑先生達に向き合う。

「では、失礼します」

「……………待て、織斑」

「何か？」

そのまま更衣室に行こうとすると、織斑先生に呼び止められたので、振り向く。そこには顔を若干赤くした織斑先生がいた。

「……その、なんだ……よくやった」

……え？何このかわいい生き物？

………というか、滅茶苦茶嬉しいんですけどっ！……いや、だって日頃ほとんど褒めてくれないんだよっ！？

千冬姉さんが褒めてくれて嬉しくなった俺は笑顔で返事をする。

「はい、ありがとうございました。織斑先生」

そして今度こそ更衣室に向けて足を運んだ。……どっちら今日
は最高の日みたいだっ！！

「……あの笑顔は反則だろう」

「……ですね」

「……はい」

そして一夏がいなくなった後、顔を真っ赤にした女性が3人いましたとさ。

「……「」は……？」

「む、起きたか。オルコット」

ベッドの脇に置かれていたパイプ椅子に腰掛け雑誌をめくっていた千冬がセシリアが意識を取り戻した事に気付き顔を上げた。

「…………織斑先生？　そうですね、試合は…………っ！」

「お前の負けだ、オルコット。そしてお前は織斑に斬られた衝撃で気失って落下したところを助けられたんだ。後で一応礼を言っておけ」

「は、はい…………」

「起きたなら、もう大丈夫だな。部屋に戻るといい」

「分かりました…………」

そう言った後、千冬は保健室を出て行った。そしてセシリアも部屋

に戻ることにした。

部屋に戻ったセシリアは、汗を流すためシャワーを浴びることにした。

サアアアアア・・・

シャワーノズルから熱めのお湯が噴き出す。水滴は、白い肌に当たっては弾け、流線美なボディラインをなぞるように流れていく。

シャワーを浴びながら、セシリアは物思いに耽っていた。

今日の試合のことだ。

(負けた・・・しかも圧倒的大差で・・・)

事実、一夏はダメージをほとんど受けておらず、精々かすった程度ぐらいしか喰らっていなかった。

(・・・織斑、一夏・・・)

あの男子のことを思い出す。

『さあ、お前の罪を数えろ』

バイザーをしていたのに何故か感じた、あの強い意志を宿した瞳を・
・屈することなく自分に向かって来たあの姿を。

123

他者に媚びることのない眼差し、堂々とした風貌。それは不意にセ
シリアの父親を逆連想させた。

母は強い人だった。

女尊男卑社会以前から女の身でありながらいくつもの会社を経営し、
成功を収めた人だった。厳しい人だった。けれど、憧れの人だった。

それに対して父は、いつも母の顔色ばかり伺う人だった。名家に婿

入りしたせいか、母に多くの引け目を感じていたのだろう。いつもオドオドしている父親を見て『情けない男とは結婚しない』という思いを幼い頃から抱かずにはいられなかった。

その両親は、もういない。・・・三年前に事故により他界したのだ。

越境鉄道の横転事故。その日に限って何故一緒にいたのかはわからない。けれどとてもあっさりと、両親は帰らぬ人となった。手元には莫大な遺産が残った。

そして、周りには金の亡者が群がった。

セシリアは遺産を金の亡者から守るため、ありとあらゆる勉強をした。その一環で受けたIS適性テストで『A+』が出た。政府は国籍保持のためにいくつもの好条件がだされ、両親の遺産を守るために、即断した。

第三世代装備ブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選抜され、稼働データと戦闘経験値を得るために日本に、IS学園にやって来た。

「・・・わたくしの、罪・・・」

それは分かっている。一夏が言ってたし、今までの自分の行いを振り替えるとよくわかる。では、これからどうすればいいのか、それが分からない。

「……でも、きっと聞いてはいけないのでしょうかね……」

おそらく、それを考えることも罪を数えること。

「では、まずその一歩を踏むために……」

自分の惚れた男のことを知らなくては……

そう呟いたセシリアの顔には笑みが浮かんでいた。

第6話 戦闘って・・・書くの難しい・・・（後書き）

ちょっとお知らせです。実は日曜から火曜まで親の実家に行きます。九州までいくので更新できません。

ですので、更新出来るとしたら水曜か木曜かといった感じです。ちやんと更新しますので、お待ちいただけるととても嬉しいです！！

第7話 狙撃もいいよね 作者もメタギアとかだといつも狙撃だよ(前書き)

というわけで第7話です。遅くなって申し訳ございませんでした。

では、どうぞっ！

あっ、前回の質問はまだ継続中です。

第7話 狙撃もいいよね 作者もメタギアとかだといつも狙撃だよ

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一撃がりでない感じですねっ！」

「……ああ、そう言えばそうだったね………すっかり忘れてた。」

俺とオルコットが戦った翌日、朝のSHRで山田先生が俺がすっかり忘れてたことを思い出してくれた。

「織斑君、よろしいですか？」

「……まあ、決定事項ですからね。承ります」

「もちろん、このわたくしに勝ったのですから当然ですわっ！そして、やはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

まあ、そうさね。メンドクサイけどね……

「それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省してまして……」

なんか急にモジモジし始めたぞ？……ん？なんか嫌な予感がありました。こう、おもに俺に理不尽なモノが降りかかるような……

「わ、わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、一夏さんはそれを見るみるうちに成長を遂げ……」

バンッ！

……うっさっ！？

急に机を叩く音が響く。その音源は立ち上がった筈だった。

「生憎だが、一夏の教官は山田先生と織斑先生で足りている。それに、私も色々と教えるつもりだしな」

・・・そんなの初耳なんですけど・・・

何故か筈は異様に殺気立っている瞳でオルコットを睨み付ける。心臓の弱い人ならぶつ倒れ兼ねない眼付け、普通の人でもびびること確定である。

しかし、オルコットはその視線を正面で受け止め、視線を返している。そしてどこか誇らしげだ。

「あら、あなたはISランク『C』の篠ノ之さん。『A+』のわたしに何か御用かしら？」

「ら、ランクは関係ないっ！ 頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしても懇願するからだっ！」

懇願してないよ！勝手にねっ造すな！・・・というか筈はランク『C』

なんだね〜。

俺は……なんだっけ？ 忘れた。まあ、織斑先生はこれは訓練機で出した最初の格付けだからあまり意味はない、って言ってたからいいか〜。

「座れ、馬鹿共」

そして、すたすたと歩いてオルコット、箒の頭を出席簿で叩く織斑先生。

さすが、クールでかつこいっ！！

でも、さすがに叩かれたくないのでも後ろに向いていた視線を前に戻す。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を決めようとするな。下らん揉め事は十代の特権だが、生憎今は私の管轄時間だ。自重しろ」

おお〜かっこいい・・・

これにはわれるとさすがのオルコットも反論の余地がないらしい。
何か言いたそうではあったが、結局おとなしく座った。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はーいと俺以外のクラス全員が一丸となって返事をした。俺は苦笑いで過ごすのがやっとだった。

・・・やれやれだぜ・・・

そして、昼休み。俺が学食に向かおうとすると、オルコットが話掛けてきた。

「あ、あの……少しよろしいでしょうか……?」

「ん? いいぞ」

「で、では……先日は本当に申し訳ございませんでしたっ!
「!」

すると、オルコットはガバァッ!と音が出るくらいの勢いで思いつきり頭を下げてきた。

……へ? ……ああ。この前の事か……

「……別に構わない。それにその件に関しては俺も言い過ぎた所があった」

「いえっ! わたくしの方が先にあんな無礼なことを言ってしまったわっ!」

……あ、なんか埒が明かなそう……

「・・・分かった。ではお互いに反省するところがあったというところで、この話は打ち切りだ」

「・・・分かったわ」

オルコットは不承不承といった感じで頷いた。

・・・いや、だってもう終わったことを蒸し返されても、ねえ・・・

134

「・・・俺は学食に行く。また後でな、ミス・オルコット」

「・・・わたくしのごとはセシリアとお呼びください」

・・・おっ？いいのかえ？なら遠慮なく。

「分かった、セシリア。俺の事は一夏でいい」

「分かりましたわ、一夏さんっ!!」

「・・・別にさん付けじゃなくていいが」

俺がそう言っても、ニコニコ笑って何も言わないセシリア。・・・
なんかちよつと恐いぞ？

「・・・随分と仲が良いようだな」

そして聞こえる不機嫌ボイス「今度は誰かつな？」

なんとっ！筈でしたあゝ・・・なんかもう、憑かれた・・・違
った、疲れた・・・

「まあ、わたくしと一夏さんは一度戦いあった仲。仲が良くなるの
も当然ですわっ!!」

そして何故か誇らしげなセシリア。

「・・・わ、私と一夏は幼馴染だっ！お前より仲はいいなっ！！」

同じく、顔を赤くしながら何故か誇らしげな筈。そんな筈を見て途端に不機嫌になるセシリア。

・・・もう意味分かんない。

そろそろ、食堂に行かないと拙そうなので、俺は今度はにらみ合い始めた二人を置いて食堂に行くことにした。

そして食事が終わって教室に戻ると、何故か二人に怒られた。・・・
・・・あれ？まだ4月だよな？なんで俺こんなに疲れてるの？

「それではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット。試しに飛んでみせろ」

遅咲きの桜も既に散り終えた四月も下旬。俺達は現在、織斑先生の授業を受けていた。

・・・行くとしますか、黒菊。

そう念じて0.5秒でISを展開する。

「・・・まあまあだな。だが、それでも遅めの事には変わらない」

織斑先生が俺への評価を下す。

「・・・いつもながらに厳しいんだぜっ！！でも、へこたれないんだぜっ！」

「・・・よし、飛べ」

その言葉と同時に俺は一気に飛びあがった。

そして、ある一定の高度まで上昇して止まった。その少し後にセシリアのブルー・ティアーズが上がってきた。

「お早いですのね」

「まあな。この機体は高機動型だからな。・・・とは言っても、そ

ここまで慣れていないのもまた事実。先生達もそう毎日見てくれるわけでもないからな」

「でしたら、わたくしが教えて差し上げましょうか？」

お、マジでっ？それは結構ありがたいな。

セシリアは代表候補生だし、ISの操縦の教え方も下手じゃなさそうだし。

「・・・では、お願いしようか。早速今日からはどうかな？」

「わたくしは構いませんわ」

「では、放課後に。場所は第3アリーナで」

「分かりましたわ」

「一夏っ！何時までそんなところじゃべってるつもりだっ！？速く戻ってこいっ！！」

話が纏まった瞬間、下から箒の怒声が聞こえた。下を見てみると、そこには山田先生からインカムを奪っている箒の姿が……

……何してんの、箒……ああ、ほら……山田先生涙目だよ。

「織斑、オルコット、急下降と完全停止をやって見せる。目標は地表から10cmだ」

……こらまた難しい注文ですなあ……。というか箒は無視か、織斑先生。

「では、お先に」

「ああ」

そう言ってセシリアは急降下していった。そして完全停止。……
・どうやら上手く出来たみたいだ。こっちにも織斑先生の評価が聞

こえた。

「……さて、行くか」

ぶつちやけ、急降下と完全停止は初めてです。でも、思いっきりいきまます。

そして一気に急降下し完全停止する。で、どの辺で止まったかというところ……

「地表18？か……まあ、初めてにしては上出来だ」

おおっ……我ながらすごいんだぜっ！！

「次だな。織斑、武装を展開しろ」

「はい」

・・・来い、『黒雷』『黒嵐』。

念じた次の瞬間、いつの間にか二丁の拳銃が俺の手の中に収まっていた。

「・・・よし。さすがに叩きこんだ成果はあったな」

あはははは・・・こっちは怖かったけどね。

「次はオルコット、やってみろ」

「はい」

すると、セシリアは左手を肩の高さにまであげて真横に突き出した姿勢でスターライトmk?を展開した。そして視線を向けるだけで、セーフティが外れ、射撃可能なまでに至っていた。

・・・ウワア・・・さすが代表候補生。早いな。

「ふん、流石に代表候補といったところか」

「ありが・・・」

「ただし、そのポーズはやめる。横に向かって展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な・・・」

「直せ。いいな」

「、・・・はい」

セシリアもさすがに織斑先生には勝てないようで、一睨みで押し黙った。

「では次。二人とも近接武装を展開しろ」

俺は二丁を瞬時にしまい、雪片式型をまた瞬時に取り出す。

「・・・やはり、早いな。それでオルコットはまだか」

「も、もうすぐです・・・」

セシリアは中々武器のイメージが像を結ばないのか、粒子はセシリアの手の中でクルクル踊っていた。

「・・・初心者の俺が言つのもなんだが・・・セシリア、落ち着いてやれば出来るはずだ」

「は、はい・・・」

セシリアは一度深呼吸、意識を集中させ、今度こそ武器を構成した。

「・・・何秒かかっているんだお前は？ 実戦では良いのだぞ」

「じ、実戦では相手を近距離の間合いに入らせないので、問題ありませんわっ！」

「ほう・・・高機動型とはいえ、近接よりの織斑に簡単に懐に潜り込まれた者の台詞とは思えんな」

「あ、あれは・・・」

セシリアは何やらごにょごにょ言っているが、織斑先生の言うことが正論のため何も言い返せない。

すると、急にセシリアから恨みがましい視線と個人間秘匿通信プライベート・チャネルが送られてくる。

『あなたのせいですわよっ！』

『・・・と言われてもな。ああいう風にやるしか方法が思いつかなかったものでね』

』

「ん？もうこんな時間か。では、今日はここまで。解散」

「ふうん、ここがそうなんだ」

IS学園ゲート前。ちっこい・・・失礼。小柄な身体の少女が、その身に似つかわしくない大きなポストンバックを肩から提げて立っていた。左右それぞれに高い位置で結んでいる髪を夜風に揺らせながら、少女はくしゃくしゃの紙を上着のポケットから取り出す。

「本校舎一階総合事務受付・・・どこにあんのよ？」

ぶつくさ言いながら、取り敢ず少女は足を動かさず。ここで悶々悩んでいるよりも自分で探した方が速いと判断したのだ。

だがその結果、

「もつと迷っちゃった……」

宛てもなく歩き回っている内に本気で迷子になってしまった少女。キョロキョロと周囲を見回してみても、一度も来たことがない場所なので目印など見つからない。

「はぁ……。ま、いつか。こんだけ奥に来れば誰か一人くらい通り過ぎるでしょ。その時案内してもら

お」

少女はポストンバックを床の上に置き、その上にちょこんと腰を下ろした。

(そう言えばあいつ、元気かな)

あいつとはもちろん、我らが主人公、織斑一夏である。

「・・・だから・・・でだな」

ふと、遠くの方から声が聞こえてくる。視線を向けると、複数の生徒達がIS訓練施設から出てくるのが分かった。

(丁度いいや。場所聞こつと)

ボストンバックを肩にかけ、少女が声をかけようとすると、

「だから・・・等。お前の言い方では俺は理解できないと言っている。・・・というかお前いつの間に来た？」

(この声っ!!)

予期せぬ再会に高まっていく鼓動。少女は一旦心を落ち着かせるために歩みを止めて深呼吸をした。数回深呼吸を繰り返し、そして再び視線を向ける。

(私だって分かるかな？ もう二年近く会ってないけど・・・あいつなら分かってくれる筈!)

何の根拠もない、でも絶対の信頼がある確信を胸に抱きながら声をかけようとする。

「いち

」

「一夏、何度言えば分かる。だから『くいつて感じ』だと言ってるだろう」

「・・・俺はそれで分かるほど利口ではない」

一夏は近くにいる女の子に溜息をつく。でも、傷つけないように言葉を放っている辺り、昔と変わってない。でも、今気になるのはそんなことじゃない。

(誰あの子?)

少女のさっきまで痛いほどに高鳴っていた鼓動は急速に落ち着いていき、酷く冷たい感情が胸中に湧き上がってきた。

結局少女はすぐに総合事務受付を見つけた。訓練所のすぐ後ろだったのだ。

「ええと、これで手続きは全て終了です。IS学園へようこそ、フェア凰
ン・リンイン鈴音さん」

少女、鈴音は受付嬢の笑みを無視し、受付に身を乗り出すように身体を乗せた。

「あの、織斑一夏って何組ですか？」

「ああ、あの噂の子？ 一組ね。鳳さんは二組だからお隣さんね。そう言えば、あの子、クラス代表になったそうよ。すごいわね。」

そんな噂に興味はない、とでも言いたげな表情で鈴音は質問を続ける。

「二組のクラス代表って決まってるんですか？」

「決まってるけど・・・聞いてどうするつもり？」

受付嬢の問いかけに鈴音は薄い笑みを浮かべた。その額にしっかりと血管を浮かび上がらせて。

「お願いしようと思って。友達を驚かせたいから、代表を譲って・・・」

第7話 狙撃もいいよね 作者もメタギアとかだといつも狙撃だよ(後書き)

今回は長くなってしまいましたね。こんなので読んで頂いて大変嬉しく思います。

ようやく次回鈴登場です(多分・・・)。

第8話 セカンド幼馴染登場。ツンデレツインテールって狙いすぎじゃね？(前)

明日、仮面ライダーの映画見に行ってきます。いや〜楽しみです。

では、どござっ！！

出来れば感想も頂けると嬉しいです。

第8話 セカンド幼馴染登場。ツンデレツインテールって狙いすぎじゃね？

「というわけでっ！ 織斑くんクラス代表決定おめでとっっ！」

「おめでとっっ！」

ぱんっ！ ぱぱんっ！ と弾けるクラッカー。吐き出された紙テープが俺の頭に降り注ぐ。

今は夕食後の自由時間。既に営業の終わった食堂を貸切にして一年一組のメンバーが集まっており、各自飲み物やらお菓子を手にやいのやいのと盛り上がっている。

その壁にかかっている『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれた横断幕が全てを物語っていた。

「……何これ？ いや、分かってるけど……いきなり連れられてこられてこれは、ねえ……」

「……随分と楽しそうだな」

はい、また何故ここで不機嫌ボイス？というか、どこをどう見て楽しそうに見えたのさ？

恐る恐る後ろを見ると、そこには飲み物を片手に不機嫌顔で立っている筈がいた。

「まあな。こつこつ騒がしいのは嫌いじゃない」

あのイマジンス、思い出すしね……。……。あ、最近会いに行っていないな……。今度いつとこ。

「……ふん」

「こつこつ時ぐらい不機嫌顔を止めたらどつだ？きれいな顔が台無しだ」

「き、きれいっ!?!わ、私がかっ!?!」

「今俺と話してるのがお前以外にいるのか?」

箒は子供のころからかわいいというよりはきれいって言った方が似合ってたからね。

「そ、そうか・・・私はきれいなのか・・・」

「少なくとも俺はそう思っている。まあ、お前をきれいじゃないと言っちゃはまずいなさ。自信持っていていいぞ」

「そうか・・・うん、そうだなっ!」

はい。そして急に機嫌がよくなりました。訳がわかりません。

顔を赤くしてウンウン頷いている箒を見て首を傾げながら俺はコーラを少しずつ飲んでいった。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューをしましたっ！」

急に顔の前にズイッとマイクにびっくりしながら、マイクが出てきた方向を見る。そこにはいかにも新聞部ですといった感じの人が立っていた。

「あ、私は黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ、名刺」

「ああ、これはどうも」丁寧」

「……いや、正直に言って名刺をもらってどうしろと？」

「ではではズバリ織斑君っ！クラス代表になった感想を、どうぞっ！」

「……正直に言って人の上に立つのは苦手だから、どういう風にしたらいいのが分からないと言ったところですかね？」

「ん〜じゃあ次っ！！意気込みをどっぞっ！！」

「…………男と侮ってかかってきたものには絶望をプレゼントしよう、とでも言っときますかね？」

いや、冗談だよ？なんというか普通過ぎるのもあれかな〜と思いついて……………すいません、調子にのって本当にすみません。

「おお〜いいね〜。ねっ造し甲斐があるよ〜」

ねっ造するのかよっ！？なら聞く意味くないっ！？

「っいでじゃないけどセシリアちゃん、コメントちょうだい」

「私、っいでっことは苦手ですが、よろしくてよ」

とか何とか言いながらも、セシリアは満更でもなさそうな表情を浮かべていた。・・・絶対得意だろ。こついの・・・

「ではまず、何故私がクラス代表に立候補したかと言つと」

「長そうだね。てか確実に長いよね？　　いいや、写真だけちょうどいい」

「じ、自分からお願いしておいてそれはないんじゃない？」

「適当に捏造しておくから大丈夫。そうだ、セシリアちゃんって織斑君に負けたんだよね？　　なら織斑君に惚れたということにしておこつ」

「なっ！？　　ななな・・・」

「いやいや、勝手にねつ造しすぎでしょ。セシリアが俺に惚れるとかあり得ないし。ほら、セシリアだって顔を真っ赤にして怒ってるし。」

「織斑君。セシリアちゃんとのツーショットがほしいから、並んで

くれる?」

「ああ、わかりました」

「っ、ツーショットっ!?!?そ、それは後でくれるのですかっ!?!?」

「うん、いいよ〜」

何故ツーショットでそこまで興奮するの?

「じゃあ、向かい合って握手して〜」

「わ、分かりましたわっ!」

……だからどうしてそこまで気合いをいれるのさ?」

俺とセシリアは向かい合って握手をする。……女の子って本当に柔らかいよね〜。

「じゃあ、いくよ。5 + 6 + 7 ÷ 8 は？」

「・・・4分の9」

「せいかい」

「・・・いや、そこ普通2にするもんじゃないの？っていうかなんで皆さん、俺とセシリアの周りに集合しているんですか？というか、いつのまに入った？俺分かんかったぞ。」

「なぜ全員入ってますのっ！」

「ま〜ま〜ま〜」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょ〜」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「むっっ！」

結局パーティーは10時近くまで続いた。・・・女子高生パワー
ってすごいよね・・・

パーティーが解散した後、俺は精神的にふらふらになりながら部屋
へと戻っていった。

「今日は楽しかっただろう。よかったな」

・・・なんでまた不機嫌になってるのかね？

何やらとげとげしい口調で篤が言ってくる。

「さっきも言ったが、騒がしいのは嫌いじゃない。それにどうやら
クラスメートには嫌われてないようだしな。安心した」

「……この前、あんなこと言っちゃったしな。てっきり嫌われるもんだと思ってたよ。」

「……再会した時から思ったが、何か変わったな一夏」

「ん？そうか？」

「ああ……なんというか……お、男らしくなったというか……落ち着きを持つてるといっつか……」

「そうか……なら少しは近づけてるのかな、あの人達に……」

「あの人達？」

「俺の尊敬してる人達だ。……俺はもう寝るとしよう。今日はさすがに疲れたな」

「な、なら向こうを向いてくれるか？寝間着に着替えたいから……」

「ああ、分かった」

「…………正直に言ってさ、俺がいないときに着替えてほしいと思うんだけど。でも、この前そう言ったらものすごく不機嫌な顔をされた。うん、意味が分かんない。」

俺も健全な男子だ。同世代の女子が同じ部屋で着替えるとか、正直かなりキツイものがある。

「い、いいぞ」

「ん、分かった」

俺は寝間着には浴衣を着ている。ぶっちゃけると滅茶苦茶似合っている。

「ん？帯いつものと違うな。新調したのか？」

いつものと色が違うね。

「よ、よく見ているな」

「まあ、毎日お前の事を見てるからな」

「そ、そうか。私を毎日見ている・・・か。そうかそうか」

何やら嬉しそうにウンウン頷いてる。・・・どうしたんだ？頭でも打った？

「よしっ！ では寝るとしよしっ」

意気揚々と就寝に入る筈。

・・・そんなに意気揚々として寝ようとしても眠れないと思っけどな。

翌日、朝のSHR前

「織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？こんな時期にか？」

「こんな時期にねー。珍しい……」

「なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「……中国か……」

中国と言えば、あいつどうしてるかな。連絡くねって言ったのにちっとも寄越さないで・・・愛理さんとかも心配してるし・・・

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

そしてイギリス代表候補生、セシリア・オルコット登場。また腰に手を当てたポーズが様になっているね。

「このクラスに転入してくるわけではないだろう？ 騒ぐほどのことでもあるまい」

そして篠ノ之箒登場。・・・うん、何も無いね。

「・・・中国の代表候補生か・・・」

「む、気になるのか？」

「まあ、な。俺も好奇心がないわけじゃない」

代表候補生か。どんな専用機もってるんだらうな。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるだらう」

「そうですねっ！ 一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていたたきますわ。専用機を持っているのはまだクラスでわたくしと一夏さんだけなのですから」

『だけ』の部分が妙に強調されたね。

でもまあ、実践的な訓練をするにはセシリアに頼むのが一番だ。訓練機は使うのに申請と許可、整備に丸一日使ってしまう。

セシリアなら専用機を持っているし、ISの経験も豊富だ。訓練の相手には申し分無い。

「戦つからには勝つさ」

「そうですわっ！　一夏さんには勝っていただきませんと」

「そつだぞっ！　男たるもの、それくらいの気構えでいかねばどうする」

「優勝賞品は学食デザートの半年フリーパス券だからね」

「織斑くん、がんばってねっ！　わたしたちのフリーパスのためにも」

「織斑くんが勝つとクラス皆が幸せだよ」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから余裕だよ」

「もろ私欲ですねっ！？　逆にそれがすがすがしいよっ！」

俺は皆からの激励？に苦笑いしながら軽く返事を返した。

「その情報、古いよ」

「「「っ!？」」」

突然盛り上がっているクラスに割って入る声があった。クラスには聞き覚えの無い声。だが俺にはそれは久し振りに聞く声だった。声の正体は教室の入口にいた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

そいつは1年前に中国に帰国した俺の幼馴染であり、パートナーだった。

「お前……鈴か？」

「そつよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと笑みを漏らし、トレードマークのツインテールが軽く揺れる。

「・・・ハア」

「な、何よっ！？その溜息はっ！！」

「何気取ってるんだ。まったく似合っていないぞ」

「ばっ・・・！！？ 何言ってるのよ、アンタはっ！」

はい、素に戻った。

「大体、アンタなんで」

「話はまた後でな。そろそろ来るからな」

「はあ？」

バシッ！

呆けてる鈴の頭にオーバーキルの威力を持った出席簿アタックが落ちた。

はい、鬼教官のおでまし。

「いつだったっ！？ 何すんのよっ！」

バシッ！

二度目の出席簿アタック。それによって、鈴はようやく織斑先生の存在を確認する。・・・馬鹿だねえ！

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さつさと戻れ、邪魔だ。」

「す、すみません……」

「す〜す〜とドアからどく鈴。

相変わらず織斑先生は苦手みたいだな。

「また後で来るからねっ！ 逃げないでよ、一夏っ！」

「俺は逃げも隠れもしないよ」

「さつさと戻れ」

「は、はいっ……」

鈴はトリアル真つ青のスピードで教室に戻っていった。

にしても、あいつがIS操縦者とは……。まったくもって驚きだな。

そう思っていると、クラス全員に囲まれた。

「一夏、今は誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな」

「一夏さんっ！？ あの子とはどういう関係で」

他クラスメイトからも質問の数々。

おーい。今そんなことしちゃまずいでしょ。

バシンバシンバシンバシンッ！

「席に着け、馬鹿共」

ああ、ほら・・・言わんこつちやない・・・

それから、何故か箒とセシリアは授業に全く集中しておらず、昼までに山田先生から注意五回、織斑先生に三回叩かれたのであった。

・・・お前ら、織斑先生の授業でボウっとするとか自殺行為以何
ものでもないぞ。

「お前のせいだっ！」

「あなたのせいですわっ！」

「いや、考え事してたお前らが悪い」

そして何故か責められました。いや、言い返したけど……。

第8話 セカンド幼馴染登場。ツンデレツインテールって狙いすぎじゃね？（後

PVが4万突破しました。…………早くないっすか？いや、いま
いちよくわかりませんけど…………

でも、感想がない…………さみしい…………

第9話 仮面ライダー最高っ！！（前書き）

昨日、仮面ライダーの映画見に行ってきましたっ！！やっぱりライダーは最高ですね。

そして帰りにISのDVD一巻を購入。本当はBDにしたかったんですが、金銭的な問題で断念。でも書き下ろし小説は面白かったですね。ラウラとシャルロットファンは歓喜だと個人的に思いました。

あとがきにアンケートがあります。

第9話 仮面ライダー最高っ!!

「待ってたわよ、一夏っ!!」

昼休みになり、食堂に行くトドンッ、と擬音が出てくる感じで鈴が立っていた。

「……邪魔になるからとっとと食券を取るぞ」

「うっ……分かったわよ」

俺は日替わり定食、鈴はラーメンを選ぶ。それを受け取ったあと、テーブルに座る。

「お前、先に行ってたのか。迎えにいこうしたら既にいなかったからどこに行ったのかと思ったんだが……」

「えっ！？そ、それってあたしに会いに来たってことっ!？」

「ああ」

急にテンションが上がった鈴。・・・ふむ、ではここで地獄を見てもらっ・・・は大きかな？ま、いいや。

「説教をしにな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

「もう一回言おうか？この1年間まったく連絡せずに連絡先も教えずに俺だけでなく愛理さん、良太郎さん、風都の皆、デンライナーの皆、ゼロライナーの二人に心配かけた大馬鹿者に説教をしにな」

「あ・・・・・・・・うう・・・・・・・・」

鈴がうめき声をあげるが、無視してジィ〜っ見つめる。

「う、ごめんなさい……」

「許さん」

「ええっ!？」

「……今度一緒に挨拶に行くぞ。盛大に怒られて来い」

「は、はい……」

皆からの説教を想像したのか、意気消沈しながら鈴はラーメンを食べ始めた。俺はそんな鈴の頭を撫でる。

「まあそれは置いておいて……久しぶりだな鈴。元気そうだな何よりだ」

「う、うん……あんたも元気そうだよかったわ」

鈴は顔を赤くしながら返事を返す。

「そういえば、あんた・・あれから色々巻き込まれてないわよね？」

「．．．．まあな。去年はなんとか落ち着いてたな」

うん、去年は事件は．．．．ああ、一個あつたっけ？

「いやーっただけならあつた。まあ、残つたガイアメモリを使った集団の壊滅、ぐらいだったけどな」

「ああ、そうなんだ。．．．．ねえ、翔太郎さんは．．．？」

鈴がかなり心配そうな眼で俺を見てくる。．．．ああ、そういえば知らなかったっけ？

「その件だが、フィリップさんは戻ってきた」

「えっ！？ほ、本当っ！？」

「ああ。詳しいことは省くがちゃんと戻ってきた」

「そっかあ……よかつたあ……」

本当に安心したように息を吐き出す。それと同時に鈴はラーメンを食べ終える。……相変わらず食べるの早いな。

「ああ、そつだ。もうひとつ、言うことがあった」

「ん？今度は何？」

「所長が結婚する」

鈴は思わず口に含んだ水を吹き出してしまった。……やっぱり驚くよね。

「…………マジ？」

「大マジだ」

「……相手は？」

「照井刑事」

「うっそっ!？」

「嘘じゃない」

そう言うと鈴は手を顔に当てて、俯いた。

「……信じられない。まさかあの二人が……」

「俺も聞いたときは驚いたな。まあ、何気に相性はよさそうだったからな。大丈夫だろう」

「・・・それもそうね」

俺も日替わり定食を食べ終わりひと段落したとき、何故かいままで別の席で座っていた篤とセシリアがこっちに詰め寄ってきた。

「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが」

「そうですね、一夏さんっ！まさかこちらの方と付き合ってるっしやるのっ!?!?」

机をたたきながら問い詰めてくる二人。・・・滅茶苦茶怖いんですけど・・・

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ・・・」

「そうだな。そういう関係ではない。こいつは幼馴染でパートナーだった」

俺がそういうと、鈴は何故かジト目でこっちを見てきた。

「幼馴染・・・？」

「ああ、そうか。箒とは面識無かったな。箒が引越していったのは小四の終わり頃だったな？　鈴が転校してきたのは小五の頭で、ちょうど入れ違いになるように来たんだ。・・・それで鈴・・・前に話したな？　小学生からの幼なじみで俺が通ってた剣術道場の娘の篠ノ之箒だ」

「ふうん、そうなんだ」

まじまじと箒を見る鈴。箒も負けじと見返している。
睨み合う二人・・・なんか怖いんですけど。だれか救済を求む・・・っ！

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ、「こちらこそ」

バチィ!

おい、今火花散ったよっ!?!ただ挨拶を交わしたただけなのに何で火花が散るの?この短時間で一体何があったんのさっ!?

「一夏さん、それでパートナーというのは?」

「ん?ああ、前に俺はとある探偵に弟子入りしてな」

「探偵に?」

鈴とのにらみ合いを止めた篤とセシリアがキョトンとする。

「で色々省くが、その時の相棒が鈴だったんだ。まあ、鈴を選んだ理由はあの当時俺を一番理解してた人物だったからな」

「そっつ！あたしが一番、一夏を理解してるわけっ！」

「ぬっっっ」

「むっっ」

鈴が胸を張って宣言すると、篝とセシリアがうなり始めた。

「一夏」

「ん？」

そんな二人を見てボクっとしてるといきなり鈴から声がかかった。

「アンタ、クラス代表なんだって？」

「成り行きでな」

売り言葉に買い言葉だったのさ……今思えばあの時喧嘩売ってなければ平穩だったろうに……

「ふーん……」

「それがどうかしたか？」

「……ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

顔を俺から逸らし、視線だけをこっちに向けて言ってきた。言葉にしても歯切れが悪い。鈴らしくないな。

珍しいこともあるもんだね。

「ほら、アンタ普通に戦えはするけどISでの戦闘は慣れてないでしょ？」

「……まあ、そうだな。一応セシリアや先生には見てもらったが」

慣れてるとは言い難いもんね。

「ちょっと待てー夏っ！私も教えたぞっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そうだったな」

「なんだその長い沈黙はっ！！」

いや、あれは教えるとは言い難いような……。

「とにかくっ、あたしが教えようか？」

「・・・・・・・・そうだな。お前の方が付き合いも長いしな。頼め

」

Bannon!

テーブルが叩かれ、その勢いで箒とセシリアが立ち上がった。ちょっと、顔恐ッ！

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは私だ」

「あなたは二組でしょうっ！？ 敵の施しは受けませんわ」

「あたしは一夏に言っただけ。関係ない人は引っ込んでよ」

「か、関係ならあるぞ。私が一夏にどうしても頼まれているのだ」

だから頼んでないって。人の話を聞いてくれ。

「箒。何かあったときはと言ったが、どうしてもとは言っていないぞ」

「うっ！・・・」

「何だあ、嘘じゃない」

「・・・」

箒、沈黙。

「一組の代表ですから、一組の人間が教えるのは当然ですね。あなたこそ、後から出てきて何を図々しいことを」

「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし」

「それを言うなら私の方が早いぞっ！それに、一夏は何度もうちで食事をしている間柄だ。付き合いはそれなりに深い」

箒、復活。

「付き合いの深さで言ったら鈴の方が深いだろうな。なんせパートナーだからな」

「一夏っ!？」

「一夏さんっ!？」

俺が思ったことを素直に言ったら何故かセシリアと箒が悲鳴を上げた。ついでに周りのクラスメートも。

……なんで？俺なんか変なこと言った？

「あつたり前でしょっ。それにうちで食事ならあたしもあつたし」

再び悲鳴を上げる二人＋クラスメート。そして勝ち誇ってる鈴。まじで意味分からんし。

「それはそうだろう。お前の家は中華料理屋だったんだからな」

とありのままを喋ると勝ち誇ってた表情をしていた鈴が途端にふて

くされた。」

そんな鈴に対して箒とセシリア、さらにはいえばこの話を聞いていたクラスメイトの皆が何処かほっとしたようだった。

「み、店なのか？」

「あら、そうでしたの。お店なら別に不自然なことは何一つありませんわね」

クラスメイト全員で緊張と緩和を繰り返している。意味分かんない。だれか助けてくれ……

あ、そうだ。聞きたいことがあったんだ。

「そういえば聞きたかったんだが、何故急に帰国した？」

「あつ……えつと……それは……」

ほんの少し、本当に一瞬だったが鈴の表情に陰りが差したのを、俺は確かに見た。

「……俺にも言えないことか……なら仕方ないね。」

俺の視線から何かを感じ取ったのか、鈴はやや無理矢理気に調子を戻した。

「そ、それよりさ、今日の放課後って時間空いてる？ あるよね。久しぶりだし、どこか行かない？ 駅前のファミレスとかさ」

「あそこなら去年閉まった。それならミルクディッパーの方が……いや、そこまで時間はないか」

「そ、そう。……じゃ、じゃあさ、学食でもいいからさ。積もる話もあるでしょ？」

「俺からは特にないな。基本受験勉強漬けだったからな。まあ、鈴からあるなら」

「生憎だが、一夏は私とISの特訓をするのだ。放課後は埋まって

いる」

「……………何故に簿が俺の放課後のスケジュールを決めてる？

「そうですね。クラス対抗戦に向けて特訓が必要ですよ。特にわたくしは専用機持ちですから？ ええ、一夏さんの訓練には欠かせない存在なのです」

これを期にとばかりに俺の特訓を持ち出し畳み掛けてきた。

「……………おかしい。俺のことのはずなのに、俺をそっちのけで話が進んでいる。おい、無視しないでくれ」。

「じゃあそれが終わったら行くから、空けといてね。じゃあね、—
夏っ—」

俺の返答を待たずに鈴は『ピュー』という効果音が出そうな勢いで片付けに行ってしまった。

・・・よくあったな、こんなシチュエーション。

鈴が俺の返答を訊かずに、あたかもそれで約束が成立したようにさつさと行ってしまっ、なんてことが。

まあ、俺に迷惑がかかる範囲じゃないからよかつたけどね。

「一夏、当然特訓が優先だぞ」

「一夏さん、わたくしたちの有意義な時間も使っているということをお忘れなく」

「・・・・・・・・頼むから、俺のスケジュールを勝手に決めないでくれるか？」

・・・・・・・・だれか助けて・・・・・・・・このセリフ何回目だろ？

第9話 仮面ライダー最高っ！！（後書き）

ちとばかりアンケートを。実はISでライダーの必殺技を使おうと思っ
てまして。どれがいいか、悩んでます。

? ファンゲストライザー（仮面ライダーW ファンゲジョーカー）

? アクセルグランツァー（仮面ライダーアクセル 後ろ跳び回し
蹴り）

? ダイナミックエース（仮面ライダーアクセル 周囲をA字型に
斬り裂く、あるいはA字に描いた斬撃を一振りずつか一斉に飛ばす）

? エースラッシャー（仮面ライダーアクセル A字型のエネルギー
の斬撃を射出する）

? その他（自分が希望するものを書き込んで下さい）

以上です。期限は次回までの予定です。どうか投票お願い致します。

どの必殺技か分からないと御指摘がありましたので修正しました。

第10話 コーラが売り切れだっ!? 鬱だ死のう……(前書き)

はい、どうも。毎度ありがとうございます。

実は先日、PVが6万、ユニークが1万を突破しました。大変うれしく思っております。皆さん、本当にありがとうございます。

次にアンケート結果ができました。選ばれたのは……
ファイズのクリームゾンスマッシュでしたっ!!

皆さん投票、ありがとうございましたっ!!では、ごきげん!!……!!

第10話 コーラが売り切れだっ!? 鬱だ死のう……

結局、放課後は訓練ということになり、今現在、俺達は第3アリーナにいる。

「……で、何で箒が打鉄を展開してここに居るんだ?」

「な、なんだ? おかしいか?」

「いや、似合ってるが……セシリアに教わりに来たのか?」

「違っつ! お前に教えに来たんだっ!」

「……いやいやいや。箒から何を教わればいいのさ?」

「箒から教わることはなかったと思うが……」

「ゆ、雪片での近接戦闘があるだろうがっ!!」

「いや、あれについては織斑先生にすでに教わってる。それに俺は近接武器は主流じゃない」

「うっ……うっ……」

すると、箒がうめき声をあげて沈黙。……何故？

「まあ、実戦相手になってくれるのは大歓迎だ。さすがにセシリアばかりだと、動きが決まってしまうからな」

セシリアは遠距離射撃型。違ったタイプのやつと戦うのはいいことに違いない。

「そ、そうかっ！ならば私が相手をしようっ！」

何故か上機嫌になる筈。そしていつもの俺、理解不能。

「じゃあ・・・行くぞ」

「ああっ!」

「お待ちなさいっ!?!このわたくしをお忘れではなくてっ!?!」

「・・・ごめん。すっかり忘れてた。」

「一夏に頼まれたのは私だっ!」

「いいえっ!元々約束していたのはわたくしですわっ!?!」

すると、何故か急に筈とセシリアが戦闘を始めた。

「・・・なんでこうなる?俺のせいじゃないよね?」

「一夏っ！」

「一夏さんっ！」

「ん？」

俺がボクと見てると二人が急に俺に向かって怒鳴ってきた。……
・顔が怖いから落ち着かない？・無理？ですよね。

「どうして何もしないっ!？」

「何故、黙って見ているんですのっ!？」

「……俺にどうしろと……」

「私に加勢しろっ!！」

「わたくしに味方して下さいませっ!!」

………どないせいつちゅうねん。

俺はどうすればいいのか分からなかったので、だんまりを通した。

数分後、そのだんまりを通したのがいけなかったのか、二人同時に襲いかかられた。

が、なんとか二人を撃墜して今日の訓練を終わりにした。

まったくもって理解できないぜよ。何で俺がこんな目に……

俺は箒とセシリアとは別のピットに入り、ISの展開を解く。そしてクールダウンのためのストレッチを始める。

「一夏っ！」

すると突然スライドドアが開いた。

そこに現れたのは鈴だった。

「おつかれ。はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでいいよね」

「ああ、助かる」

鈴が持つてきてくれたタオルを使って汗を拭き、スポーツドリンクを一気に飲み干す。

ああ〜うまい。コーヒー以外でここまでおいしいって思った飲み物は久々かもしれない。

「一夏さあ、やっぱりあたしがいないと寂しかった？」

「それはそうだ。パートナーがないのはやはり寂しいものだ」

「そうじゃなくてさあ。久しぶりに会ったんだから色々言うことあるでしょうが」

ん？なんかあるかな？

「・・・説教か？」

「もういいからそれはっ！！」

ん？他に思い当たるものがないぞ？

すると、再びスライドドアが開いた。そこにいたのは箒だった。

「一夏、先にシャワーを浴びてるぞ」

「ああ、分かった」

「ではまた後でな」

そう言って箒は部屋に戻っていった。

「……一夏、今のどろいじりごと。」

すると、鈴が急に不機嫌になった顔を隠そうとして引きつった笑みで訊いてきた。

「ああ、言っただけだったか。俺と箒は同じ部屋なんだ」

「は？」

「本当は一週間は自宅通学だったはずだったんだが、政府が無理矢理部屋割りに捻り込んだわけだ。それで、箒と当たって同室になっただけだ」

「そ、それってあの子と寝食共にしてるってことっ!?!」

「まあ、そうなるな」

「アンタ・・・アンタはそれでいいのっ!?!」

「いいも悪いも、国が決めたことだからとやかかく言えないだろう。俺としても問題だと思っけどな。まあ、見ず知らずの相手よりは良かったな。幼馴染の筈で助かったな」

「・・・・・・・・・・」

何を思っているのか鈴は俯いている。それに何かぶつぶつ呟いてい

「・・・・・・・・ったら、・・・いわけね・・・」

うん?何か言った?

「幼なじみなら、いい訳ねっ！」

ガバツ！！

いきなり顔を上げてきた。その勢いと突然のことに俺は驚いた。

一体何事っ！？

「わかった、わかったわ。ええ、よくわかりましたとも」

何かの納得をしている鈴が何度も頷いていた。

・・・何か変なものでも食べた？

「夏っ！」

「あ、ああ」

「幼なじみは二人いるってこと、それとあたしがパートナーってこと覚えておきなさいよ！」

「何をあたりまえなことを言ってる」

「じゃあ、後でねっ！」

そう言い残し、鈴もピットからサイクロントリガーの弾丸真つ青の勢いで出ていった。

・・・・・・・・何かなんだかも訳がわからない。・・・・・・・・だれか助けて・・・・・・・・最近これ口癖になってきたな。

「という訳だから、部屋代わって」

どういう訳？

「ふ、ふざけるなっ！ 何故私のようなことをしなくてはならないっ！？」

夕食を食べ終えて簞と自室でのんびりしてる所に鈴がやってきた。

「いやあ、篠ノ之さんも男と同室なんて嫌でしょ？ 色々と気遣うし。その辺、あたしは平気だから代わってあげようかなって思ってた」

「べ、別に嫌とは言っていない。それにだっ！ これは私と一夏の問題だ。部外者に首を突っ込んで欲しくないっ！」

「大丈夫、あたしも幼なじみだから」

「だから、それが何の理由になるといっただっ！」

話が一向に進まない。それ以前、話が噛み合っていない。

鈴は我が道をひたすらに行くな性格をしてるし、箒は箒でももの凄く頑固だ。到底この二人は話し合いで解決するような性格をしていない。断言してもいいぐらいに。

二人から目を離して周りを見ると、鈴の足下に一つのポストンバックが目に入った。

……もう荷物持ってきてるのかい……

昔、鈴は『ポストンバック一つでどこにでも行ける』と自負していた。

中学の修学旅行のとき他の女子よりも荷物が半分くらいだったしね。

いつでも家出が出来るようにかと思っていたときがあった。ちなみにそれを口に出した俺の友達は滅茶苦茶に怒鳴られていた。

「とにかく、今日からあたしもここで暮らすから」

「ふざけるなっ！ 出て行け！ ここは私の部屋だっ！」

「『一夏の部屋』でもあるでしょ？ なら問題ないじゃん」

俺からの意見を求めるように今度は俺に視線を向けてきた。 篝もおなじく俺の意見を求める視線を向けてくる。

「……………俺としては篝より鈴の方が落ち着くが……………」

「一夏っ!?!?」

「ふふふ〜そっでしょ〜」

「だが、学校に許可は取ったのか？」

「……………え？」

俺の言葉に鈴は呆然とする。

「こつこついう話はまず学校側に通すのが筋だ。で、話したのか？」

「は、話して、ないけどさ……じゃあ、ここの寮長って誰よ？」

「織斑先生だ」

「そんなの、絶対無理じゃないっ！！」

確かに正当かつ納得の出来る理由でなければ通るはずはないもんね
)。。

「学校側の許可はないし上に、筭もお前の申し出を断ってるんだ。
俺としては反対する余地はないんだが、この話は無理だな」

「むう〜」

鈴が唸って、篤が勝ち誇った顔をする。……そんなはこの部屋に入ったのかな？

「それにそれは無意味だ。俺は5月で別の部屋に移動になるからな」

「えええっ!?!」

「そ、そうなのかつ!?!」

……何で篤まで驚くのさ?最初からそういつ話だったじゃん。

「だから、今部屋替えしても意味がない」

「ううゝ……」

「……今度一緒にどこか出かけるか。久々にターミナルに行くのもいいだろう」

「……ん、分かったっ！」

すると、いままで不機嫌だったのが急に上機嫌になった。

前からどこかでかけよっつて言つと途端に機嫌が直るんだもんな。

「……ねえ、一夏」

「ん？」

「約束覚えてる？」

「約束？」

「そう、約束」

「……何かあったかな？たくさんした覚えがあるんだけど……」

・

「・・・たくさんあってどれか分からないな・・・」

「その中でも一番大切だったものがあつたよね？」

「・・・死んでも帰って来い。だつたか？」

「違うわよ。それにそれはもう守ってくれたし」

「・・・どれ？」

「・・・どの時期の約束だ？」

「え、えと・・・あたしが帰国する前の一番最後の約束・・・」

「ああっ！分かった分かったっ！！」

「料理が上手くなったら、毎日酢豚を作ってあげる、って言うのやっか？」

「なっ!？」

「そうそうっ!..!それそれっ!..!」

篤が絶望した表情になって、鈴が目を輝かせる。

「だが、俺は毎日酢豚だと飽きるからいいと、断ったはずだが？」

「え.....?そうだったけ？」

「ああ」

さすがに毎日はねえ。俺は少なくとも無理。.....あれ?言っただけな

「……言ってなかったか？」

「聞いてないわよ……じゃあ何？あんたはずっとそう思ってたってわけ？」

「そうだな。今でも思ってるが」

俺がそう言つと鈴が急に怒りのオーラを纏った。

「……違う意味だったのか？ならそれを言ってくればいいのだが」

「そ、そんなこと言えるわけないでしょっ！！」

「……一体どんな意味で言ったのさ……」

「……そうね、じゃあ……」

するといきなり鈴は何かを提示してきた。

「クラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方に何でも一つ言うこと聞かせられるってことでいいわねっ!？」

「……なんでそうなる」

「うっさいわね。別にいいでしょ?・・絶対だからねっ!分かったわねっ!!!」

鈴は俺が乗るかどうかも言わないうちに、荷物を持って出て行った。

「……なんでそんな話になるのかね?」

「一夏」

「ん?」

「馬に蹴られて死ね」

はい。箒から罵声を頂きました。……………なんで？

……………疲れた。もう寝よう。

翌日の朝、生徒玄関前の廊下に大きく張り出されている紙があった。

その表題は『クラス対抗戦日程表』

俺の初戦の相手は

鈴だった。

第10話 コーラが売り切れだっ!? 鬱だ死のう…… (後書き)

実はクリムゾンスマッシュでも3票だけだったんですね。次に多かったのはRXのリボルゲインとカブトのライダーキック。これも2票ですが。

皆さん、やっぱりそれぞれに好きなライダーがいるんですね。ちなみに自分はカブトとダブルが大好きです。

第11話 マイソロ3が面白い件について。 テイルズで仮面ライダー出ないかな

先日、大きな余震がありました。 皆さん大丈夫ですか？私はとりあえず無事です。

教習所に行くことになりました。 . . . めんどくさ

第11話 マイソロ3が面白い件について。 テイルズで仮面ライダー出ないかな

時間は一気に試合当日まで飛ぶ。

やあ、皆。皆の織斑一夏だよ。……ごめんなさい、なんかごめんなさい……存在しててごめんなさい……

とりあえず、気を取り直して……俺はピットにいます。そして
箒とセシリア、織斑先生に山田先生もいます。

「……さて、行くとするか」

俺は黒菊を展開。軽く動かして調子確かめる。……ん？いい感じ。

……結局、俺と鈴はあの日からまったく口を聞いていない。……

・・・さすがにこれははじめてだな。

謝ろうと思っても、自分の何処が悪かったのかが分からずどう謝っていいのか分からなかった。

「一夏さんっ！一夏さんならあんな小娘、簡単に倒せますわっ！！
ですので緊張なならないように・・・」

「・・・・・・・・鈴を簡単にか・・・それは無理だな」

「え？」

「・・・あいつは俺のパートナーだ。俺の動きや考えは簡単に分かる
だろっさ」

・・・それこそ、半人前とはいえ仮面ライダーとして戦ってきた俺を
ずっと見てきたわけだしね・・・・・・・・

「そんな・・・・・・・・」

「だが、だからこそ俺もあいつの考えは読める」

「……ただ、ここでの問題は俺もあいつもお互いの『ISとしての戦闘』を知らないこと。どのように戦うかまでは分かんないけどね」。

さすがにそれを言うと不安にさせてしまったため、皆には言わない。

「……では行ってくる」

「ああ。行って来い、一夏っ！」

「がんばってくださいませ、一夏さんっ！」

そして俺はピットからアリーナへと飛び立つ。そこには既に鈴が待ち構えていた。

「……第3世代型IS『甲龍』。確か安定性と燃費の良さを目標に作られた機体。武器まではネットでは調べきれなかったが、あいつの

性格からして近接戦闘型。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてもいいわよ」

「・・・やれやれ。代表候補生は皆言うことは同じみたいだな」

セシリアとの時も似たようなことを言われたもんね。

「手加減は結構だ。俺がそう言うのは好まないのは知ってるだろう？」

「・・・まあね。なんとなく聞いただけだし」

どうせんなこつたろうとは思ってたわい。

「まあ、一夏なら分かってるだろうけどISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体に

ダメージを貫通させられる」

うん、分かってる。だから俺があの人のを真似して出来たあの技は対人戦じゃ使えない。

「・・・それを聞いて俺が怯えるとも思ったか？」

「ううん、まったく・・・・・・・・じゃあ、始めましょうか？」

「そうだな。いい加減観客も待ちくたびれてるだろうしな」

そして鈴は青龍刀を構え、俺は黒雷と黒嵐を構える。

「ハアアアアアアアアアッ！！！！」

「フッ！！」

盛大な叫び声と共に鈴が青龍刀を振りかぶって突撃してくる。

俺はそれをスライドして避けながら、二丁の拳銃を乱射する。しかし、鈴もそれを軽く避ける。

「相変わらず、上手いわね」

「お前も随分と頑張ったようだな」

さすが、代表候補生。しかもセシリアと違って油断がないしな。

「じゃあ、これはどうかしらっ!？」

すると、鈴はもう一本青龍刀を取り出し、二刀で襲いかかってくる。

「っ!二刀とはっ・・・随分っ・・・器用になっただなっ!！」

俺は襲いかかってくる二刀を避ける、もしくは拳銃で受け流す。

「生憎とあたしは前から器用よっ！」

「そんなのは初耳だなっ！」

俺が後ろへ一気に距離を取ると、鈴は二刀の青龍刀を連結させた。

……おいおい、そんなのありですかっ!?

長柄の形を取った武装《双天牙月》を剣舞のように振るい、上下左右から剣撃を振るってくる。

マズッ!!

俺は瞬時に拳銃をしまい、ショットガンを二丁取り出す。そして所構わず鈴に向かって連射する。

「くっ!？」

さすがの鈴もこれは辛いのか、一旦動きを止める。

その際に俺は鈴から大きく離れる。

「甘いわよっ!!!」

鈴がそう叫ぶと、両肩にあるスパイクアーマー、と思っていた非固^{アン}定浮遊部位がスライドした。

そして次の瞬間、俺は何かが放たれたのを感じた。俺はそれに従い、クイックブー스트瞬間加速を発動させた。

俺はついさっき俺がいた場所に見えない何かを通ったのを感じた。

「・・・へえ・・・よくかわしたわね」

……まさか、今のって……

「……衝撃砲、か……」

ブルーティーズと同じ特殊装備か……

「正解よ。これから放たれるのは見えない砲撃。ふつうはかわせないんだけど……」

「お生憎様だな。俺は見えないが感じることは出来る」

これも仮面ライダーとしての経験か……やっぱり凄いねっ！仮面ライダーはっ！

「確かに当たらないかもしれないけど……牽制にはなるでしょう……」

「チッ」

確かに当たりはしないけど、動きがかなり制限されるね……ならっ！

俺はショットガンをしまい、雪片式型を取り出す。

「刀って、正気？あんた近接武器なんて上手く使えないでしょ？」

「確かにな。……だが、ある程度なら使える」

本当にある程度だけだね……。さて、狙うとしたらやっぱり零落白夜による一撃必殺か……。うん……。本当は博打っていうのは嫌いなんだけどね。

「……行くぞ」

俺は再び瞬間加速を発動し、一気に鈴に近づく。

クイックブースト

・・・ここで、エネルギーは大丈夫なのかという疑問が上がってくるが、黒菊はエネルギー消費は他のISと比べて3割ぐらい抑えられるのだ。・・・さすが東さん。チートだよこれ。

鈴は近づいてくる俺に向かって衝撃砲を連発して打ち込んでくるが、俺はそれを翼のスラスタを使い、横の上に瞬時に動いてかわし続ける。・・・ウオツ!? 結構G来るな〜これ。

そして鈴に衝撃砲が使いづらい距離まで近づいた。

「さあっ! 終わりといこうかっ!」

「あらっ! 随分とせっかちなっ! ！まだこれからじゃないっ! ！?」

「何、お前みたいない女を相手にしてるとせっかちにもなるものさっ! ！!」

鈴は双天牙月を構える。俺は雪片を思いっきり振りかぶる。そしてそれと同時に零落白夜を発動。

アリーナのグラウンドは爆発し、黒煙を上げていた。

客席をシェルターが覆い、緊急事態を告げるアラートが鳴り響く。

「何が起きた……？」

緊急事態が発生したのは分かった。そして煙の中に何かがあるのも分かった。

……侵入者かい？

警告 中央に熱源反応 所属不明のISと断定 ロックされていきます

『一夏っ！試合は中止よっ！あたしが時間を稼ぐから、すぐにピットに戻ってっ！！』

鈴から個人回線が飛んでくる。

プライベートチャンネル

『……どこに戻れというのだ？出口は既に封鎖されている』

「何ですってっ！？」

俺も個人回線プライベートチャンネルで返すが、鈴は俺が言った言葉に驚いたようで普通に声を発した。

俺は緊急事態と分かった瞬間、アリーナの出口を確認していた。結果、既に閉まっていた。

……逃げようとしたわけじゃないよ？鈴が逃げられるか確認しただけ。

「……それにこいつの目的は俺みたいだ。お前は逃げに徹しろ」

前みたいに安全なところまで退避が出来ないなら、逃げ回るしかない

い。

「……嫌よっ!!もう前みたいにただ見てるだけなのは絶対に嫌っ!!」

……はあ?いきなり何を……っ!?

「鈴っ!!!!」

俺は黒煙の向こうに高エネルギー反応を察知したので一気に飛んだ。鈴を抱き抱え、彼女を狙った攻撃をギリギリで躲した。

「遮断シールドを貫通する威力を持ったビーム兵器か……」

一撃でも喰らったら拙いね……

「ちよ、ちよっと、離しなさいよっ!」

「馬鹿っ! 暴れるなっ!」

「う、うるさいっ! いったいどこ触って」

俺は再び放たれたビームを一気に加速することによってかわす。

そして再び煙の方を見るとそこから現れたのは……………

「何、あれ…………?」

「…………」

2メートルを超える、フルスキン全身装甲のIS。

本来、ISの防御はバリアで行われるため、全身装甲という物はま
ず存在しない。物理シールドを持つ防御特化の機体もあるが、それ
でもこれは異常だ。

巨大な腕部は地面まで着き、人というよりもゴリラのような印象。腕部と肩部に恐らくビーム発射口であるユニットが計四門。

全身には姿勢制御用だろうスラスタが何機も見え、頭部にはむき出しのセンサーレンズが規則性無く並んでいる。

「……こんなISがあるのかい……でも、なんか違和感がある。」

「……何だ？お前は」

「……俺の問いかけは無視か……これは確定かな？」

「目的は分かっている。俺と黒菊だ。理由は……心当たりが分からない。」

『織斑君、凰さんっ！』

俺は解放回線を強制終了させる。

オープンチャンネル

「……鈴、お前は下がってる。あいつの狙いは俺だ」

「嫌よつ。あたしも戦う」

「ダメだ」

「何でよっ!!」

「……即席のタッグで戦えるわけがないだろうが」

むしろお互いの足を引っ張る要因になる。いくらパートナーだからって一緒に戦ったことはない。

「でも、絶対に嫌っ!!一夏が傷つくのをただ見てるのはもう嫌なのっ!!」

鈴のその言葉に俺は今まで鈴にたくさん心配をかけてたことをようやく理解した。

「……………そこまで心配かけてたとはね……………まだまだ俺もハーフボイルド、か……………」

「……………なら好きにしろ……………ただ怪我しても知らんぞ」

「ッ!…!…うんっ!…!…」

鈴は嬉しそうに頷く。俺はそんな鈴を見て軽く微笑む。

俺は今まで抱きかかえていた鈴を降ろす。そして雪片をしまい、黒雷と黒嵐を取り出す。

鈴も双天牙月を構えなおす。

「……………行くぞっ!…」

「うんっ！..！」

俺と鈴はそのまま侵入してきたISに向かって突っ込んでいった。

第11話 マイソロ₃が面白い件について。 テイルズで仮面ライダー出ないかな

ちょっと区切りが悪かったですかね？ま、いいか。

鈴ってなんか絡ませやすいんですよ。なんでだろ？

第12話 ライダーもいいけどスーパー戦隊もいいよね(前書き)

更新が遅れて大変申し訳ございませんでした。

実は昨日から教習所に行くことになったんですね。で、帰ってきたら眠くなってきたので少し寝ようと思い、寝て起きたら、朝になっていたという……いったい何が……

ではどづづづっ!!

第12話 ライダーもいいけどスーパー戦隊もいいよね

「織斑君、織斑君っ!?!」

通信を切られ、プライベートチャンネルで呼びかけるも反応は返って来ない。

モニターには鈴と一夏がアンノウンと戦い始めたのが映し出された。

「本人が”やる”と言っているんだ。やらせてみれば良い」

「お、織斑先生っ! 正気ですかっ!?!」

「落ち着け。コーヒーでもどうだ? こういう時こそ、冷静さを欠いてはならない・・・そうだろうか?」

そして手に持ったコーヒーに白い粉末を入れる。それも大量に。

「…………織斑先生。それ塩です…………」

「……………」

ピタリと千冬の手が止まる。

「……………何で塩がここに？」

「さ、まあ…………でも、ハッキリと塩って書いてますし…………」

ピットに何とも言えない空気が流れる。

「あっ！ 口では何と言ってもやっぱり弟さんが心配なんですね。だからそんなミスを……………」

「……………」

そして今度は嫌な空気が流れる。もしここに一夏がいたら、心の中で空気の変化についていけずに泣くことだろう。

「山田先生、どうぞ」

「え、嫌でもそれ、塩が入ったやつでは……しかも大量に……」

「どうぞ飲んでください」

真耶はすすすすと出された「コーヒ」を涙目で受け取った。

「うう……いただきます」

「一気飲みどうぞ」

悪魔がここに降臨した。

「先生、私にISの使用許可をっ！　すぐにも出撃できますわっ
！！」

「それは無理だな」

「どうしてですのっ！？　このままじゃ、一夏さんがっ！」

「これを見る。アリーナの遮断シールドはレベル4。全扉はロック
されている状態だ。これで、どうやって避難や救援を行う？」

言葉や表面上は落ち着いているが、千冬の指はモニターをひたすら
叩いている。

「そ、そんな……っ！　でしたら、緊急事態として、政府に救援
をっ！！」

「すでにしている。そして今、三年の精鋭がシステムクラックを実行中だが、すぐには終わらない」

「で、では一夏さん達は……っ!」

「しばらくはあいつらだけで戦うことになるな。……だが、あいつらはそれを承知で戦っている」

「な、何故そんなことが分かるのですか？」

セシリアの疑問に千冬は答える。

「あいつは……一夏は状況判断力に長けている。事実、あいつはあのISが出てきた瞬間に周りを見渡して状況を理解した。全ての扉がロックされているとな」

アリーナの扉が閉じられたということは、学園のシステムがハッキングされたということ。そしてアリーナの扉は全て同じプログラムによって管理されている。つまりは、観客席の扉も封鎖されたと考えて間違いない。

「観客は逃げ道がない。更にあのISは遮断シールドを簡単に貫通する火力を持っている。つまりは・・・」

「逃げたら撃つ。・・・人質ということですか・・・」

「そういうことだ。どっちにしろ、お前では足手まといだ。突入部隊には入れん」

「な・・・っ！？ 私が足手まとい・・・っ！？」

「ブルー・ティアーズの装備は1対複数向きだ。お前が複数の側に入れば、要らぬ混乱を呼ぶ」

「そ、そんな事は・・・っ！」

「では、連携訓練はしたか？ その時の役割は？ ビットの使用タイミングは？ 味方の構成は？ フォーメーションは？ 敵のレベルはどれ位を総て思惟している？ 連続稼働時間は？ 味方機の
の
」

「も、もう結構ですっ！！ 充分に分かりましたわっ！・・・」

はうっ」

「ふん、分かれば良い」

降参したセシリアは大人しくモニターを見ることにした。そこには鈴と一夏が即席にしてはかなり錬度が高いコンビネーションを繰り出していた。

一夏が両手の拳銃とレールカノンであのISの隙を作り、鈴がそこに双天牙月で斬りかかる。あのISがすかさず鈴に反撃を繰り出そうとすると、一夏がレールカノンをISの周りに放って注意を引く。惜しくも鈴の斬りかかりはすんでの所でかわされてしまったが、傍から見ればかなり追いつめている感じである。

「……あの凰さんはどうして、あれ程に一夏さんと動きを合わせられるのですか？」

「簡単だ。1年振りとは言えあの二人はパートナーだからな」

「……パートナー……」

またその言葉か・・・セシリアはそう思った。

同じ専用機持ちで、同じ代表候補生でありながら好きな人の隣に立
てる鈴と立てない自分。

・・・自分はたしてこれから鈴に勝てるのだろうか？

セシリアはそう思ってしまった。

「・・・」

その時、幕がモニタールームから出て行ったのには誰も気づかなか
った。

鈴があのISに斬りかかるがかわされる。

「チッ」

これで、4度目の失敗。とりあえず、鈴が突っ込み、俺が射撃で援護するというスタンスを取ってるがこのままじゃジリ貧だ。

「……………鈴、エネルギーは残りどれくらいだ？」

「……………後、180つてところかな？」

「……………そうか」

俺の黒菊はまだいけるけど、鈴がきついか……

傍から見ればかなりこっちが押してるように見えるかもしれないけど、実際はかんりギリギリ。こっちに切り札がないからな。

「にしてもあいつ。本当に人間が乗ってるの？にしては動きが滅茶苦茶過ぎな気が……」

「……いや、乗っていない可能性が高いな」

「なっ！……そんな訳ないじゃないっ！！ ISは人が乗らなきゃ動かないのよっ!？」

そう、それが普通。でもね……

「……鈴、お前は死角からの攻撃を避けることができるか？」

「……無理ね」

「そつだ。普通は無理だ。俺でも完全に避けきれんかは難しい。．．
．．だが、あいつはそれを簡単によけた」

「．．．確かにそつだったわね。でも、それだけで無人機っていう
ことになるかは．．．」

「もう一つある。さっきお前がぼやいていたあいつの滅茶苦茶な機
動だ。とうてい人間が耐えきれんものとは思えない動きをいくつも
していた」

人間の反射の限界を超えた回避力とかね。ぶっちゃけてありえない。
人間なら、ね。

「．．．もし、無人機だとして打開策はあるの？もし、無人機だ
としたらコアを破壊しない限り止まらない可能性だってあるのよ？」

「．．．．．打開策ならある」

「．．．．．どうせ、無茶すんでしょ」

断言されてしまったっ！？で、でも今回は違つと……お、思っただけどね？

「……これを使うにはチャージの時間が必要な上に俺が動けなくなる。つまり」

「あたしがそれまで時間稼ぎをするってことね？」

「……そういついことだ。嫌なら別の案を考え出す」

これは鈴の命にもかかわること。鈴が嫌って言ったら別の案を考え出すぞ。

「いいわよ。乗ってあげる」

「……いいのか？」

「あつたり前じゃない。というか、あたしはパートナーなんだから

容赦なく巻き込みなさいよ」

「……ではそうさせてもらう」

「オツケー。……なら時間稼ぎはまかせてちょうだい。……時間はない？」

「40……いや、30秒だ」

「分かったっ！！」

そう言って鈴はあの無人機に突っ込んでいった。

俺は黒嵐と黒雷をしまう。そして、あるプログラムを開始する。

エネルギー充填開始 完了まであと30秒

俺は右足にエネルギーが集まっていくのを感じた。

このプログラムはとあるライダーの技を手本に組み上げたもの。プログラムを組み込めば、たいていのは再現可能なんじゃないかな？と思っただけで作り上げたもの。実際可能となったわけだが……

今の段階で再現可能なのはこれだけ。というか、プログラムが重いのだ。だから一つしかないのだ。

完了まであと20秒

鈴の様子を見ると、衝撃砲で無人機の注意を惹きつけていた。無理に突っ込むようなことはせずにあくまで牽制のみ。

俺は右足にドンドンエネルギーがたまっていくのを感じた。後、もう少し……っ！！

あと12秒

あいつはこっちに気づいているが、鈴のおかげでこっちに攻撃する

ことができない。これならいけるっ!!!

あと7秒

『—夏あああああああああああああああああッ!!!』

「なっ!?!」

突如アリーナに響き渡った声に俺は驚きを隠せなかった。中継席の方を見るとそこには箒がマイクを持っていた。

何してんのさ、あいつっ!?!?

『男ならば……男なら、それぐらいの敵に勝てずに何とする
っ!!』』

それを聞いて俺が思ったのは……拙いという感情だった。今は
館内放送。つまりは無人機にも聞こえている……っ!!

無人機は興味をもったかのように左後方にある実況席にセンサーレ
ンズを向ける。そしてそこに向けて巨腕を掲げた。

「馬鹿がっ!!何をしているっ!!とっ々と逃げろっ!!」

でも、筈は一瞬、恐怖と驚愕にその身を揺すられるが、ギリッと歯
を食い縛り、逆にそれを睨みつける。

おいおいおいおい、何やってんのさ、本当にっ!!……!!

チャージ完了

無人機の腕に光が収束し始めるのと同時に、チャージが完了した。
……よしっ!!

「はあっ!!」

俺は右足を無人機に向ける。すると、右足から赤い光が撃ち出された。

ISを撃ち抜く光は、その身体を吹き飛ばし、拘束する。光が広がると、円錐型の光のスフィアが現れる。

これは相手の動力部分に無理矢理エネルギーを送り込んで、動きを止めているのだ。ただしそこまで長くは持たない。

右足を下ろし、軽く右手をスナップ。少し腰を落として……走り出した。そして同時に瞬間加速クイックブーストを発動して一気に加速を付ける。そして跳躍する。

跳んで狙うのは、無人機に突き刺さっているスフィア。それに向かって、右足で飛び蹴りする。

「これで、終わりだ」

飛び込むように蹴りを放つと、光がまるでドリルのように回転し、無人機に突き刺さる。

そして俺は光に包み込まれたまま、無人機を貫通した。

円錐型のスフィアも消え去り、無人機に赤い『』のマークが刻まれる。

刻まれた瞬間、無人機は爆散した。

……ふい〜終わった。

俺が気を抜いた瞬間、黒菊のエネルギーが尽きた。……あ〜やっぱエネルギー消費が半端じゃないな。

それに……体への負担が……ばな……って……の……

鈴が笑顔でこっちに降りてくるのを見た瞬間、俺の意識はブラックアウトした。

第12話 ライダーもいいけどスーパー戦隊もいいよね(後書き)

最近シンケンジャーを全部見ました。いや〜面白かった……。源太がいいキャラしてるよね〜。

第13話 日本語って・・・難しいよね・・・(前書き)

教習所が結構疲れるこのところ。この話にて一巻は終了です。・・・
まさかねここまで続くとは・・・

これからもどうぞ、お願い致しますっ!!

ではどうぞっ!!

後書きにアンケートあります。

第13話 日本語って・・・難しいよね・・・

「ん・・・」

急に目が覚めた。・・・思わずテンプレを言いそうになったけど、まあそれは置いて。

ここは・・・医務室か。

「起きたか」

声が出たのでその方向を見ると、備え付けの椅子に座った織斑先生がいた。

「・・・織斑先生」

「千冬姉さんだ。馬鹿者」

べつやらプライベートらしい。・・・学校なのにね。

「・・・あの無人機からコアの抽出は？」

「・・・かなり破損していたが、出来た。このことは機密事項だ。分かったな？」

「ああ」

あゝやっぱか。あの技、加減が出来ないからな。

俺は身体を起こそうとした。だが、体中に激痛が走った。

「無理に動こうとするな。全身打撲状態なんだからな」

「・・・分かった」

ん？そのぐらいか……ならラッキーかな？

「……お前も随分と無茶をしたな」

「……確かに。急ぎすぎたな」

「そういうことではない。お前がトドメに使ったあの技だ。悪いが調べさせてもらった」

「……あゝなるほど。だから指に何も無いのね。」

「あの技……発動中、一切の防御機能が動かないみたいだな」

「……」

「しかも、最後のあの蹴りの時は全身にエネルギーを纏う形になる。……つまり自分にもダメージが来るといっわけだな」

そういうことになる。あの技、クリムゾンスマッシュは正確にはチャージ中から一切の防御が働かなくなる。その分のリソースも回してるからだ。

そしてラストにはエネルギーそのものを纏っての突撃になるため、防御が一切効かない俺には反射ダメージなどその他諸々が全部直接、体に来ることになる。つまりは捨て身の技ってわけ。……まあ、これでも最初にできた時に比べたらだいぶダメージは抑えられる方になってるけどね。

「……あの技はしばらくは封印だ。分かったな」

「……分かった」

まあ、仕方ないか。いざとなったときには使うけどね。

「……何にせよ、無事でよかった。家族に死なれては目覚めが悪い」

そう告げる千冬姉さんの顔はいつもよりずっと柔らかかった。

「……いつも、そんな感じなら嫁の貰い手も引く手数多だろうに」

「余計な御世話だ。……それに結婚するならただ一人と決めてるからな。そいつ以上の男が出ない限りは無理だな」

「……そんな人いたんだ。……誰だろう？ 思いつかん。」

「ならそいつと結婚すればいいだろう」

「そいつと結婚するには法律を変えなくてはな」

「……本当に誰？ 検討もつかないんですけど……」

「では、まだ後始末があるので戻る。お前はもう少し休んでから寮に戻れ」

「分かった」

そう言って千冬姉さんは医務室を出て行った。

……ふう～ではお言葉に甘えて、

「あゝゴホンゴホンっ!!」

すると突然いかにもわざとらしい咳が聞こえた。……箒か。

「……箒か」

「あ、ああ……入るぞ」

そう言うと、閉まっていたカーテンを開けて箒が入ってきた。

「きよ、今日の試合だがなっ」

「そついえばどうなった？」

「あ、ああ無効試合となった。・・・じゃなくなっ！なんである無茶をしたっ！・・・勝てたからよかったものの・・・あのような事故、先生達に任せておけばよかっただろっつ！！」

「あれは俺を狙っていた。アリーナの出口も封鎖され、逃げた所で無意味な上に観客を人質に取られていた」

「だ、だが・・・」

「確かに、急ぎすぎた所もあった。だが、それは救援が来るまでに俺と鈴のISのエネルギーが持つか怪しかったからだ」

「っつう・・・」

さてと・・・実はここまでは前振り。ここからだよ。

「では、今度は俺から聞こう。．．．何故あんな馬鹿な真似をした？」

「ば、馬鹿とはなんだっ！馬鹿とはっ！！」

「あんな行為を馬鹿と言わないで他に何と言う？専用機ももっていないお前が戦場に出てきた拳銃、あんな大声を出して敵に狙われ、銃口を向けられても逃げもせず、そこで睨みつけただけ」

「うっ．．．」

「あの時、俺のチャージが完了してなかったら、どうするつもりだったんだ？」

「それは．．．．．」

「もしあの時狙われなかったとしても、俺たちはお前を守りつつ戦わなくてはいけなくなっただけ」

「．．．．．」

「はっきり言おう。お前はあの場では足手纏い以外何もかもなかった」

「っ!?!」

そう言うと篤は医務室から走って出て行った。

ん〜言い過ぎたかな?でも、事実だしね。言っとかないとまたどこかで同じことをするかもしれないし。

……じゃあ、寝るとしますか……

篤はそのまま自室まで走っていた。

悔しかった。ただひたすらに悔しかった。好きな人に足手纏いと言われたことが。

自室に着くと箒はベットにダイブし、そのまま蹲った。

「私は・・・っ！ただ見ているだけなのが、つらくて・・・っ！！」

「そんなんで戦いに割り込まれても、困るだけなんですけど」

「っ！？」

そんな箒に開けっ放しのドアから入ってきた鈴がそう言った。箒は慌てて顔をあげて鈴を睨んだ。

箒の視線を無視し、鈴は部屋にある椅子に座った。

「その様子だと、一夏からはっきり言われたみたいね」

「……………」

「あたしも言おうかと思ったけど……必要なさそうね」

「……………」

「…………あたしからは質問かな。何で我慢できなかったわけ？セシリアや千冬さんは出来たのに」

「……………」

その質問に箒は答えられなかった。

「……………答えられないなら別にいいけどね」

「…………えっ？」

箒は鈴が言っていることが分からなかった。

「だんまりってことは分かっているんでしょ？ならとやかかく言う気はないわよ」

「・・・」

「ただ、こう言っとくわよ。あんたが我慢できなかったっていうのはそれはあんたの罪」

「・・・罪？」

「そう。あんたの間違った証拠。・・・一夏の代わりに言うわね。・・・さあ、アンタの罪を数えなさい」

ピシッと鈴はそう言いながら箒に指を突き付けた。

「・・・罪を数える・・・」

「あたしが言いたいことはそれだけ。・・・じゃあね」

すると鈴は算の部屋から出て行った。部屋にはじっと考えている算だけが残っていた。

「……ん」

「っ!？」

人の気配がしたので目が覚めた。すると鼻先3センチの所に鈴の顔があった。

「……何をしている?」

「べべべべべ別に何もっ！！！」

「……どもりすぎ。

「そういえば、試合は無効になったみたいだな」

「そうね……まあ、あんなことがあっちゃね」

「賭けはどつする？」

「あ〜じゃあ賭けも無効ってことで」

「分かった」

むづ、結局あれは意味分からずか……まあいつか。

「……そういえば鈴が戻ってきたという事は、あの中華屋、もう

「一回始めるのか？」

「……実はさ、私の両親、離婚しちゃってさ。中学二年の終わり頃なんだけど。その所為で私、国に帰っちゃってさ」

「……」

「一応、母さんが親権を持ってるんだ。ほら、今じゃISの所為でどこも女の人の方が立場上だし、待遇もいいから……」

「……」

「父さんとは、一年近く会ってない。あんな元気の塊みたいな人だから、元気してると思うんだけど……」

「……そうか」

「家族ってさ……難しいよね」

「……そうだな」

俺は鈴の頭を撫で始めた。一瞬だけ鈴は身体を強張らせたが、すぐにそれも弛緩する。

「ん。もう大丈夫」

「そうか」

「今はあたしよりあんたでしょ」

へ？何が？

「・・・何がだ？」

「あんた、ここ最近ちゃんと寝れてないんじゃない？」

「・・・何故ばれたし。」

「……何で分かった？」

「あたしがあんなに近づくまで起きないなんてあんだじゃありえないでしょうが。……疲れがたまってる証拠ね」

「……お見通しか」

「当然。パートナーなんだから」

鈴は勝ち誇った笑みを浮かべる。……いつつも何かあると必ずばれるよな。まいったまいった。

「ほら、今のうちに寝ときなさい。あたしがいるんだから安心して寝れるでしょ」

「……ああ」

といつことで俺は鈴の言うことに従い、大人しく寝ることにした。

「ふう〜・・危なかった〜・・まさかあそこまでいつて起きるとは・・」

一夏が寝た後、鈴は額に流れた汗を拭った。

「でもま、本当に寝れてなかったみたいだし・・」

鈴の目には爆睡してる一夏の姿が映っていた。鈴は優しい笑みを浮かべて一夏の頭を軽く撫でる。

「今は寝顔を堪能しますかっ」

動機は不純だが……

その後、俺が起きたら鈴とセシリアが静かに取っ組み合いをしていた。……何してんのさ。

とりあえず一般生活には支障がないので部屋に戻ることにした。

「一夏……」

「……どうした？」

部屋に戻るとそこには星座をした……違った。正座をした筈がい

「そ、そうかつ・・・ならば今から食べてこよう」

「ああ」

筭が食堂に行った後、俺はコーヒを淹れてゆっくりと飲むことにした。

「・・・あの無人機・・・いったい誰が・・・」

やっぱり一人になると余計なことを考えちゃうな。そういうのは既に学園の先生達が調べているだろうからあれこれ考えても仕方ないよね。

「あのー織斑君と篠ノ之さんいますかー？」

すると外から山田先生からの呼び声が聞こえた。

「……織斑、います。どうぞ」

「失礼しますー」

俺が入室を許可したので、山田先生が入ってくる。

「何か？」

「お引越しです」

「……誰が、かを言ってもらわなければ分かりませんよ」

「あっ!!す、すみませんっ!え、えつとですねっ篠ノ之さんがお引越しですっ!……つてあれ?篠ノ之さんは?」

「今、食堂に夕食を食べに行ってますよ。ここで待ってたらどうですか?コーヒーなら出せますので」

「あっじゃ、じゃあお言葉に甘えて……」

「分かりました」

俺は山田先生を椅子に座らせて、コーヒーを出す。

「い、頂きます」

「どうぞ」

「……あ、おいしい……」

「それは良かった」

山田先生はほっとしたようにはにかむ。それを見て俺も軽く微笑む。

しばらく、俺と山田先生は静かにコーヒーを飲んで過ごした。

「一夏、今帰ったぞ」

「ああ、お帰り」

「あ、篠ノ之さん、お帰りなさい」

「や、山田先生っ!?!?どうしてこの部屋にっ!?!?」

「えっとですね。篠ノ之さんが引っ越しすることになりましたー」

俺の時と比べて大分落ち着いてるな。コーヒーのおかげかな？

「引っ越しですかっ!?!?」

「はい。いつまでも年頃の男女が同じ部屋なのは問題がありますし、篠ノ之さんも嫌でしょう?」

「わ、私はっ、・・・そのっ、・・・」

ん？なんだそんなにこの部屋が気に入ってるのか？

「・・・山田先生、俺が引つ越しというのはダメでしょうか？どつちやら箒はこの部屋から動きたくないみたいですし」

カチンッ！！

ん？なんか音が聞こえたような・・・？

「山田先生、今すぐしましよっ！」

「は、はいっ分かりましたっ！！」

「・・・どうしたんだろっ、箒・・・急に引つ越す気になって。」

その後、箒は1時間足らずで準備を終えて部屋を出て行った。終始不機嫌だったが。

「……ふう……」

俺は一人になった部屋でのんびりとコーヒーを飲んでいた。一人だと落ち着くね。

コンコン

「ん？」

誰か訪ねてきたようなので俺は出ることにした。

「誰かな？」

「わ、私だ」

「箒？」

何故か箒だったので俺は扉を開けることにした。どうかしたのかな？忘れものかな？

「どうした？忘れものか？」

「い、いや・・・そうではなくて・・・」

ん？じゃあ何だろう？

「・・・とりあえず入ったらどうだ？」

「い、いやっ・・・」

・・・なら何さ？

「い、一夏っ！！」

「・・・なんだ？」

「ら、来月の学年別トーナメントだがな・・・」

「ああ、それがどうかしたか？」

確があったね〜そんなの。出る気はあまりないけど。

「わ、私が優勝したら」

したら？

「付き合ってもらおうっ！！」

第13話 日本語って・・・難しいよね・・・（後書き）

アンケートです。

実はラウラとの戦いするときなのですがライダー要素を絡ませるか否か迷っています。

それについての賛否を聞きたいと思います。ではっ！

第14話 違和感は隠そうとすれば隠そうとすると大きくなる（前書き）

更新が遅れて申し訳ございませんでした。

実は昨日、入学式でバテテしまったのです。ものすごくグダグダだったんですよ。・・・ちゃんとしてる人は少ないし、学校長の話は纏まってないし・・・精神的にもものすごく疲れました。

愚痴になってしまい申し訳ございません。

ではどつどつ!!

第14話 違和感は隠そうとすれば隠そうとすると大きくなる

「でっ。」

「……………で？とは？」

現在、わたくし、織斑一夏は友人である五反田弾の家にお邪魔しています。理由は久々に友人に会いたかったのと、ちょっとした用事があったから。

で、弾がゲームをやっているのを後ろで眺めていたときに急に弾から言われたのだ。

「あの女の園の話だよ。いい思いしてんだろ？」

……………んなわけないでしょ。

「……そうだな。あえて言つのなら……」

「言つのなら？」

「……昔の動物園のパンダの気分が分かったな……」

「ああ……成る程ねえ……」

完璧に見世物つてことですよ。いやいや辛いなのって……。

「……まあ、鈴が来てくれたおかげで大分楽にはなったな」

「ああ、鈴ね。……お前らパートナーだもんな」

「ああ」

何故かにやにやしながら言う弾。……何か変なことでもあった

か？

「……そういやよ、ちょっと聞きてえことがあるんだけどよ……」

「なんだ？」

「……もう出ないんだよな。前のドーパントってやつと前に言ってたイマジンってやつ……」

「……ドーパントはもう増えることはないな。作っている奴らはもう倒したからな。……イマジンは動きは活発ではなくなっただが、はぐれが出てくることはある」

実は弾と彼の妹は俺が仮面ライダーであることを知っている。何故かというと以前に風都を案内していたときにドーパントに遭遇し、二人を守るために目の前で変身したからだ。

「そっか……ならひとまずは安心ってか？」

「・・・そうだな。この世界にはこの二種類の怪人しか今のところいないからな・・・土さんみたいなのがいない限り、大丈夫だろう」

「・・・あの人たち、今どこを旅してるんだろうなあ。俺もあのままついていきたかったけど、さすがに無理だもんなあ。残念。」

「・・・なんかそう言われると少し不安になるんだが・・・」

「大丈夫だ。そのための俺たち、仮面ライダーなんだからな」

「・・・おっ」

そう言うと二人とも黙りこみ、ただゲームの音だけが部屋に響いた。

「お兄いっ！さっきからお昼出来たって言ってるじゃんっ！さっさと食べに」

すると突然部屋の扉が蹴り開けられた。・・・うん、木刀じゃな

いだけ安心だね。

「久しぶりだな、蘭。邪魔している」

「い、一夏さん……っ!!」

おど驚いてる。にしても……随分ラフな格好をしてるな。……いや、うん。慣れたよ？寮ってもっとラフな格好してる人多いから。

「い、いやっ、あのっ、き、来てたんですか……っ？全寮制の学園に通ってるって聞いてたんですけど……」

「いや、今日は自宅の確認とちょっとした用事で外出許可をもらっただ」

「そ、そうですか……」

「蘭、お前なあ、ノックぐらいしろよ。恥知らずな女だと思われ

」

弾がそう言つと蘭は弾をキツッ！！と睨みつけた。

「……なんで言わないのよ……」

「い、いや、言つてなかったか？そうか、そりゃ悪かった。ハハハ……」

力関係がわかる図だね。なんか向けてられてないのが分かるのにこっちまで身震いしそうだ……

そして蘭はそくささと部屋を出て行く。

「あ、あのよかったら一夏さんもお辱でござ……まだでしたよね……」

「ああ。頂くとしよ……ありがとう」

「い、いえ……」

パタンとドアが閉まり、部屋に静寂が訪れる。

「……しまった。蘭に用事があったんだが……」

「ん？用事？」

「ああ……ちょっと、な……まあ、行くとしよう」

「おう」

そして俺たちは五反田食堂へと足を運んだ。

「げっ」

「ん？」

食堂に入ると先客があり、それを見た弾はつめき声をあげた。そこにいたのは蘭だった。

「何？何か問題でもあるの？あるならお兄い一人で外に食べに行つてよ」

「聞いたか、一夏。今の優しさに溢れた言葉。泣けてくるぜ」

「……ごめん。なんて慰めていいかわかんない。」

「……三人で食べよう。すでに入ってきているのに態々外に出る必要もあるまい」

「そうよバカ兄。さっさと座れ」

「……はい」

弾に同情しつつ、俺達は蘭と同じ席に座った。

「……あれ？さっきと服装が違ってる。」

「……蘭？着替えたのか？どこかに行く予定か？」

「い、いえ……これは、その、ですね。」

さっきのラフな格好じゃなくて、いわゆるお出かけ用みたいな服装・
……あ、わかった。

308

「……デートか？」

「違いますっ！！」

おおっ……即座に否定されてもった……ん？じゃ何故？

「そうか……俺の勘違いか。すまん」

「い、いえ……と、とにかく違いますっ」

「違っつつーか、兄としては違ってほしくないんだがな。なんせお前がそんなオシヤレするなんて数カ月一度」

蘭のアイアンクロ 炸裂。こうかはばつぐんだっ!!!!

弾はひるんでうごけないっ！蘭のにらめつけるこうげきっ！！弾はひっしにゆるしをこうっ！！弾はちからつきた……

「……食べるとするか……」

「はいっ！……」

「おいつ！！俺無視かよっ!?!?」

その後、原作どおりに進み、蘭は来年IS学園を受験し、もし受かったら俺が面倒を見ることになった。

「そう言えば……一夏、お前、蘭に用があるんじゃないのか？」

「……ああ、そうだったな」

やばい、すっかり忘れてたよ。

「蘭……この前俺が蘭が生徒会長になったお祝いに一緒に出かけようと約束してたのを覚えてるか？」

「は、はいっ……もちろんっ」

「俺の受験が終わってからという話だったが、俺が受験が終わった後は……まあ、色々とおかげで、約束が流れてしまったが・

・そのお詫びに今度一緒に出かけるか？」

「えっ！？本当ですかっ！？」

「ああ」

約束は必ず守るもの。特に女性のはね。守れなかったら何かしらのお詫びは必ずしなくてはならない。

これ、俺の持論。

311

「すまないが・・・俺の予定が確実に開くのが夏休みなわけなんだが・・・それでもいいか？」

「はいっ！！！ぜひっ！！！」

おお・・・嬉しそうで何より。

その後、俺の用事は終わったので寮に帰ることにした。うぐんにし

ても蘭も来ることになるのか・・・楽しみだな。

その日の夕食、俺は鈴に誘われて食堂に来ていた。

「・・・おて食べるとするか・・・」

「うん」

俺たちが食べていると、食堂にいる他の女子たちが何やら騒いでいた。

「ねえ聞いた聞いた？」

「聞いた聞いたっ！」

「え？ 何の話？」

「織斑君の話」

「いい話？ 悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞くっ！」

「はい落ち着いてねえ。いい？ これは女子だけにしか教えちゃ駄目よ？ 実は、今月の学年別トーナメントで・・・」

「随分とあつちは騒がしいな」

「トランプかなんかでもやってるんじゃないの？ 若しくは占いか」

二人でそんな考察を立てていると、

「ええええっ！？ それってマジっ！？」

「マジでっ！？」

「うそーっ！ きゃーっ、どっしょーっ！」

……元気だねえ。一体全体なんの話をしてるんだろうね。

その後、筭がやってきて何やら気まずい雰囲気になったが、それ以外は何事もなくその日を終えた。あ、あえていえば、蘭の事を話したら鈴が不機嫌になった。……なんで？

月曜の朝。いつものごとく女子特有のノリでわいわいと会話している。どうやら今日の話題はESスーツのようだ。カタログを見ながら談笑している。

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？そう？ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいのっ！」

皆なんか服を選ぶときのノリで選んでるね。・・・一応死の危険性がかかなり低いとはいえ兵器なんだから慎重に選んだほうがいいと思うけどなあ。

「そういえば、織斑君のISスーツってどこのやつなの？見たことない型だけど」

「ああ・・・この黒菊を作ってくれた人のお手製だ。故にどの会社でも販売していない」

「へえ〜。そういえばさ、いったい誰なの？そのIS作った人」

「それは内緒だ」

「え〜・・・残念・・・」

言ったら、とんでもない騒ぎになるからね〜。さすがに言えないよ。

「ISスーツとは 以下略」

すると山田先生が出てきてISスーツについての説明を始めた。

……別に作者が面倒さくなつたわけじゃないよ？ほんとだよ？

山田先生がクラスメイトにいじられているのを眺めていると織斑先生が入ってきた。

「諸君、おはよう」

「「「「「お、おはようございます」「」「」

その瞬間にざわざわしていた教室が一瞬で静まり返り、厳格な雰囲気に変わる。

相変わらずすごい雰囲気だね。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使うことには変わりない。各人気を引き締めてかかれ。そうそう、ISスーツが届くまでは学園指定の物を使ってもらうぞ。忘れた者は学園指定の水着、まあそれすらも忘れた者は下着で構わないだろう」

・・・いや、構うんですけど。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ・・・ええとですね、今日はなんと転校生を紹介しますっ！しかも2名ですっ！」

「『『『『えええええええっ！？』』』』」

へえ〜転校生か・・・こんな時期にね・・・

すると扉が開き、その件の転校生と思われる二人の異国人が教室に入ってきた。

「失礼します」

「・・・」

二人の内の一人を見て、女子達は騒ぎ始めるのをピタリと止めた。

なぜならその内の一人は男だったのだから……

しかし、俺はその人に何かの違和感を感じていた。

第14話 違和感は隠そうとすれば隠そうとすると大きくなる（後書き）

アンケートの結果、絡ませるコトにしました。まあ、一夏がライダーってことをばらすためと、もうひとつの理由のために絡ませるといった感じですが……

第15話 お姫様だったって実際にやってる人見たことないね（前書き）

更新が遅れて申し訳ございません。大学のガイダンスと部の食事会などに誘われてまったく書く時間がありませんでした。

これからは不定期更新になると思われます。真に申し訳ございません。

第15話 お姫様だっこって実際にやってる人見たことないね

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

デュノア……確か量産型ISのシェア第3位。でも、最近はかなり低迷してるとか……

……ここ最近のニュースでこいつの話題は出て来ていない。世界で2人目だ。話題に上がらないのはおかしい。

フランス政府がひた隠しにしていた？いや、ならこのタイミングでばらすのはおかしい。デュノア社が隠していた？いや、むしろ前面に出して財政アップをはかる筈……

……まあ、本当に男かもしれないし、色々と勘繰るのは後にするか。

「お、男……？」

「男子っ！ 2人目の男子っ！」

「しかもこのクラスっ！」

「美系っ！！守ってあげたくなる系のっ！！」

「地球に生まれて・・・よかったあゝっ！！！！」

そらようござんした。というか気になってるんだけど、毎回大げさに言ってるの誰？

「あー、騒ぐな。まだ自己紹介は終わっていないだろうが」

心底面倒そう、且つ鬱陶しそうに織斑先生はぼやいた。山田先生ではなく織斑先生からのお言葉なので、皆はぴたりと騒ぐのを止めてもう一人の転入生、女子を見た。

「・・・・・・・・・・」

「……だんまりかい。なんか言おうぜ？」

「……ボーデヴィツヒ、挨拶をしろ」

「はっ、教官」

教官……？っていうことは、織斑先生がドイツに行った時の……

敬礼をされた織斑先生はまた面倒そうな表情でため息を吐いた。

「ここで教官は止める。ここでは私は教師、そしてお前は生徒だ」

「了解しました」

居住まいを正してクラスを見渡す。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それだけかいつ！？

「あ、あの、それだけですか？」

「これ以外に言うべきことなど無い」

おいおい・・・・・・・・随分と無愛想だな・・・・・・・・

そう思っていると転校生、ボーデヴィツヒと目があつた。

「っ！……貴様が」

あ？何？

パシンッ！！

「……驚いたな。ドイツでは初対面の人に対する挨拶はこうも暴力的なのか」

びびびった。

俺はいきなり顔面平手打ちをかましてきたボーデヴィツヒの腕を反射的に掴んだ。

「くっ、離せっ！！」

「分かった」

離せと言われたので離しました。うん、俺って素直。

「……貴様っ!!」

……何で言われた通りに離したのに怒られるの？

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなどと、認めるものかつ
！」

……何様なわけこいつ。

「……何でお前に認めてもらわなければならないのが、理解
できないな。お前は何様のつもりだ？」

そのまま俺とボーデヴィツヒは睨み合った。

「……そこまでだ貴様ら」

「申し訳ありません、教官」

「……分かりました」

織斑先生の鶴の一声で俺たちは睨み合いを止めた。そしてボーデヴィツヒはそのまま最後尾の席に座り、目を閉じた。

「あー……これでHRを終了するっ！ 各人、急いで着替えて第二グラウンドに集合っ！ 今日は一組との合同IS模擬戦闘だ、遅れるなよっ！」

織斑先生の言葉で俺とボーデヴィツヒのやり取りで硬直していた生徒たちが慌てて動き出した。

「おい、織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

「分かりました」

まあ、そうだな。

「君が織斑君？始めまして。僕は」

「おっと、それは後にしておこう。それよりも次の授業へと向かい
う」

俺はデュノアの手を取り、早く教室を出る。

「男子は実習の時はいつも空いているアリーナの更衣室に向かい、
そこで着替える。つまりいつもこの移動だから早めに慣れた方がい
い」

「う、うん……」

急に落ち着きのなくなったデュノアに不審を抱きながら、俺は早歩きで行く。

「実習は基本織斑先生が行う。あの人は一秒でも遅れたら容赦はない人だ。だから早く行かなくてはいけない」

「あ、うちの担任の先生だね・・・」

「そうだ。だから常日頃気をつけた方がいい」

「うん、分かった・・・」

にしても細いな。本当に男が怪しい感じだ。

「ああっ！転校生発見っ！」

「しかも織斑君と一緒にっ！」

あ、やべ。見つかった。

「いたっ！こっちよっ！」

「者ども出会えい出会えいつ！！」

俺たちは江戸時代の犯罪者かっ！？なんか十手や提灯持ち出して来ても俺はこの状況なら納得するぞ。

「織斑君の黒髪もいいけど、金髪もいいっ！！」

「しかも瞳はエメラルドっ！！」

「きゃああっ！見て見てっ！ふたりっ！手っ！手繋いでるっ！」

「日本に生まれてよかったっ！ありがとうお母さんっ！今年の母の日は河原の花以外のをあげるねっ！」

いくらなんでも河原の花はかわいそすぎないっ！？ちゃんとしたものをいつもあげようよっ！！

「な、何？なんで皆騒いでいるの？」

「……この反応。マジでさっきのが正しいかな？」

「……何、簡単なことだ。男が珍しいからだろう。ISを動かせる男なんてもはや珍獣みたいなものだからな」

「あっ！そ、そうだったねっ！！」

……。

まあ、今はここを切り抜けなきゃ。

俺は押しかけてくる女生徒たちの前にたった。

「さて、俺としてはここで止まって皆の質問を受けるのは構わない」

「じゃあっ!!」

「だが、俺たちの次の授業は織斑先生の授業だ。……代わりに怒られてくれるならいいが？」

「うっ」

さすがに、織斑先生の説教は嫌だよね。

「……おっ、おっ、おっ」

「さて、ここがアリーナの更衣室だ。・・・急いで着替えるとして、う。後、10分だ」

その後、俺たちは無事に更衣室に着いた。時間が残り少ないので、急いで着替えることにした。

俺は制服の上を脱ぎ、中に着ていたTシャツも一遍に脱ぐ。

「わあああつ!?!」

すると、突然デュノアが大声を上げた。

「・・・どうした?」

「う、う、うんっ!なんでもないよっ!?!」

訝しげにデュノアを見ると顔を真っ赤にして両手を前に突き出して振っていた。

「……この子、隠す気あるの？明らかに今は怪しいですよ。」

「ぼ、僕も着替えないとねっ！」

「……ああ」

俺はデュノアから目を離して、着替えを再開する。

そして着替えを終えると、改めてデュノアの方を見る。すると、デュノアは既に着替え終えていた。

「……随分と早いな」

「そ、そうかな？普通だと思うよっ？」

「・・・そうか。では行くでしょう。デュノアも初日から遅刻は嫌だ
るじっ。」

「うっ。うん。・・・あっ！僕の事はシャルルでいいよ。僕も一夏っ
て呼ぶからっ！」

「ああ」

授業には結局5分前に着いた。うむ、間に合ってたよかったよかった。

「本日から実習を開始する。まずは戦闘を実演してもらっ」

おお、誰だ？多分専用機持ちから選ばれると思うけど。

「鳳、オルコット」

「は、はいっ！」

「専用機持ちならすぐに準備できるからな」

ですよね〜。

鈴とセシリアが何かしらぶつくさと文句を言っていたが、織斑先生が二人に何かしら呟いた瞬間、二人とも急にやる気を出した。

・・・何言われたんだろ？

「で、誰と闘えばよろしいのでしょうか？別にわたくしは鈴さんでも構いませんが」

「あたしも誰でもいいわよ。いつでも本気でいっただけだから」

「慌てるな。お前らの対戦相手は」

すると次の瞬間、空気を切り裂く音と一緒に何かが入り込んで来た。

「あああーっ！ ど、どいてくださーっ！っ！」

「ん？」

おお、山田先生か……。……。ってこっちに突っ込んで来るんか
いつ！？

俺は黒菊を瞬時に展開し、突っ込んで来た山田先生を受け止める。

……。あ、あつぷな。

「……。大丈夫ですか、山田先生」

「は、はひ。らいしょうふねふ」

何故か顔を真っ赤にしながら嘔み嘔みで答える山田先生。……。何

で？別にお姫様だつこで受け止めただけよ？

次の瞬間、後ろから殺気を感じ、頭を横に動かす。すると、今まで頭があつた場所にレーザーが通過した。

・・・危なっ！？

「ホホホホ・・・残念です。外してしまいましたわ・・・」

「・・・殺す気か？」

後ろを見るとセシリアが笑顔で・・・しかし、額に血管を浮かび上げらせながらだけど・・・ライフルを構えていた。

「一夏・・・」

「・・・鈴」

「ええ、分かつてる。分かつてるわよ。不可抗力だつて」

今度は鈴に話しかけられたので鈴の方向を向く。すると、鈴も笑顔だった。双天牙月を連結して構えて。

「…………でもね…………それだけじゃ我慢できないものもあんのよおおおおっ！……！」

怒声と共に双天牙月をブン投げる鈴。あれってブーメランみたいに戻ってくるんだよな…………。というかお前もか鈴…………。

俺は黒雷を取り出して、双天牙月を打ち落とそうとする。しかしその前に銃声が響いた。

「ふう…………」

それはいつの間にか俺の腕の中でアサルトライフルを構えた山田先生が的確に双天牙月の両端を撃ち抜いて軌道を変えた物だった。

「・・・さすがです山田先生」

「ありがとうございます。・・・えと、それですな・・・そろそろ降ろしてほしいというか・・・べ、別に織斑君にこういう風にされるのが嫌というわけではないんですがっ!!」

「ああ、分かりました。確かに無礼でしたね」

確かに断りもなしに女性を抱き続けるのは失礼だもんね。

俺は山田先生をそつと降ろす。すると、山田先生は俺から慌てて離れる。そして少し離れた場所から顔を赤くしてチラチラとこつちを見る。

すると、何故か隣にいた織斑先生に笑顔で話しかけられていた。二言三言話すと今度は顔を真っ青にした。・・・何言われたのさ・・・

その後、模擬戦で山田先生は二人をフルボッコにして、IS学園の教師の強さを改めて生徒達に示した。ちなみに鈴はセシリアとぶつかってなければいいところまでいったと思われる。

まあ、俺は分かってたけどね。だって教えてもらってたし。

「では実習を開始する。専用機持ちはグループリーダーを務める。では分かれる」

すると、生徒達は迅速に動き分かれる。・・・まあ、確かに分かったのだが、かなり偏りのある分かれ方をした。むしろ二分した、と言った方が早いね。

「織斑君っ！頑張ろうねっ！」

「分からない所、教えてっ！」

「デュノア君の操縦技術、見たいなあ」

「ねえねえ、私もいいよね？」

まあ、ご想像の通り。俺とシャルルに皆集まったわけだが……
これじゃあ、始まんないって。

「何をしているバカどもがつー！出席番号順にわかれろつー！」

と、織斑先生の怒声が轟き、皆慌ててちゃんと分かれ始めた。

その後、それぞれのグループに訓練機が割り当てられた。うちのグループは『打鉄』を選んだ。

「……さてと……俺たちは『打鉄』を選んだが、とりあえずこのISについて分からないところはあるか？」

「……大丈夫です」「」「」

……うん、大丈夫かな。

「なら、出席番号順にISの装着と機動、歩行までをやるうか。ま

ずは1番」

「はいはいはーいつ！出席番号1番っ！相川清香っ！ハンドボール部っ！趣味はスポ ツ観戦とジヨギングだよっ！」

……元気づすね。

「よろしくお願いしますっ！！」

と、お辞儀をして、右手を差し出してくる。……握手ってこと？

「ああっ、ずるいつ！」

「私もっ！」

すると、それを見たグループの皆が騒ぎ始めた。

仕方がないので次の人、岸里さんを抱き上げて運ぶことにした。こ
っちの方が安全だからね。

そして岸里さんも順調にやっていったのだが、何故か同じく立った
まま解除してしまった。・・・マジか・・・

仕方なしに次の人も抱き上げて運んだのだが、再び同じく立ったま
ま解除してしまい、結局皆運ぶことになった。

そして最後の人もできた。その最後は・・・筭だった。

「・・・さて、筭。失礼するぞ」

「あ、ああ・・・」

俺は筭を抱き上げる。・・・うん、今までも思ったけど、女の子っ
て柔らか・・・

(これが……俗に言う”お姫様抱っこ”というものか……)

いかんいかん……無心になれ俺……

「……箒、着いたぞ」

「……」

……おい箒？無視ですか。

「箒？どうした箒？」

「な、何だ、いきなりっ!？」

「いや、何回も呼んだぞ」

「そ、そうか・・・すまない・・・」

箒を打鉄に移るのを眺めていると箒に話しかけられた。

「い、一夏・・・」

「どうした？」

「その・・・だな・・・」

おおっ・・・どした？

「・・・昼食を・・・一緒に・・・食べないか？」

「ああ、いいぞ」

「ほ、本当かっ！・・・！よ、よしっ！なら屋上で食べるとしよっ！・・・！
「・・・！よしっ！・・・！」

「・・・ああ、分かった」

なんかものすごく嬉しそうだね。うん、見てて微笑ましいよ。

その後、無事に授業を終えた。

「さて、シャルル・・・戻るとするか」

「あ、僕は機体の調整をしてから戻るから、先に行っていていいよ」

「なら待ってようか？それぐらいなら待つぞ」

「い、いいから先に戻ってねっ！ねっ！！」

「・・・ああ、分かった」

俺は明らかに怪しいシャルルを一目見て、とりあえずは言われたとおりに戻ることにした。

・・・念のため、調べてもらおうかな？・・・まだいいか。

第15話 お姫様だっこって実際にやってる人見たことないね（後書き）

大学の講義はこのままいけば、一日2、3個ですかね。部はアメフト部に入る予定です。活動はどれくらいなのかは分かりませんが・・。

可能な限り書いていきます。更新は絶対に止めません。未永くよろしくお願ひします。

第16話 自分と相手との問題に無神経に他人が口を突っ込んでくることほどお

今回も更新が遅れてしまい申し訳ございません。

どうやら部活は毎日あるようで、家に帰るのが9時半当たりなんですよね・・・しかも今、体のあちこちが筋肉痛です・・・

当分の間遅くなると思いますが、どうぞこれからもよろしくお願ひいたします。

第16話 自分と相手との問題に無神経に他人が口を突っ込んでくることほどお

というわけで、昼休みに屋上にいます。

「……………一夏、これはどついついことだ？」

「ん？何がだ？」

「……………何故皆がいる？」

「……………へ？その何処が変なのさ？」

「いつも一緒に食べてるだろうが、何をいまさら……………まあ、デユノア……………じゃなかった。シャルルは男一人じゃいろいろ大変だろうだからな。俺が誘った」

「ぐぬぬぬぬ……」

何故か唸りだした篤さん。そしてその手には弁当の包みが。……
なんと俺の分まで作ってきてくれたんだと。

……うん、すごく嬉しい。最近他の人の手料理なんてほとんど
食べていないに等しかったからな。……あ、五反田食堂や学食
は別ね。後は……まあ……うん。

「あ、一夏。久々に酢豚作ったんだけど……食べる？」

「ああ、頂こう」

おお、鈴の料理も久々だ。なかなか期待できますね。

「あ、あの……一夏さん……わたくしも作ってきましたの……
よかったですらどうぞ」

「……セシリア……味見は……」

「し、しましたっ！ けっしてこの前と同じような失敗はしておりませんわっ！！」

……実は前にセシリアが作った料理を食べたことがあるのだ……
・その時はひどかった……かろうじて意識は失わなかったが、しばらく頭がまわらなかったのだ。そして自分の料理を食べさせた。

セシリアは自分のを食べた瞬間、気絶した。そして目を覚ました後
おおいに凹んだ。その後、俺たちはセシリアに出来た料理はまず自分で味見をすること、を約束させたのだ。

「……なら頂」

「は、はいっ！！」

ちなみにセシリアのはサンドイッチ。……まずこれなら失敗しないだろう。

「え、えっと・・・僕がここにいていいのかな？」

「別に構わないさ。・・・たった二人しかいない男同士なんだ。仲良くしていいよ」

男一人だと今までがすつごくきつかったんだよね。ホント、シャルルが来てくれてよかったよ。・・・本当に男ならね。

「・・・さてと、いい加減食べるとしますか。まずは箸のから。」

箸から受け取った弁当の蓋を開けると、そこにはいかにもおいしそうな献立が並んでいた。

「・・・旨そうだな」

「そ、そうか・・・？」

「あゝ」

「そ、そうかそうか・・・なら食べてみてくれ」

「ああ、では頂」

じゃあ、まずは唐揚げから頂きまゝす。

と、食べようとして、ふと箸の弁当が視界に入った。

「・・・箸」

「な、なんだ？」

「・・・なんでお前の弁当に唐揚げが入っていないんだ？」

「え、あ、う・・・そ、それはだな・・・い、今私はダイエット中なんだっ!!」

(言えない・・・成功したのが一夏分だけなんて・・・)

へえ、そうなのか。

女性に体重の話はタブー。なので俺はこれ以上その話題に触れないように弁当を食べ始めることにした。

まずは唐揚げ。

「……旨いな。下味が随分と手が込んでいる。これは、下味に醤油と生姜……あと、何だ……？」

「ニンニクと胡椒。後は隠し味に、大根おろしを適量だ」

「すごいな。ここまで手の込んだのは初めて食べるな」

「うん、これくらい普通だ……」

「いや、少なくとも俺はすごいと思う……そうだな。お前も食べたらどうだ？」

そう言っつて俺は唐揚げを取っつて、そのまま箸の前まで持っつていく。

「なっつ、何を……っ!？」

「ほら、食っつてみる。せっつかく美味く作っつたんだから、本人も食べないと勿体無いだらう？」

「そ、そうか……で、では……はむ」

箸は戸惑いっつつも、パクリと唐揚げを食べる。

「……うん、良いものだな」

「だらう？うまく作っつたものだな」

「いや、唐揚げではないんだが……うん、実に良い」

「……?」

えと、・・・唐揚げじゃないなら何がイイワケ？

「あつ、これが日本のカップルがするっていう」はい、あ〜ん
『
ていうやつなの？いや、二人とも仲睦まじいんだね』

すると急にシャルルがそんなことを言い始めた。

「・・・それには間違いがあるぞ、シャルル。まず、俺と篤は力
ツプルではないし、今はカップルでなくとも普通にやることだ」

「・・・あれ？そうなの？」

「ああ」

その後、何故か急にヒートアップし始めた鈴とセシリアを宥めてい
ると、そのまま昼休みが終わってしまった。まあ、二人の弁当もき
つちりといただいたが。

「さて・・・まあ、色々あったが・・・シャルル、これからよろしく頼む」

「うん、じつちこそよろしくね、一夏」

そして放課後、俺とシャルルは俺たちの部屋でのほほんと過ごしていた。

「コーヒーでいいか？」

「うん、大丈夫だよ」

俺はシャルルにコーヒーを入れた。砂糖とミルクは自分で調整できるようにそれぞれ容器に入れて。

「・・・あ、おいしい・・・こんなにおいしいの初めてかも」

「それはよかった。まあ、これでも俺に教えてくれた人にはまだ敵わないんだがな」

「そうなんだ。・・・今度その人の飲んでみたいな」

「今度機会があつたら連れて行こう」

「本当？楽しみだな」

こうして話すと、鈴の時とはまた違った安心感があるね。・・・シャルルが家庭的っぽいからかな？

「そういえば一夏って放課後いつもISの訓練してるんだよね？」

「ああ。まだ完璧に慣れてはいないからな。・・自分の持つ力は早目に慣れておかないといざという時に困るかもしれないからな」

「ふくん・・ねえ、もしよかったら僕も手伝おうか？僕も専用機持ちだし」

「本当か？ならぜひ頼む。先生たちにも教わってはいるのだが未だによくわからないところがあってな」

「うんっ！任せてっ！」

こうして、放課後のIS訓練にシャルルが加わることになった。

いや〜助かるわ〜。いつもの3人は、あれだしな〜。

「・・・すごいね一夏。まだISに触れて3ヶ月経ってないのにそこまで動けるなんて・・・」

「まあ、元々体は動かしていたからな」

そして翌日の放課後。俺とシャルルは軽く手合せから始めた。結果は何とか僅差で俺の勝ち。いや〜危なかつたわ〜。あ、ちなみに俺たちは今日は遠慮してもらいました。だから二人だけです。

「でもどこかきこちないよね。まだISに慣れてないのかな?」

「そうだろうな。どこかいまいち慣れていないんだ。何故か違和感が消えなくてな」

「そうなんだ・・・う〜ん。なんでだろう?」

・・・俺がいままでライダーとして戦ってきたせいかな?どうして

も空中で戦うことに慣れないんだよね。

「・・・まあ、ひたすら動かしていたら違和感も消えるだろう。シャルル、もう一度頼めるか？」

「うん、いいよ」

そして俺とシャルルがもう一度手合せしようとして空中に上がろうとしたとき、急に周りがざわつき始めた。

「　　ねえ、あれってドイツの第三世代ISじゃない？」

「ウソッ、本国でのトライアル段階って話じゃなかったっけっ!？」

ドイツ?という事とは・・・。

自然とそちらを向くと、ピットの上に艶の無い、黒の機体があった。二機の大型スラストと、右肩部に装備された巨大な砲が特徴的だ。

そしてそれを纏っているのは案の定・

「ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・っ!」

隣にいたセシリアが呻くようにその名を呼んだ。・・・ってまでまで。いつの間になっていたの？

「あいつが・・・いきなり、一夏をひっぱたこうとしたヤツ・・・っ!」

「っ・・・」

そして鈴と箒もまた、ボーデヴィツヒを睨む。・・・はい質問です。いつのまにいたんですか？

・・・誰か答えてよ・・・なんか虚しいんだぜ・・・

「織斑一夏」

「……何だ？」

俺は気持ちを切り替えて、警戒しながらボーデヴィツヒに返す。

「貴様も専用機持ちなのだろう？　ならば、話が早い」

「……？」

「私と戦え」

どんな理屈なんだか。まあ、こういった手合いは何を言っても無駄だろうけど。

「断る。俺には戦う理由がない」

「貴様になくても、私にはある」

「……そうだろうな」

第二回モンド・グロツソ。

優勝確実とされていた織斑千冬が、決勝を棄権したという事で騒然となった大会。

理由は公にはされていないが、この様子を見るにボーデヴィツヒは知っているのだろう。

「貴様がいなければ、教官の大会二連覇という偉業をなしえたであろうことは容易に想像できる。だからこそ 私は貴様の存在を認めない」

「……そうか。ならば俺からも言わせてもらおう。……これは俺たちの問題だ。赤の他人は口を突っ込むな」

「っ!!! 貴様あああああっ!!!!!!」

ボーデヴィツヒが叫ぶとともに左肩の大型実弾砲が火を噴いた。

ふう・・・やれやれ。

俺は雪片式型を取出し、弾丸にそれを当てて弾道を逸らした。

「何っ!?!」

「・・・そう驚くことでもないだろう。これくらい普通だ」

「くっ!?!ならばもう一度っ!?!」

そうして再び俺に向かって実弾砲を放とうとする。

『その生徒っ! 何をしているっ! 学年クラス出席番号を言えっ!』

スピーカーから大音量で教師の声が流れてきた。騒ぎを聞きつけてやって来た、このアリーナを担当している教師だろう。

「・・・興が削がれた」

それだけ言うとボーデヴィツヒはあっさりと戦闘態勢を解き、アリーナゲートへと向かっていった。

「一夏っ！大丈夫っ！？」

「ああ。大丈夫だ」

ボーデヴィツヒが帰ったのを見届けて、警戒を解くとシャルルが心配そうな顔をして俺に走り寄ってきた。

「さてと、俺たちも今日は上がるとするか。さすがにもつやる気はしないしな」

「うん．．．」

「．．．で俺としては聞きたいことがあるんだが．．．」

そう言って俺は幕たちに向かい合った。

「．．．何でここにいるんだ？」

「そ、それはだな．．．」

「た、たまたまここで練習してただけよ」

「そそそそそうですわ」

「．．．．．そうか．．．」

あきらかにセシリアどもりすげ。．．．まあ別にいいけど。

「・・・俺とシャルルはもう上がる。お前らもほどほどにあがるよ
うにな」

そう言い残して、俺とシャルルは更衣室へと戻っていった。

・・・やれやれ、今年は厄年になりそうだな・・・

第16話 自分と相手との問題に無神経に他人が口を突っ込んでくることほどお

大学の講義は今のところそこまで苦ではないんですね。ただ、部活が本当に疲れる……。ブランクもあって体力もガタ落ちですし……。でも、楽しいからやめられませんね。

第17話 プトティラ、動くとかッコいいね（前書き）

どうもです。最近週一更新になってきました。書く時間が土日ぐら
いなせいですが・・・

ではどうぞっ！

第17話 プトテイラ、動くとかッコいいね

「一夏・・・本当に大丈夫？」

ピットに戻る途中、シャルルが心配そうな声で話しかけてきた。

「大丈夫だ」

「でも、あの実弾砲をずらしたんだよ？どこかしら傷めてると思うけど」

「どこも傷めたりしてないさ。・・・そうだな、あえて言うのなら衝撃で手が少し痺れたぐらいだ」

「・・・・・・・・・・本当に？」

「ああ」

「・・・・・・・・・・ならいいけど・・・」

「やれやれ・・・シャルルは心配性だね。」

「まあ、俺が動かなかつたらシャルルが俺を守ってくれたらどう？」

「へっ！？何で分かつたのっ！？」

「そつだな・・・お前の雰囲気だな」

「雰囲気って・・・」

実はボーデヴィツヒが俺のほうに来た時、シャルルの雰囲気が臨戦態勢に入ったのが分かつたのだ。ボーデヴィツヒが仕掛けてきたときに、すぐに動けるように。

「俺を守るうとしてくれてありがとう、シャルル」

「……でも、結局一夏が一人で終わらせちゃったし……」

「その気持ちが嬉しいのさ。……素直に受け取ってくれ」

そう言って俺はシャルルの頭を撫でる。……おお、いい撫で心地
だ。

「う、うん……」

「さて、俺は更衣室に戻るが……シャルルはどうする？」

「え、えと……僕はもう少ししてから行くね」

「分かった」

そう言って俺とシャルルはその場で別れた。そして俺は先ほど言った通り、更衣室に向かう。

「・・・ラウラ・ボーデヴィツヒ、か・・・」

千冬姉さんに固執し、力に固執したか・・・それが別に悪いこととは言わないが、他人に押し付けすぎるのはな・・・。

俺は先ほどボーデヴィツヒの言葉を思い出す。

不意に更衣室に何かを思いっきり叩く音が聞こえた。それは俺が口ツカーを思いっきり殴った音だった。

「言われなくとも分かっているさ・・・っ！！自分の力の無さにも、千冬姉さんの足をただ引っ張っているだけなのも・・・っ！！」

あの時の俺はただ、されるがままだった。けっして同じことが無いようについておやっさんに弟子入りしてすぐのことだった。

「あの時の自分ほど憎いものはない・・・っ！！」

どこか慢心していた所があったと今考えると思ふ。おやつさんに弟子入りできて安心していたのだろう。

その後、俺は千冬姉さんが助けに来てくれるまで何も出来なかった。

俺は今更ながらにその時の悔しさを思い出して、拳を震えさせた。

「織斑くん、デュノアくん、いますか？今お着換え中ですか？」

すると、更衣室の外から急に山田先生の声が聞こえた。

「……………織斑、います。今着替え途中ですから少々お待ちを」

「はーい。分かりました」

……………なんか急に気が抜けちゃったね。やれやれ……………ま、

でも山田先生に感謝かな？

俺は急いでISスーツを脱ぎ、制服に着替えた。

「どうぞ」

「じゃあ、失礼しますね」

俺が許可を出すと、そう言ってドアを開けて山田先生が入ってきた。

「それで、一体どうしましたか？何か重要な話でしたら、シャルルも連れてきますが」

「あ、いえ、そこまで重要な話ではないので後で織斑君が伝えて下さい。・・実はですね、今月下旬から週2回ですが、男子が大浴場で入れることになりましたっ！」

へえ・・・そりゃラッキー。今まではシャワーだけだったから、ゆつくり暖まりたかったし。

「・・・それはよかった。久々にゆっくりと暖まれます」

「喜んでもらえたようで良かったです。・・・え、えと・・・それでですね・・・織斑君に個人的なお願いがあるので・・・」

へっ？個人的なお願いって何？

「・・・内容にもよりますが、いったいどんな・・・？」

「えっと、あのですね・・・またもう一度、あのコーヒーを飲みたいな～・・・なんて・・・」

山田先生は両手の人差し指をツンツンさせながらそう言った。

「・・・なんですかこれ？滅茶苦茶かわいいんですけど・・・」

「……別に一度と言わず、何度でもいいですよ」

「ほ、本当ですかっ！？ありがとうございますっ！！」

山田先生は喜びのあまり、俺の両手を握った。

「そうですね……では今度は豆を変えてみましょうか？」

「わぁ……今から楽しみですっ！」

俺の両手を握ったまま、ブンブン腕を振って喜びを露わにする山田先生。

そこまで言われるとは……嬉しいね。

「……一夏、何してるの？」

「……何か不機嫌ボジスが……間違えた、ボイスが聞こえる。」

さて、今回は誰かな？つて後ろを見てみると、そこに居たのはシヤルルだった。

「まだ更衣室にいたんだ。山田先生と手を握って何してるの？」

「何、今月下旬から大浴場が使えるという話と、ちょっと個人的な頼みを引き受けただけさ」

「……個人的な頼み？」

「……なんか不機嫌度が増したような……なんか拙いこと言った？」

「ああ。またコーヒを飲みたくなったそうだな。別にいつ来ても構わないと言っただけだ」

「・・・そうなんだ」

「あ、織斑君にはもう一つ用事がありましたっ！黒菊に関する書類を書いてほしんですが、時間いいでしょうか？」

「ええ、構いません。では行きましょう・・・シャルル、遅くなりそうだから先にシャワーを使っていてくれ」

「・・・分かった」

そう言い残した後、俺は山田先生と一緒に更衣室を出て職員室に向かった。

「・・・はあ・・・」

シャルルは寮の自室に戻って一人になった瞬間、思いつきり溜息をついた。

（何をイライラしてるんだか・・・）

先ほどの更衣室での自分の態度を思い出す。きつと一夏も不審に思っただけに違いない。

（・・・シャワーでも浴びて気分変えよう・・・）

シャルルはクローゼットから着替えを取り出し、シャワールームへと向かった。

「やれやれ……」

書類は思ったより早く終わった。まあ、名前を書くだけだったし。

……最近、ドーパントやイメージンの情報はほとんど聞かない。もう、活発に動くことはないだろう。ならば、あの人たちだけで解決することが出来る。俺の助けはもういらないだろう。

「……となるとそろそろこれも潮時、か」

俺は懐から黒い長方形の物体を取り出す。それを手で弄ぶ。

……なんかそう考えると、寂しいな……でも、いいことには
違いない。

俺はそれを再びしまい、寮の自室に戻った。

「シャルル、今戻った」

「へっ!?!い、一夏っ!?!?」

ドアを開けるとそこにいたのは……バスタオル一枚でいる少女だった。

よく見ると、まだ濡れており、手にはボディソープが握られていた。

……ああ、そういえば切れてたの言うのすっかり忘れてたよ。

「……………まずはちゃんと拭いて着替えて来い。話はそれからだ」

「……………え、あ、うん……………」

その少女、シャルルは呆然としたまま、シャワールームに戻っていた。

・・・さてと、まあ、予想通り。ただこんなに早く分かるとは思わなかったけど。

俺はコーヒーを淹れながら、シャルルが出てくるのを待つ。

そして、シャワールームのドアが控えめに開けられた。

そちらを向くと目に入ったのは髪を束ねずに、若干ラフな格好をしたシャルルだった。まあ、簡単に言うと女の子の格好をしていた。

「・・・さあ、そこに座ってくれ。・・・コーヒーでいいかな？」

「う、うん・・・」

「まずは一口飲んで、落ち着いてからにしよう」

そう言うとシャルルは素直にコーヒーに口を付けた。そして、シャルルの顔が若干緩んだのを確認すると、俺もコーヒーに口を付けた。

「・・・一夏はあんまり驚いていないようだけど、僕が女の子だっ
て分かってたの？」

「・・・ほぼ確信していたな。だが、何か決定的なものがあったわけ
ではないから何も言わなかった。それに態々男装までして入学した
理由を知りたかったしな・・・まあ、大体予想はつくが」

「そうなんだ・・・はは、すごいね、一夏は」

「・・・これでも、探偵見習いだからな」

そして、少しばかりの静寂が訪れる。俺は再びコーヒーに口を付け
る。シャルルはカップをジッと見たまま動かない。

「・・・僕が男装した理由、聞いてくれる？」

「・・・ああ。だが、無理をしなければならなくていい。ゆっくり、な」

「うん。・・・僕が男の振りをしてIS学園に入った理由なんて」

ど、実家の方、デュノア社の社長である僕の父から命令されたからなんだ」

「……お前が愛人の子だからか？」

「……どうしてわかったの？」

「デュノア社の社長は前に愛人がいたと聞いたことがある」

「……そうなんだ。……うん、正解。母が死んで父の部下がやって来たのが二年前。その時の検査でIS適正が高いことが分かって、非公式ではあるけどデュノア社のテストパイロットをすることになったんだ」

「……」

シャルルは辛そうにしゃべり続ける。俺はそれを無言で聞いているしかなかった。

「一度だけ本邸に……あ、僕は普段、別邸にいて父とは別々に暮らしてるんだ。それで、一度だけ本邸に呼ばれたことがあるんだけど」

ど、あの時は酷かったな。『泥棒猫の娘がつー！』って本妻の人に殴られちゃったよ。母さんも少しくらい話してくれば良かったのに」

そう言いながら、シャルルはあははは、と乾いた笑いを浮かべる。俺は笑えなかった。愛想笑いすらも。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったんだ」

「第三世代型開発の遅れ、か」

「うん。いくらISのシェアが世界三位だからって、所詮リヴァイヴは第二世代型。それにフランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッションプラン』から除名されちゃってるからね」

「・・・そして、そのプランに再び参加するためにデュノア社も第三世代型ISの開発に着手した。が、圧倒的に他国や他の会社よりもデータや時間が不足。更に政府からは予算を大幅に削られ、最悪の場合、援助は全面的にカット。・・・といったところか」

「うん、正解。・・・もう分かるよね。僕が男の子の振りをした理由」

「……広告塔にして話題性を集めるのと、同じ男として俺に接触しやすくし、黒菊のデータを盗むため、か」

「……本当にごめん……」

涙で声を曇らせながら、シャルルは深々と頭を下げた。それを見た俺はゆっくりと席を立つ。

それを雰囲気で分かったのかシャルルはビクッと身体を震わせた。

俺はそんなシャルルを抱きしめた。

「……え……」

「……辛かったな。今まで気づいてやれなくて本当にすまなかった」

「そ、そんな一夏が悪いんじゃないっ！」

「今までほとんど一緒にいたのにお前の苦しみを分からなかった。
これの俺の罪だ」

「……………一夏……………」

「……………思いっきり泣け。今の俺にはそれを受け止めるぐらいしか
出来ないがな」

「……………うわああああああっ!!」

俺の言葉をきっかけにシャルルは盛大に泣き始めた。俺はただ、そ
れを無言で受け止めた。

第17話 プトティラ、動くとかッコいいね（後書き）

実は足をねんざしまして、完治するまで部活に出れない状況です。そのときに一気に更新していきたいと思っております。まあ、月曜は部活に行きますが。練習ではなかったと思うんで。

・・・アメフト。やるのも見るのも楽しい・・・

第18話 新歓が怖い……（前書き）

どうもです。なんだかんだで病院や雨が降ったので練習ではなくミーティングになったりで更新ができませんでした。申し訳ございませんでした。

ではどうぞ。 ああ・・・月曜の新歓が怖い……………

第18話 新歡が怖い……

「……………ごめんね。制服濡らしちゃって……………」

「何、制服を濡らして少しでもお前の気が紛れるなら安いものさ」

「ふふふ……ありがとう」

シャルルが泣き終わり、俺はシャルルから離れて、少しばかり冷めてしまったコーヒーに口を付けた。

「……………さて、少し真面目な話をしようか……お前はこれからどうする？」

「え、どうするって言われてもなあ……………。一夏にばれちゃったから本国に戻されるのが落ちかな？デュノア社は……うん、他の企業に吸収されて終わりかな……」

シャルルは明確な自分の悲劇的な未来が見えているのにもかかわらず、どこかスッキリした表情になっている。

「何だか一夏に話したら胸の中が軽くなったよ・・・ありがとう。それと、今まで騙しててごめん」

「・・・俺が聞きたいのはそんなことじゃない」

「・・・え？」

「お前がどうしたいかを聞いているんだ」

「どうしたいって言われても・・・代表候補生も下ろされて、牢屋に入れられるだけだよ」

「・・・だから違うって言うてるのが分からないのかなっ!？」

「・・・俺はお前の悲観的な結末を聞きたいわけじゃない。お前がどうしたいかを聞いているんだ」

「だから……」

「それはお前の今後の予想だろう。お前の望みはなんだ？何故そこまで悲観的になる？何故……何故誰にも助けを求めない？」

「一夏……」

俺が一番ムカついているのはそこ。何で誰にも助けを求めないのか・
確かに相手は大企業だし、ここにいるのは学生と教員だ。……で
も、助けを求めるくらいなら許される筈だ。

「……俺はお前が望むならお前を絶対に助け出してみせる。……
・どんな手を使ってもだ」

「……」

「……もう一度聞けど。お前はどっしりたい？」

シャルルは黙ったまま、俯いている。俺はそんなシャルルを黙って見ている。

「……僕は……この学園にいたいっ!!もつと皆と……夏と一緒にいたいよお……っ!!……だから……助けて、夏っ!!!!」

顔を上げたシャルルは再び泣きながら、叫ぶ。助けを求める言葉を。

俺はそんなシャルルをもう一度抱きしめる。

「ああ、助ける……絶対にだ」

俺の言葉を聞き、シャルルは安心したように思いつきり抱きついた。

しばらくすると、シャルルから寝息が聞こえてきた。

「…よっぽど疲れてたのか…今まで気づいてやれなくてごめんね。」

俺はシャルルをベッドに寝かせる。そして離れようとするが…

「んう…」

「…やれやれ…」

シャルルは俺の服を掴んで離さなかった。

そんなシャルルに俺は苦笑を洩らした。そして離れるのを止めて、そのままシャルルの頭を撫でる。すると、シャルルは安心したような笑みを零した。

そんなシャルルに少しばかり和んでしまった俺は慌てて気を引き締める。そして携帯を取り出し、ある場所にかける。…鳴海探偵事務所に。

『はい、鳴海探偵事務所』

「俺だ。兄弟子」

『一夏あ？どうしたんだ、また厄介事か？』

「……そうだろうな……だが、こればかりは譲れなくてな……」

『……一から説明しろ』

俺の雰囲気悟ってか、兄弟子は一からの説明を求めた。俺はシャルルについてのほぼ全てを兄弟子にしゃべった。

『……成程な……胸糞ワリイ……』

「……俺はシャルルを助けない。そのためにはどんな汚い手も使う……そこで頼みがある」

『フィリップの検索でデュノア社の弱みを調べてほしい・・・だろ?』

「・・・・・・・・そうだ」

やっぱり分かったか・・・

「・・・・・・・・別に断ってくれても構わない。ほかの方法を模索するだけだ」

『・・・・・・・・お前なあ・・・・・・・・』

俺がそう言つと兄弟子はため息をついた。・・・・・・・・な、何?なんか変なこと言った?

『ここまで聞いて俺が断ると思つてんのか?お前は一人で頑張りすぎなんだよ。・・・少しは俺たちを信じてくれてもいいんじゃないか?』

「・・・別に信じていないなど・・・」

『このタイミングで断つてもいい、なんて言うのは信じてないって言うてるのと同じだぜ?』

「・・・」

そう、なのかな・・・俺は信じてなかったのかな・・・?

『・・・フィリップも協力するってよ。ていうかもっ検索始めてるぜ』

「なっ・・・!?!?」

『これでもっ引き返せないぜ?』

・・・本当にいつまでたつてもこの人たちには勝てないよな。

「……分かった。なら遠慮なしに巻き込ませてもらう」

『ったく、ようやくその気になったか』

「ああ、すまなかった。……資料は後日、俺がそつちを訪ねるからその時に……フィリップさんよろしく」

『おう、じゃあな』

そう言って俺は電話を切った。……あの人たちの性格を考慮してなかった俺の負けか……

俺は苦笑しながら冷めてしまったコーヒーを一気に飲み干した。

「……一夏さん、いらっしやいます？まだ夕食を食べていらっしやらないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」

「……セシリアか？」

「はーい」

……ん？この状況はちょっとまずいかな？

俺は念のためシャルルに布団をかけて、寝込んでるようにした。

「……今、シャルルが具合が悪いつて寝込んでてな……その様子を見てたんだ」

「まあ、そうですね……大丈夫ですか？」

「今は落ち着いているようだ……悪いがセシリア、俺とシャルルの夕食をとってきてくれないか？ああ、お前が食べ終わってからで構わない」

「わかりましたわ」

そう言ってセシリアは食堂に行ってくれた。……やれやれ、
安心—安心。

俺はふう・・・と息を洩らした。

「ふう・・・一夏あ・・・？」

「・・・おはよう、シャルル」

すると、シャルルが随分と寝ぼけた声を出しながら起きた。ちなみに今までシャルルは俺の服を握りっぱだ。

「んあ・・・ふえっ!?!一夏っ!?!な、なんでそんな近くにいるのっ!?!」

シャルルが顔を真っ赤にして声を上げる。どうやら俺がすぐ隣にいたことに驚いているようだ。

「ふう・・・どこかの寝ていた人がちっとも離してくれなくてな」

「え……？……うわぁっ！？」ごめんっ！！」

ようやく、気がついてくれたようで慌てて離してくれた。そしてシャルルが深呼吸をして落ち着いたところで俺はシャルルに話しかけた。

「……セシリアが俺たちの夕食を後で持ってきてくれる。それまでには着替えて」

「一夏さんっ！お待たせしましたわっ！」

「……早っ！何でっ！？まだ5分経ってないよっ！？」

俺がセシリアが来る前にシャルルを着替えさせようと言った瞬間、セシリアが夕食を持ってきた。

「……シャルル。布団をかぶっておけ」

「……っん」

シャルルが布団をかぶったのを確認した後、俺は部屋のドアを開けた。

「……セシリア、早かったな」

「まず一夏さんたちのを先に持っていった方がよろしいかと思いついて、わたくしが食べる前に持ってきましたわ」

「そうか……すまない」

「一夏さんが謝ることはありませんわ。わたくしが勝手にやったことですから」

「……なら、ありがとうと言わせてもらおう。……もう大丈夫だ」

「そうですね……なら、わたくしは食堂に戻りますね。デュノアさんにはお大事にと……」

「ああ、伝えておこう」

「では、失礼します」

そう言ってセシリアは食堂に戻っていった。俺はセシリアから受け取った焼き魚セットを片手に一つずつ持ち、部屋に戻った。

「シャルル、夕食だ。セシリアが持ってきてくれた」

「うん、じゃあ頂くね」

そう言ってトレイを受け取った瞬間、シャルルの顔が固まった。

「……………どうした？」

「え、え」と……………」

……………何か嫌いなものでもあったかな？

「・・・和食、嫌いだったか？」

「う、ううんっ！そんなことはないよっ！」

俺が尋ねると、シャルルは慌てて箸を取り、食べ始める。それを見て、俺も食べ始めるが・・・

ポロっ。

「あっ・・・」

ポロっポロっ

「あっあっ・・・」

・・・成る程ね。箸が苦手なわけね。

俺は自分の箸を置いた。

「……スプーンを貰ってごよう。そのままでは食べれないしな」

「だ、大丈夫っ!!」

「……無理をするな」

それじゃいつまで経っても食べれないしね。

俺は席を立ってスプーンを取りに行こうとする。

「じゃ、じゃあ……一夏が食べさせて？」

「……何？」

「さ、さっき言ってくれたよね。僕が望むなら助けてくれるって」

・・・いや、言ったけどね。このタイミングでそれ持ち出す？

そんな疑問を持ちながらシャルルの方を向くと、そこには上目遣いをしたシャルルがいた。

「・・・ダメ？」

「・・・分かった。いいぞ」

「ほ、本当っ!?!」

「ああ」

あんなシャルルに勝てる人がいたら教えてほしいね。うん、少なくとも俺は無理。

俺は溜息をつきながらシャルルの箸を取り、シャルルに食べさせることにした。

シャルルがニコニコしながら食べる姿を見て俺は和みながらその夜を過ごした。

第18話 新歡が怖い……（後書き）

DOG DAYS見ました。なかなか面白いですね。・・・なんか書きたくなった。

書くなら冷静でカリスマ性のある主人公とか面白そう。・・・その場合合はシンク成り代わりじゃなくて完璧なオリ主かな？

第19話 なんだか無性に・hack/UG・U・がやりたくなった(前書き)

どうもです。なんかもう週一更新ですね・・・うんもつと早く書きたいな・・・

新歓はあまり飲まされませんでした。しかし、酔いつぶれた人たちの世話を少々しまして、むしろそっちで疲れました・・・

ではどうぞっ！

第19話 なんだか無性に・hack/UG・がやりたくなった

月曜日の朝、シャルルと共に教室に行くとそこには何やら女子が集まっていた。

そこにはセシリアや鈴の姿もあった。

「そ、それは本当ですよ!?!?」

「……嘘くさ……というかアホラシ」

「ちょっとアホラシってなにさ。マジなんだからね。この噂、学園中で持ちきりなのよ?月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と交際でき」

「俺がどうかしたか?」

「」「」「きやああっ!?!?」「」「」

俺が声をかけるとその場にいた女子が悲鳴を上げた。・・鈴以外。

「・・・鈴、何の話だ？」

「・・・んゝ別に何でもないわよ。さてと、あたしはそろそろ戻るわ」

「・・・ああ」

そう言っつて鈴は自分の教室に戻っていった。そして皆もいつの間にか自分の席に着いていた。

「・・・一体なんだったんだ？」

「・・・さあ・・・」

(な、なぜこのようなことに……)

教室の窓側列で箒は表面上平静を装いつつも、心の中では頭を抱えていた。

その理由は月末の学年別トーナメントに関する噂が原因だった。

『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏と交際できる』

(そ、それは私と一夏だけの話だろうっ！)

今思えば廊下だったため、誰かに聞かれていた可能性が高い。

(まずい、これは非常にまずい)

この噂をほとんどの女子が知ることとなっているらしく、さっきも教室にやってきた上級生が『学年が違う優勝者はどうするのか』『授賞式での発表は可能か』などとクラスの情報通に訊きに来ていた

(と、とにかく、優勝だ。優勝すれば問題ない。優勝すれば・・・)

箒は再び気合いを入れ直した。

「やれやれ。トイレに行くのにも一苦勞だ・・・」

休み時間、俺は学園に三箇所しかないトイレのうちの一つからの帰る途中だった。

トイレは遠い上に廊下は走ってはならないという校則付きだ。

うう・・・さすがにっらいんだぜ・・・

「なぜこんなところで教師などっ！」

「やれやれ・・・」

ん？・・・なにか話し声が・・・

そっと覗いて見ると、声の主は織斑先生とボーデヴィツヒだった。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですかっ！」

あの無口無表情なボーデヴィツヒさんがここまで熱くなるなんてね。よほど尊敬しているのか、はたまた自分の理想像を押しつけてるのか……

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「ほっ」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありませんん」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファクションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低い者達に教官が時間を割かれるなど」

「……………そこまでしておけよ、小娘」

「っ……………！」

あゝあゝ怒らしちゃった。大体さ、その違いを学ぶためにここに通うわけでしょ？それも理解できないのかね？

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間とは恐れ入る」

「わ、私は……………」

ボーデヴィツヒの声色が震える。

……………恐怖か……………自分を唯一認めてくれたものから嫌われる恐怖……………

「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「・・・・・・・・」

織斑先生にそう言われると、ボーデヴィッツは無言のまま足早に立ち去った。

「その男子。盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」

「・・・・・・・・たまたま聞こえただけですよ。織斑先生」

・あはは〜やっぱりばれてら・・・

俺は大人しく隠れていたところから出てくる。

そこには苦笑している織斑先生がいた。

「織斑先
」

「そら、走れ劣等生。このままじゃお前は月末のトーナメントで初

戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」

「……………了解です」

「よろしい」

俺が何かを言う前に織斑先生が教室に戻るよつに急かす。

仕方がないので大人しく言うとおりにすることにした。

「織斑……廊下を走るな……とは言わん。バレないように走れ」

「……………はい」

そう言っつて織斑先生は後ろを向いてくれた。……見逃してくれると
いうことなのだろう。

俺はお言葉に甘えて走って戻ることにした。

「「あ」

二人そろって間の抜けた声を出してしまう。時間は放課後。場所は第三アリーナ。人物は鈴とセシリアだった。

「どうしたのセシリア。あたしはいつも通りに練習しに来ただけ
ど」

「わたくしは月末の学年別トーナメントに向けて特訓するためです
わ」

セシリアはどうやらトーナメントで優勝を狙っているらしい。鈴は
そこまで興味はないようだ。

「じゃあさ、あたしと一緒に練習しない？あたし基本ダメー相手だからさ、たまには人ともやりたいんだよね」

「・・・構いませんが鈴さん。あなた優勝する気はないのですか？」

「ああ・・・あの噂？あの朴念仁の一夏がそんなのやつても分かりっこないわよ。付き合っつて意味をどこか一緒に出かけるに100%思っている奴が」

「そ、そうなんですの・・・」

「そうなの。・・・まあ、いいや。じゃ始めましょ」

「ええ」

二人ともメインウェポンを呼び出すと、それを構えて対峙した。

「では・・・」

キュウンッ!!

いきなり声をさえぎって超音速の砲弾が飛来する。

「「ッ!?!」」

緊急回避の後、鈴とセシリアは揃って砲弾が飛んできた方向を見る。そこにはあの漆黒の機体が佇んでいた。

機体名『シユヴァルツェア・レーゲン』登録操縦者……

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

セシリアの表情が苦くこわばる。その表情には欧州連合のトライアル相手以上のものが含まれていた。

「……どういつつもり?いきなりぶっ放すなんていい度胸

してるじゃない」

連結した双天牙月を肩に預けながら、鈴は衝撃砲を準戦闘状態へとシフトさせる。

「中国の甲龍にイギリスのブルー・ティアーズか。……………ふん、データでみたときのほうがまだ強そうではあったな」

その挑発的な物言いに、セシリアが口元を引き攣らせる。が、鈴は平然としている。

「はいはい。そんなに相手を見下して楽しい？それともそんなバカなことするように織斑先生から習ったのかしら？」

「ッ！？……………はっ……………。二人がかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか脳のない国と古いだけが取り柄の国はな」

ぶちっ！

何かが切れる音がして、セシリアは装備の最終安全装置をはずす。鈴はそんな光景を見て溜息をつく。

「はぁ……こんなんじゃ織斑先生もかわいそうだね。人の事を見下すことしかできない屑を育て上げちゃったんだから」

「貴様……っ!!」

「セシリア、あんたがやりたいならやっていいわよ。あたしはいつでもいいから」

「ありがとうございます。鈴さん」

「……はっ！二人がかりで来たらどうだ？一足す一は所詮二にしかならん。下らん種馬に熱を上げる様なメスに、この私が負けるものか」

「……っ！場にいない人間の侮辱まですると、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けぬようにここで叩いておきましょう」

「あんたはただ単に尊敬している織斑先生が一夏に惚れこんでるのが許せないだけでしょ？そんなことで人を馬鹿にするなんてバツカみたい・・・そんなバカの相手なんてまっぴら御免だわ」

「ふん・・・なんだ、逃げるのか？・・・お前らはおやつさんとやらから逃げることにしか教わらなかったのか？」

「・・・あんた、なんでおやつさんのことを・・・」

その場から離脱しようとしていた鈴はラウラが言った言葉で動きを止めた。

「教官から聞いたただけだ。・・・ふん、教官は認めていたが、どうやらただの腰抜けだったみたいだな。さすがは仕事中に無駄死にしただけはある」

その言葉を聞いた瞬間、鈴の中で何かが弾けた。

「・・・あんた、よっぽど死にたいんだ。死人を罵倒するなんて

いい度胸してるじゃない。しかもあたしたちが尊敬してる人をね・・
セシリア、悪いけどあたしも参加させてもらっわ」

「ええ、分かりましたわ」

鈴もキレて参戦することになった。ラウラはそんな二人を見て更に挑発する。

「とつとと来い」

「上等っ」

放課後、俺とシャルルはアリーナに向かうことにした。さすがに初戦敗退はやだからね。

途中で箒も合流し、一緒に向かうことにしたのだが……

「……何やら、アリーナの方がさわがしいな」

箒の言うように、アリーナの方が妙に騒がしい。俺たちは少し早歩きでアリーナに向かった。

するとそこにはボーデヴィツヒと鈴、セシリアが戦っていた。

「……何をやっているんだ？」

「模擬戦ってわけじゃなそうだね」

見る限り、二人のISは一部破損。それに、かなりダメージを負っている。

それに対してボーデヴィツヒは余裕そうだった。

「……あそこまで鈴が押されるとはな。……よほど相性が悪いのか……」

鈴の衝撃砲はどうやら完璧に無力化されているようだ。何かしらのバリアーがあるのだろう。

眺めているとシャルルが話しかけてきた。

「……一夏、止めなくていいの？」

「……何があったかは知らないが、あいつらが戦い始めたものだ。よほどの事がない限りは何もしないつもりだ」

「……そう」

しばらく眺めていると、鈴とセシリアが逆転したかに思える攻撃を放ったが、ボーデヴィツヒは無傷だった。

そしてボーデヴィツヒは……ワイヤーブレードでいいのかなあの武器は……まあ、それらしきもので二人を拘束した。

そして鈴とセシリアは、その腕に、脚に、体に、ボーデヴィツヒの拳が叩き込まれている。

シールドエネルギーはあつという間に減って機体維持警告域を超え、デッドゾーン操縦者生命危険域へと到達する。

しかし、ボーデヴィツヒは攻撃の手を止めないただ淡々と鈴とセシリアを殴り、蹴り、ISアーマーを破壊していく。

そしてその行為を続けるボーデヴィツヒの表情は……優越に歪んでいた。まるで、ドーパントのように……

「っ！！」

それを見た俺は瞬時に黒菊を展開し、零落白夜を発動し、アリーナを取り囲むバリアーへと叩きつけた。

そして瞬間加速を発動し、雪片式型をボーデヴィツヒに突き付けた。

「……さすがにもう見過ごすことはできないな」

「……ふん」

すると何か嫌な予感が体中を駆け巡った。俺は瞬間、半身をずらした。すると、身体右半分が何かに拘束されたように動かなくなった。

「っ……これは……っ！」

「ちっ！！半身だけかっ！！」

俺は残った左手に黒嵐を取り出し、ボーデヴィツヒに向けて連射した。

「ちっ！くそっ！……」

ボーデヴィツヒはその場から離脱した。その瞬間、俺の拘束が解けた。それを理解した瞬間、俺は鈴とセシリアの元に向かった。

そして、二人を抱きかかえその場から離脱した。そしていつのまにかISを纏ってこっちに来ていたシャルルに二人を渡す。

「…………二人を頼めるか？」

「うん、任せて…………一夏は？」

「…………俺は」

そう言って俺はこちらを睨みつけているボーデヴィツヒに向き合う。

「……力に溺れた愚か者の目を覚まさないとな」

「…………分かった」

シャルルはそう言っただけで大人しく客席に戻ってくれた。それを見届けた俺は雪片式型を取り出し構える。

そして二人同時に斬りかかろうとした瞬間、何処からともなくISの近接用ブレードが俺たちのちょうど真ん中に落ちてきた。

「そこまでだ。馬鹿者ども」

声のした方向を見るとそこには織斑先生がいた。・・・スーツ姿で。

「模擬戦をやるのは一向に構わん。・・・だが、アリーナのバリアーまで破壊する事態にならねば教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそうおっしゃるなら」

「・・・了解しました」

「では、学年別トーナメントまでの私闘を一切禁ずる。では解散
！」

パアンツ！！

その言葉と同時に織斑先生が手を叩いた。そしてその場は解散とな
った。

第19話 なんだか無性に・hackノG・U・がやりたくなった（後書き）

今、1年生の間でモテモテのマネージャーがいます。分かっているだけでも3人が惚れてます。・・・いや、見てて面白い。ニヤニヤしながら見物してます。

自分はよくそのマネージャーと一緒にいるので好きなかとはよく誤解されますが、じぶんは趣味の合う友達って感じですね。

しかし、まあ、人の恋愛事情は見てて面白いwww

第20話 まもなくバサラの映画公開です・・・でも金が拙いかも・・・(前書き

どうもです。遅れてしまい申し訳ございません。実は土曜日に練習試合がありまして・・・自分が出なかつたんですが、まあかなり遠いところでやることになったのでとても疲れて土曜日は執筆できず、なんとか日曜日で書き上げた感じです。

ではどうぞ。

第20話 まもなくバサラの映画公開です・・・でも金が拙いかも・・・

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・一夏、助けてくれてありがとうね」

「・・・礼を言われるほどではないさ」

場所は保健室。時間は第三アリーナの一件から一時間くらいだね。

ベッドの上では打撲の治療を受けて包帯の巻かれたセシリアが不機嫌な顔で視線をあらぬ方向へと向けていており、同じく鈴もそんな状況になっているが、俺に礼を言ってきた。

「・・・・・・・・あのまま続けてたら勝ってましたわ」

「・・・・・・・・意地を張るのはいいがほどほどにしておけ」

「別に意地じゃありませんわっ!!」

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「ん？」

飲み物を買いに行っていたシャルルが戻ってきた。部屋に入るときに何か言っていたけど、よく聞こえなかった。

それは俺だけだったらしく、鈴とセシリアは何かをしつかりと耳にしたようで、セシリアは顔を真っ赤にして怒り始めた。

「べべっ、別にわたくしはっ!そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ!」

「……わかりやす」

セシリアは何やらまくし立てながらさらに赤くなっている。そして

鈴はその横でボソツと呟いた。

……一体シャルルは何を言ったんだろう？ 気になるわ。

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ありがとね。喉乾いてたから助かるわ。」

「不本意ですがいただきましたきましようっ！」

セシリアは渡された飲み物をひったくるように、鈴は普通に受け取って、ペットボトルの口を開けるなりごくごくくと飲み干す。

おお、すごい勢いだね。

「……先生も落ち着いたら帰っていいって言うてることだから、しばらく休んだら」

って、危なっ！？本当に吹き飛んだよっ！？

「織斑君っ！」

「デュノア君っ！」

入ってきたのは数十名の女子生徒だった。そして、俺とシャルルを見つめるなり一斉に取り囲み、手を伸ばしてきた。

・・・怖っ！？何これっ！ゾンビみたいだよっ！？ホラーだよっ！？

「・・・・・・・・とりあえず、落ち着け。一体何事だ？」

「「「これっ！」「」」

状況が飲み込めない俺たちに、バンっ！と女子生徒一同が出してきたのは学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

「な、なにになに・・・？」

「・・・」『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的に行うため、二人一組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』

「ああ、そこまででいいからっ！とにかくっ！」

彼女たちは再び一斉に手を伸ばしてきた。

「私と組もう、織斑君っ！」

「私と組んで、デュノア君っ！」

何でいきなりトーナメントの仕様変更があったかは知らないけど、ここにいる女子たちは学園でたった二人しかいない男たちと是が非でも組みたいんだろう。でも、そこには一つの問題がある。

「え、えっと……」

そこにいるシャルルだ。シャルルは実は女の子でありそれを隠している。つまりは誰かとペアになると正体がおかの拍子でばれる可能性がある。それは非常に拙い。なので……

「……悪いが、俺はシャルルと組むことにした。あきらめてくれ」

しゅん……

俺がそう言つと周りの女子たちが沈黙した。

「まあ、そういふことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士っていうのも絵になるし・・・ゴホンゴホン」

「いいネタが出来たわ・・・ジュルリ」

「・・・最後の二つは絶対に聞かなかったことにしよう。うん、怖すぎる。」

「とりあえずは納得してくれたようで、女子たちは皆保健室から出て行った。」

「ふう・・・やれやれ」

「あ、あの、一夏・・・」

「一夏さんっ！..!」

俺は安堵のため息をついた。そんな俺にシャルルが話しかけようとしたが、それを上回る勢いでセシリアが話しかけてきた。

「ぜひ、クラスメイトであるわたくしと組みましょっ！！」

「……はあ……無理に決まってるでしょ、セシリア」

「り、鈴さんっ！？……な、何故ですかっ！？」

そんなセシリアに鈴が待ったをかけた。

「どう考えても、あたしたちのISはダメージレベルをCは超えてるわ。当分は休まないとダメよ」

「その通りです」

鈴の言葉と同時に保健室のドアが開いて、山田先生が入ってきた。

「お二人のISの状態をさっき確認しましたが、ダメージレベルがCを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は

許可できません」

「・・・だってさ」

「うぐ・・・不本意ですが・・・非常に、非常にっ！不本意です
がっ！トーナメント参加は辞退します・・・」

なら仕方ないよね。ISをぶっ壊すわけにはいかないしね。

「・・・IS基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三。『I
Sは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積することで、より進化した
状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼働も含ま
れ、ISのダメージがレベルCを超えた状態で起動させると、その
不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、
それらは逆に平常時での稼働に悪影響を及ぼすことがある』、か・
」

「うん、そうだよ。一夏」

どうにか頭の中に残っていた知識を引っ張りだした。

いやいや、なんとか覚えててよかったわ。

とりあえずかねてからの疑問を聞くことにした。

「・・・しかし、何故ボーデヴィツヒとバトルすることになったんだ？」

「っ！それは・・・」

「ま、まあ、なんと云いますか・・・わたくしは女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

セシリアは言いにくそうに言い、鈴は顔を歪めた。

「・・・鈴は？」

「・・・あたしは・・・」

「鈴さんは何やらおせっさんという方のことを言われたら怒ってましたわね」

「セシリアっ！！」

「……………どっいっしょ？」

俺は鈴を見る。ごまかしは許さないという意味の視線で。

「……………鈴、どっいっしょことだ？」

「……………あいつがおやっさんのことを貶したのよ」

「……………何と言った？」

「腰抜けだとか、無駄死にしたってね……………」

「……………何だっつて？」

それを聞いた瞬間、俺の目の前が真っ赤になった。

「……」

「……一夏、あたしが言うのも何だけど落ち着きなさい」

ごめん。それは無理そうだな。今、感情が制御できそうにないわ。

「……悪いが、それは無理そうだ。今すぐでもボーデヴィッヒを殺しに行きたいくらいだ……っ!!」

パシンッ!!!!!!

俺がそう言い捨てた瞬間、急に頬を叩かれた感覚がした。少し呆然とすると、俺の視界には鈴が目一杯に映っていた。鈴が俺を叩いたらしい。

「……一夏、それ本当に思ってたの？」

「・・・ああ」

「そう・・・なら今のあなたはあいつと同じよ。相手が憎い。だから痛めつける。なんの後悔もなくてね」

「・・・」

「・・・おやっさんのように罪を数えさせるためじゃなくてね」

「っ!?!?!」

俺は何かガツンと頭に響いた感じがした。

「・・・そうだよ・・・俺、今何て考えてた？ただ、殺したい・・・憎いとしか考えてなかった・・・」

「・・・目が覚めた？一夏」

「・・・ああ。すまなかつた、鈴」

「ホントよ。まったく・・・手がかかるパートナーなんだから」

本当にいつも鈴には迷惑をかけちゃうよね・・・俺、本当にダメだな。同じおやつさんを貶されても鈴はあいつに罪を数えさせようってたのに・・・

「・・・いつも迷惑をかけてしまうな、鈴には・・・」

「いいわよ別に。あたしが望んでパートナーになっただもん。いつくからでも迷惑かけなさいよ」

俺がそう呟くと、鈴は胸を張ってそう言うてくれた。

・・・俺にはもったいないくらいのパートナーだよ。本当に・・・

その後、俺とシャルルは保健室を後にし、夕食を食べ終えた。そして部屋に戻り一息ついていた。

「……ねえ、一夏。聞きたいことがあるんだけど……」

「ん？何だ？」

「……おやつさんってどんな人だったの？」

すると、急にシャルルが俺に質問してきた。……まあ、保健室でのやり取りを見たらそう思うよね……

「……おやつさん、鳴海壮吉は俺の探偵の師匠だったんだ。そしてあの人は男の中の男……ハードボイルドだった」

「ハードボイルド？」

「どんな事態にもどんな状況にも決して動じず、どんなピンチにも軽口をかましながらか切り抜けるかっこいい鉄の男。強くなければ生きていけない、優しくなければ生きる資格がないを地で行くのが、ハードボイルドだ。・・・俺はそれを貫くおやつさんに憧れ、弟子入りしたんだ」

「そうだったんだ・・・」

「ああ」

「・・・かつて、俺は誘拐を二度されたことがある。一回目は確か小学生の時、そして二回目は中学生の時。そしてあのボーデヴィツヒが俺を恨む原因となったのは二回目。その時は千冬姉さんが助けてくれた。」

そして一回目の時は・・・あのときはたまたま通りかかったおやつさんに助けてもらったんだ。その時に俺はおやつさんに憧れを抱いたんだ。俺はその場で弟子入りを志願した。最初は断られたけど、しつこく食い下がったら、向こうが渋々折れて弟子入りしたんだ。

「・・・シャルル。俺はボーデヴィツヒに罪を数えさせたい。だ

が、それには俺一人ではおそらく不可能に近いだろう……だからお前の力を貸してほしい……頼めるか？」

俺はシャルルの目をジッと見つめる。

「……力を貸すに決まってるよ。僕は一時的とはいえ一夏のパートナーなんだから」

「……ありがとう、シャルル」

「うんっ」

「……ボーデヴィツヒ。俺は絶対にお前の罪を数えさせてやる。そして、二度と同じ過ちを犯さないようにしてやる。」

その頃、ラウラは自室で一人になっていた。同室の子はどつやらないようだ。

「……織斑一夏……私はお前を絶対にこの手で……っ！」

そう呟くラウラの身体に光る球体が入り込んだ。その瞬間、ラウラの身体から大量の砂が飛び出た。

そして、その砂が集まり、ラウラの目の前に砂の色をした怪物が現れた。しかし、上半身と下半身が逆転している。

それを見たラウラは一瞬驚いたような表情をしたが、咄嗟にナイフを構えた。

「貴様……何者だっ！？何処から入ってきたっ！？」

『お前の望みを言え・・・』

「・・・何？」

しかし、次に怪物から発せられた言葉で構えを解いてしまった。

『もう一度言おう。お前の望みを言え・・・どんな望みも叶えてやろう・・・あるだろう？お前の中にある深い望みが・・・』

「・・・私の、望み？」

『そうだ・・・お前の望み・・・どんなものでも叶えてやる。代償はたった一つだ・・・どうだ？悪い話ではないだろう？』

「私は・・・」

正直にいつて怪しいこと極まりない。しかし、少しでもあの男を殺せる確率が上がるなら・・・ラウラはそう考えてしまった。

「私の望み……それはこの手で織斑一夏を殺すことだっ……！」

『分かった。その願い、叶えよう』

「う……っ!?!」

そう言うと怪物はラウラの体内に入っていった。その衝撃のせいだろうか？ラウラはそのまま気絶してしまった。

しばらくしてラウラは目を覚ました。そしてまわりを見渡す。

「……夢か……あんなくだらない夢を見るとはな……疲れていたのか？……まあいい。今日はもう寝るとするか」

そう言ってラウラは再び眠りについたのだった……

第20話 まもなくバサラの映画公開です・・・でも金が拙いかも・・・（後書き

勝てる試合だったのにまさか負けるとは・・・予想外です。

そしてメズル様きたああああっ！！そしてゴーカイジャーで少しだけどアバレキラーきたああああっ！！

第21話 伊達さんが・・・伊達さんが・・・（前書き）

遅くなってしまい、申し訳ございませんでした。まあ、案の定リアルが忙しく……。今日他校との合同練習で帰ってきたのが19時くらい……。うん、俺はそこまで動かなかつたけど疲れた・・・

駆け足で書いたので後半がグダってしまいました。

それでもよろしければどうぞっ！！

第21話 伊達さんが・・・伊達さんが・・・

そして、ついに年別トーナメントが開催日となった。その慌ただしさは凄いもので、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていた。

正直に言っ て非常に疲れた・・・

それから解放されて俺とシャルルは急いで更衣室に向かった。まあ、たった二人なのでロッカーの取り合いなどはなかったのでスムーズに着替えることができた。

そして俺は更衣室のモニターを眺める。

「にしても・・・予想はしていたがすごいな・・・」

映っているのは観客席で、そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが勢揃いしていた。

いやいや・・・すごいね。やっぱり注目度は半端ないってことか・・・

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

「成程な・・・そしてチェックの中には俺も入ってるということか・・・」

「うん、そうだろうね」

「まあ、そんなのには今はどうでもいいな」

そう、どうでもいいのだ。俺が考えるのはただ一つのみ。

・・・ボーデヴィツヒとの対戦だけだ。

「……………一夏、最近よくボーデヴィツヒさんのこと気にかけるよね」

とシャルルがどこか不機嫌そうに言う。

「……………ここであいつの目を覚まさしてやらないといけなただけだ。でないと、あいつはひたすら力ばかりを追い求めるだけになってしまっ」

「……………そうだね」

すると、更衣室のモニターに対戦表が出てきた。ちなみに俺たちはAブロックの一回戦第一組だ。

俺とシャルルは会話を打ち切りモニターに集中する。

そこに映っていたのは……………

「え……………?」

「・・・そうか」

ボーデヴィツヒ、そして算のペアだった。

「まさか、一回戦で当たるとはな・・・手間が省けた」

「俺も同意見だな。・・・これ以上お前の犠牲者が出ずに済んでよかった」

「ふん」

試合時間となり、俺たちはフィールドに姿を現した。そしてボーデ

ヴィット達と対峙する。

「……一つ、相手が俺を憎んでいるからといって相手の事を理解しようとしなかった」

「？何を言っている？」

俺は目を瞑りながら口を開く。

「二つ、そのせいで相手が孤独の涙を流しているのにまったく気付かなかった」

「一夏？」

「一夏どうしたの？」

尊とシャルルが心配そうに俺に声をかけてくるが、それを無視する。

「三つ、尊敬している人を侮辱されたからといって相手を憎しみで傷つけようとした」

そこまで言うと俺は目を開けて、ボーデヴィツヒを視界に入れる。

「・・・俺は自分の罪を数えた・・・次はお前の番だ、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

俺は身体を半身にする。

「・・・さあ・・・」

そして降ろしていた右腕を地面と平行になるように上げて、ボーデヴィツヒを指差す。

「お前の罪を・・・」

そして手を軽くひねって掌が上を向くようにする。

「・・・数える」

試合が始まり、まずは俺とボーデヴィツヒ、シャルルと尊の組み合わせで対峙した。

「私の罪だと・・・？そんなものあるものかつー!!」

その言葉と同時にボーデヴィツヒがプラズマ手刀を展開し、俺に突っ込んできた。

俺はそれを見て後退しながら両手にショットガンを取り出す。そして乱射する。ただし・・・

「何っ！？ビームだっ！？」

そう、ビームなのだ。俺は今まで実弾で撃ってきた。ビームに切り替え可能だというのはひた隠しにしてきた。理由はただ単に公開する機会がなかっただけ。

まあ、そんなビームの弾幕に驚き慌ててかわそうとするが、そこは弾幕なのである程度被弾してしまう。そして被弾したことでバランスを崩す。

俺はその隙に片方のショットガンをしまい、黒雷を取り出す。そし

て、ショットガンと連結する。するとそれは一つの大きな銃へと姿を変えた。

俺はその標準をボーデヴィツヒに向けた瞬間にぶっ放した。撃ち出されたのは強力なビーム。

「くうっ!？」

ボーデヴィツヒはその直撃をかるうじてかわすが衝撃で吹っ飛んでしまった。

・・・実はこのショットガンと拳銃二丁は連結できる仕組みになっている。黒雷を連結させると強力なビームに、黒嵐を連結させると、ビームマシンガンになる。ちなみにこれを知ったのはつい最近。これまたつい最近届いたカタログを読んで分かったのだ。・・・束姉さん送るの遅すぎだよ・・・

「・・・まさかそんな隠し玉を持っていたとはな・・・」

「・・・手札はある程度しか見せない主義だな」

「成程、なっ！！」

ボーデヴィツヒがワイヤーブレード（武器名これで合ってたよっ！わっ！っ！）を一斉射出して複雑な軌道を描きながら俺の方へと飛ばしてくる。

俺はそれをショットガンを二丁再び構え、瞬間加速を断続的に放ちながらビームをばら撒く。しかしある程度は撃ち落とせたが、一本が俺の足に絡みついてしまった。俺はそれによって動きを止めてしまった。

「ちいっ！」

「ふ、もらったっ！」

ボーデヴィツヒはすかさずAICを発動し、俺の動きを止めた。そして肩にある大型実弾砲・めんどくさいから今度からレールガンでいいや・・・を放とうとする。標準はもちろん俺。まあ、だけど・・・

「僕の事、忘れてもらっちゃ困るよっ!?!」

「何っ!?!」

すると、今まで箒と戦っていたはずのシャルルがボーデヴィツヒを強襲した。

そのおかげでAICが解除されたので、俺はワイヤーブレードを破壊し、拘束から振り切る。

「・・・シャルル。箒は?」

「あそこでお休み中」

シャルルが指差した方を見ると箒が悔しそうな顔をしながら地面に座り込んでいるのが見えた。・・・まあ、シャルルと箒は相性悪いしね。

「そうか・・・では、いくぞ」

「うんっ！僕たちのコンビネーションを見せつけようっ！！」

そして視点はピットに移行する。そこには真耶と千冬の姿があった。

「ふえ〜強いですね。織斑君・・・」

真耶が試合が映っているモニターも見ながら感嘆の声を上げる。

「・・・あいつとデュノアの相性はいい。二人とも似たようなタイプだからな」

「ああ、だからあんなに息の合ったコンビネーションが出来るんですね」

「そつだ。しかもこの前の時とは違い、即席ではないからな」

「成る程・・・」

千冬の冷静な解析に真耶はもう驚くしかなかった。

モニターには一夏とシャルルが二人同時にお互いが持っている銃を乱射しているのが映っている。ラウラはそれを避けるので精一杯のようだ。

「しかも織斑達はボーデヴィツヒの武装を全て理解している。だが、一方でボーデヴィツヒは織斑の隠していた手札に驚いて序盤から相手に吞まれてしまった」

「つまり・・・ボーデヴィツヒさんには勝ち目はないと・・・？」

「まあ、まず無いだろうな。ただでさえ織斑にあんなに押されていたんだ。そこにデュノアまで入ったら・・・目に見えているな」

俺たちの弾幕などによってボーデヴィツヒのエネルギーはごく僅かになっていた。

俺は一気に勝負を終わらせるべく、零落白夜を発動した。

「……これで終わりだ」

そう言って俺はボーデヴィツヒに突っ込んだ。

「ふ、最後に油断したなっ！その攻撃など私のAICの前では無意味っ……！」

そう言ってボーデヴィツヒはおそらくAICを発動させたのだろう。俺の動きが止まった。

「今度こそ・・・っ!」

ボーデヴィツヒはレールカノンをこちらに向ける。そしてそんなボーデヴィツヒは当然のごとく動きが止まっている。

「・・・言っただろう?これで終わりだと」

「何?・・・っ!」

すると、ボーデヴィツヒの後ろに一つの影が現れた。それはもちろん、シャルル。

「この距離なら外さないっ!」

ラファールの左腕部のシールドがパージされ、そこに覗くのは無骨な弾倉付の杭打ち機。シリンダー

第二世代武装最強の威力とされるそれは、六九口径パイルバンカー
《灰色の鱗殻》グレー・スケール。

別名、シールド・ピアース盾殺し。

そう、俺はただの囷。確実にボーデヴィツヒを落とすためのね……

シャルルはパイルバンカーを構え、引き金を引き、発射する。

ズガンッ！！！！

「ぐぐっ……っ！！」

ボーデヴィツヒは苦痛の表情を浮かべる。

パイルバンカーの弾丸はシュヴァルツエア・レーゲンの残り僅かのシールドエネルギーごとそりと奪う。

そのままシャルルは3発撃ち込んだ。よし、これで本当に……っ
！！

俺がそう思った時異変は起きた。

(こんな……こんな所で負けるのか……私は……っ！)

衝撃がが身体から装甲を引き剥がしていくのが分かる。

(私は負けられないっ！……負けられないんだ……っ！)

自分が憧れた教官の汚点を消すために。

(この手で叩き潰すと決めたんだ……っ！)

だから、動かなくなるわけにはいかない。あの男はまだ動いている。

(力を・・・寄せ・・・)

その時、彼女の胸の中で何かざわめいた。

『・・・願うか？・・・汝、自らの変革を望むか？より強い力を欲するか？』

答えるまでもなかった。一夏を潰すためならば何が代償でも構わない。命だろうが、心だろうが、魂だろうが。何から何までくれてやる。だから・・・。

(比類なき最強を私に寄せっ！！！)

急にボーデヴィツヒから大きな悲鳴が上がった。

そしてシュヴァルツエア・レーゲンの装甲が激しい電流を放ちながら変形していた。装甲はスライム状にボーデヴィツヒを包み、その身体を飲み込んでいく。

「シャルルっ！離れろっ！！」

「う、うんっ！！」

俺はボーデヴィツヒの近くにいたシャルルに離れるように指示し、シャルルは俺の横に戻ってきた。

「ねえ、一夏。あれは一体・・・」

「・・・さあな・・・俺にも分からない」

装甲だったものは完全にボーデヴィツヒを飲み込み、ある姿を形成していった。最小限の黒い装甲を纏った四肢。目の部分を赤く不気

味に輝かせているフルフェイスのアーマー。そして何よりも俺の視線を引いたのは、その手に握られた武器である。見間違うはずもない。それは、彼尊敬している内の一人が使っていた武器なのだから。

「・・・雪片・・・だと・・・？」

どういうこと？まったくもって理解が出来ない。俺が考え込んでみると黒いISが俺目がけて突っ込んできた。

俺はそれをかわし、距離を取る。

「・・・一体何が起こったのか理解はできない。だが・・・分かっているのは一つ」

俺も同じく雪片・・・まあ、こっちは弐型だけど・・・を構える。

「お前の目を覚ましてやらなければいけないということだ」

俺はシャルルに箒を連れて退避するように指示を出した。シャルルは大人しく聞いてくれて退避してくれた。

．．．．あれがボーデヴィツヒにどう負担をかけるか分からない。なら一撃で、ボーデヴィツヒを傷つけずに勝つ方法．．．あれはおそらくISが変化したもの。なら零落白夜で装甲だけ切り裂けば．．．

俺は考えが纏まった所で零落白夜を発動する。ただし、極力薄く、鋭く。

「．．．」

黒いISが再び雪片を構え突っ込んでくる。そして雪片を振りぬいてきた。俺はそれを半身になってかわし、カウンター気味に零落白夜を相手に切りつけた。

「はあっ！！」

一刀両断はしなかった。あくまで装甲のみを切る。すると、中からボーデヴィツヒが気を失った状態で崩れ落ちてきた。

俺はそれを受け止める。

「・・・やれやれ。一件落着、か？」

俺がふう・・・と息を吐いて黒菊を解いたとき、ボーデヴィツヒの身体から大量の砂が零れ落ちてきた。

・・・砂？・・・っ！？まさかっ！？

すると、その砂は集まって一つの形、ウサギの怪物、イメージとなった。

イメージ・・・黒いからブラックラビットイメージ・・・は実体化すると、すぐさま俺の懐に入り、ボーデヴィツヒを奪ったかと思うと俺を思いつき蹴り飛ばした。

「が、は・・・」

俺はそのまま吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。そして俺はその
まま気絶してしまったのだ。た……た……

第21話 伊達さんが・・・伊達さんが・・・(後書き)

おおっ・・・やっぱり戦闘シーンは難しいですね・・・

次は早めに書けたらいいなあ・・・

第22話 自分の体力の無さに絶望した……そして伊達さあくん(笑)

どうもです。昨日合同練習で練習中にダウンしてしまいました。理由は熱中症の一步前でメットヒット・まあつまり、思いっきり当たったことをしたせいです。……ぶつちやけかなりシヨックでした。部の中じゃ自分が一番ダメダメなのでせめて思いっきりやろうとした結果がこれでした。……うん、結構へこんでます。

今回も変身はお預けです。思ってたよりも長くなってしまったので……ではどうぞ。……口調があってるか心配です。

第22話 自分の体力の無さに絶望した……そして伊達さあくん(笑)

「やばいっ……！」

観客席でセシリアと共に試合を見ていた鈴は席を飛び出した。

セシリアが何か喚くが無視して走り出す。生徒たちが大量に出口へと向かう中、鈴は逆方向へと走っている。向かう先は、フィールド内。出入り口は解放されたままである。何故かというトラウラに異変が起こった際に閉めようとしたのだが、一夏が文字道理瞬殺してしまったため閉める途中で中断してしまっていたのだ。

492

「なんでイメージが……っ！しかも契約者があいつなんて……っ……！」

鈴は懐からブランクチケットを取り出す。数年前にもらっていたものをそのまま持っていたのだ。

「一夏は大丈夫・・・あんなので死ぬような人間じゃないもの・・・
っ!」

鈴は一夏が蹴り飛ばされたときに観客席を飛び出した。一夏があの程度で死なないと信じているからである。信じているから次の手を打つのだった。

「ふう・・・やれやれ。長かったぜ・・・」

クロウサギをモチーフにしたブラックラビットイマジンは首を回しながら愚痴をこぼす。

「あの男死んだか?・・・まあ、死んでないにしろ気絶はしてるだろ。これを契約者に見せれば死んだように見えるからいいか」

そう言った後、イマジンは手元にあるラウラの頬を叩く。

「ほら、起きる」

「ん・んう・んう・んう・んう！？お前は夢に出てきたっ！！」

「生憎とあれは夢じゃない」

どうやら叩かれた痛みでラウラが目を覚ましたようだ。そして目の前にいるイマジンに驚愕を示す。そんなラウラの反応を半ばスルーしながらイマジンはラウラの顔を掴み、無理矢理とある方向に向ける。

「ほれ」

「うっ……っ……っ！？」

そしてラウラは嫌々ながらその方向を見る。するとそこには一夏が

力無く伏せている光景があった。

「あれがお前が望んでいた光景だろうか？」

「……」

イマジンが問いかけるが、ラウラは呆然としているのか何も答えなかった。

「……ふん、まあいい。……契約完了だ」

そう言うとイマジンはラウラを降ろし、ラウラの身体を開いた。そしてその中にイマジンは吸い込まれた。過去へと跳んだのだ。

それと同時に鈴がフィールドへと到着した。

「くっ！もう飛んじやったかっ！」

鈴は手にしたblankチケットをラウラにかざす。すると、そこには先ほどのイマジンの姿と数年前の日付が現れた。

それを確認した鈴はチケットをラウラに見せる。

「この日付に覚えは？」

「・・・その日は・・・」

「私とボーデヴィツヒが初めてあった日だ」

鈴の問いかけに答えたのはラウラではなくいつの間にか来ていた千冬だった。

「千冬さん・・・いつの間に・・・」

「ついさっきだ。・・・で、さっきの怪人は例の・・・イマジンとかいうやつか？」

「そうです。契約者の一番強く残っている記憶に飛び、身体と時間
を乗っ取る。・・・でも、こいつを見る限りだと、そうではない
ようです。もしそうだったら消えてる筈ですから」

「では何故過去に飛んだんだ？」

「・・・分かりません・・・前みたいに何かのグループが出来たのか
も・・・」

鈴はラウラの面倒を千冬に任せ、一夏の所へ向かった。

「一夏っ！大丈夫っ!？」

「・・・っつ・・・鈴、か・・・」

「そうよ・・・まったく、すぐに気を抜くのは一夏の悪い癖よ」

「・・・すまない・・・イメージは？」

「夏はなんとか立ち上がりながら鈴に問いかける。

「跳んだわ。だけど、あいつは消えてないから多分……」

「過去で破壊活動……か」

「でしょうね」

「……俺は準備をしてくる。その間に……」

「デンライナーを呼んどく……でしょ？」

「ああ。頼んだ」

そう言って一夏は更衣室へと走っていった。

俺は更衣室へと足を踏み入れた。するとそこには箒とシャルルがいた。

「一夏っ！大丈夫っ!？」

「一夏っ！無事かつ!？」

「問題ない。俺は急いで着替える。だから箒、更衣室から出てくれないか？」

「あ、ああ……」

箒が出て行ってくれたのを確認した後、俺は急いで着替え始める。

「どっしたの一夏っ？」

「緊急事態が発生した。俺と鈴はこれからそこに向かう」

「なら僕も一緒に・・・っ！」

「ダメだ」

俺はシャルルの申し出をバツサリ切る。

「俺と鈴はいわばこういった件の専門家だ。はっきり言って素人のお前が来ても役に立つどころか、逆に邪魔なだけだ」

「・・・一、夏・・・」

ダメだ・・・焦ってるからか・・・かなりきついこと言っちゃう。

呆然としているシャルルをスルーして俺は着替えを終える。そして懐にアルモノがちゃんとおるか確認する。ついでに軽く触診を試みたけど、どうやらアバラが数本逝ってるっぽい。

「ゴホゴホッ!」

俺が思わず軽く咳をすると、少し血が口から出てきた。・・・内臓も少しやられてるか・・・ちよつとまずいかな？

「一夏っ!血が・・・っ!」

「このくらい何ともない」

「そんなわけないよっ!血を吐いたんだよっ!」

「いいからどけ」

「ならちゃんと説明してっ!」から全部っ!」

「・・・だからそんな暇ないから急いでんじゅんさ・・・ああ、もういい。」

おれは目の前で通せんぼしているシャルルの腕を掴む。

「い、一夏っ!?!」

「そこまで時間をかけていられる余裕は無い。なら直接連れて行つてやる」

「じゃあ・・・っ!?!」

「ただし、一切俺の言うことには逆らうな・・・いいな?」

「う、うん・・・」

俺はそのまま更衣室を出る。するとそこには箒とセシリアがいた。

「・・・話は聞こえたか?」

「「・・・ああ(ええ)」」

「来るなら来い。ただし俺の言うことには絶対に従え」

そう言うと二人は無言でついてきた。

俺は3人を連れて再びフィールドに戻った。そこには鈴と何故かまだ千冬姉さんとボーデヴィツヒがいた。ボーデヴィツヒはどつやら目を覚ましたみたいだ。

「……鈴」

「あははは……ごめん、止められなかった。ていうか、一夏あんたも……」

「ああ……まったく何でもこう強引な奴が多いんだか……」

はぁ……と俺がため息をつくとき、鈴は乾いた笑いをした。鈴にも似たようなことがあったからだ。

すると、ボーデヴィツヒが俺に近づいてきた。

「・・・織斑一夏・・・あの・・・」

「話は後だ。・・・そろそろ来るぞ」

俺がそう言いながら上空を見ると皆も釣られて上空を見る。すると、突然空間に穴が開き、そこから電車が現れた。これこそ、時の列車、デンライナーである。

そしてデンライナーはそのままこちらに向かってきてちょうどドアが俺たちの目の前に来るように停車した。

「で、電車・・・？」

そんな疑問の聲が聞こえたが、俺は無視をしてドアに近づく。すると、ドアが開き、中に入れるようになった。なので俺はそのまま進み、中に入っていった。鈴もそれに続き、他の連中もおっかなびっくり続いてきた。

そしてそのまま食堂車に直行した。中に入るとそこには赤い鬼っぼ

い人と青い亀っぽい人、金色の熊っぽい人、そして紫の龍っぽい人が何故か唸って固まっていた。そしてその周りに女の子と女性がいるた。

「だから桃の字、どっちなんや？」

「だからわかんねえんだってっ！匂いがした様な気がした瞬間、消えちまったんだって言ってんだろっ！！」

・・・まさかその話・・・

「はつきりしてよ先輩。先輩しかイメージの気配が分かんないんだからさっ」

「そっだよっモモタロスのバカっ！！」

「うるせえっ！！わかんねえもんはわかんねえんだよっ！！」

龍っぽい人が鬼っぽい人をおちよくと、鬼っぽい人が怒った。

「でも、もし本当にいたとしても消えてしまったということとは、既に過去に跳んでるってことよね・・・拙いわね・・・」

「そうですね。過去に跳ばれちゃったらモモタロスちゃんでも分かるかどうか・・・困りましたね」

そしてその横で女の子と女性が深刻そうに話す。

「それなら問題はない。俺と鈴が既にチケットを手に入れた」

俺は食堂車に入りながらそう告げる。

すると、一斉に皆こっちに振り向いた。

「「「「「あああああっつ！！！！」「」「」「」

「ちょっと久しぶりだな。モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、ハナさん、ナオミさん」

俺は軽く微笑みながらそう告げた。そして俺の背中に隠れていた鈴を背中を押して前に出す。

「あ、あはははは……お久しぶりです……」

「「「「「ああああああっ!!!!」「」「」「」

二度目の絶叫。

そして早く硬直から抜け出したのは、竜っばい人、リュウタロスだった。

「ワァーイっ!!—夏と鈴だっっ!!—ひっさしぶりっ!!—!!」

そう言いながら俺たちに抱き着いてきた。

「ああ。．．．とりあえずリュウタロス離してくれ。挨拶はまた後に」

「え〜っ。．．．うう〜分かったあ〜」

俺が宥めると、リュウタロスは渋々とだが離してくれた。

俺は改めて一歩前に出た。

「一夏っ！！お前なかなか会いに来ねえじゃねえかつ！たつくよ〜ちよっとは顔を見せに来いよっ！！」

そう言いながら今度はモモタロスが俺の首に腕を回してきた。

「ホント、ホント。なんかあったんじゃないかって心配したんだからね？」

「二人の言う通りや。何でまったく顔を見せに来んかったや？」

「・・・なかなか急がしくてな」

今度は亀っぽい人、ウラタロスと、熊っぽい人キンタロスが話しかけてきた。俺はそれをモモタロスの腕を外しながら返事を返した。

「ちよつとっ！あんたたち離れなさいっ！さっき一夏が言ってたことを思い出しなさいよっ！！！」

「そうですよ。再会を喜ぶのもいいですけど、今はそれどころじゃないんですから」

そう言って女の子、ハナさんと女性、ナオミさんが諫めてくれた。
・ハナさんは殴っただけど・

そして俺と向き合った。

「一夏、久しぶり。だけど再会を祝ってる時間は無いのよね・・・で、さっきの話本当？」

「ああ。俺は気絶させられたが鈴がちゃんとやってくれた」

「そっか・・・なら助かったわ・・・じゃあ・・・」

「俺が行く」

そうやって俺は鈴からチケットを受け取る。そして、ライダーパスを取出し、運転席へと向かう。

「・・・ああ、そうだ。オーナーに言っておいてくれ。そこにいる奴らは俺とパス共有だとな」

「・・・分かった」

一夏が食堂車を去った後、モモタロスたちと鈴は円になって固まった。

「おいおい・・・なんか一夏のやつ不機嫌じゃなかったか？」

「先輩もそう思った？やっぱりそうだよね」

「ううなんか怖かったよ」

「鈴、なんかあつたんか？」

「まあ、あつたと言えばあつたわね」

そう言って鈴はラウラのほうを見た。それにつられてモモタロスたちも一斉に見る。そんな視線を受けたラウラは委縮してしまった。

「そういえば聞いてなかったけど、一体どんな契約をしたの？」

「そ、それは……」

「あ、はいはい。あなたの態度で大体分かったわ。一夏を殺したいとかそんなこと言ったんでしょ」

「っ!？」

心を見透かされたように言われてラウラは固まってしまった。

「なんだとっ!?!おい、眼帯野郎っ!そいつはどっいついことだよっ!？」

「お前っ……絶対に許さない……っ!!」

すると、モモタロスとリュウタロスはいきり立ち始めた。

すると、そんな二人の前に千冬が割って入った。

「待ってくれ」

「どいてよっ！誰だか知らないけど僕の邪魔をするのは許さないよっ！！」

「私は一夏の姉だ。・・頼む、話を聞いてくれないか？」

「・・一夏のお姉ちゃんっ!?!」

さすがに驚いたのかモモタロスとリュウタロスは動きを止めた。

「・・・鈴・・とりあえず、説明してくれないか？さすがに私も理解が追い付かない」

「分かりました」

そうして鈴の仲介の元、モモタロスたちと千冬たちの会合が始まっ

た。

鈴たちが話しているとき、俺は運転席にいた。そこにはバイクが中央に置かれているだけだった。しかし、このバイクこそデンライナーを動かすキーなのだ。

俺はそのバイク、デンバートに先ほどのパスをスロットインする。パスの中にはチケットが入っており、入っている状態でデンバートに入れると、そのチケットに表示された時間へと向かうのだ。ちなみにバイクを運転しなければならなかったため、無免許だが、俺が運転するしかない。

「……ボーデヴィツヒ……」

俺は先ほどのボーデヴィツヒを思い出す。が、無性に苛立たしくなってきた。

「・・・俺を殺したいと思うのは構わない。殺しに来るのも構わない。だが・・・」

俺はデンバートのハンドルを思いっきり握る。

「自分の思いなら自分の力で成そうとしなくてどうする・・・っ
!」

俺はデンライナーの速度を上げて、時間の中を走って行った。

第22話 自分の体力の無さに絶望した……そして伊達さあくん(笑)

バサラとゴーカイジャー見てきました。気分切り替えがてらに。バサラは最高でしたね。ゲームをやっていないので、やりたくなくなってきました。ゴーカイジャーは……まあ、いつものごとくテンポ早いっすね……

第23話 本日、ヒーロータイム無し・・・ショック・・・（前書き）

どうもです。DVDを借りようと思って、いつもの店に行つてなかったので、別の店に行ったら、料金が倍以上したことにショックを受けた作者です。

ん〜今回は上手く出来たか微妙ですね〜。それでもよかったですらどうぞ。

第23話 本日、ヒーロータイム無し・・・シヨック・・・

そして、時間の中を駆け抜けて数分後、俺たちが乗るデンライナーは目的の時間へとたどり着いた。俺はそのままデンライナーを現実空間へと走らせた。

現実空間に出ると、運転席でデンバートに乗っている俺の目にある光景が跳び込んできた。

その光景とは、本来綺麗な噴水広場だったのだろう場所が無残にも破壊されているものだった。そしてその中央には折り重なって倒れている千冬姉さんとボーデヴィツヒがおり、更にその近くでブラックラビットイマジンが光線を繰り出して破壊活動を続けていた。

俺はデンライナーを今まさに放たれた光線の射線上に割り込ませた。デンライナーの装甲はとても頑丈でこの程度の攻撃ではビクともしない。

俺はそのままデンライナーを停車させて、食堂車に戻る。

「……行ってくる。手助けは不要だ」

「……いいんだな？」

「ああ」

モモタロスが俺を心配して確認の声をかけてくるが、それを拒否した。そしてそのまま俺は出口へと向かう。

すると、鈴が俺の前に顔を俯かせながら、まるで通せんぼするかのように入った。

「……どうした？」

「……怪我、どのくらいなの？」

「……やっぱり鈴に隠すことは出来ない、か……」

俺は観念して素直に話すことにした。怪我の具合を手で軽く胸に触れながら説明する。

「・・・肋骨が数本折れてる。内臓にもきてるみたいだ」

「・・・・・・・・そう。・・・なら、いつてらっしゃい」

「「「「なっ!?!」「」「」

「ああ・・・約束通りちゃんと無事に帰ってくる。・・・待っていてくれ」

俺は鈴にだけ聞こえる声で返事を返す。すると、鈴は俯いていた顔を上げて笑顔を見せてくれた。俺はそれに軽く微笑んで返した。

・・・大体の戦いの前では鈴の笑顔を見てから行くのが習慣みたいになっっている。この笑顔を曇らせたくない・・・だから精一杯生きて帰ってくる前に約束したのだ。鈴はもう守ってくれたと言ったが、俺的にはまだ継続中だ。

俺が返事をする前に鈴の言葉に何やら周りが驚いたようだが、俺はそれをスルーしてデンライナーを後にした。

「鈴っ！何故行かせたっ！？一夏の怪我の具合を聞いただろっつ！
」？」

「そうですねっ！あのような状態で戦ったら一夏さんの怪我はもっと酷くなってしまいますわっ！！！」

箒とセシリアが鈴を責め立てるが、鈴は目を瞑って無言を貫き通す。

そんな鈴に箒たちは怒りを感じたのか、更に強く責め立てようとする

る。何も言ってこないシャルルやラウラも厳しい視線で鈴を見る。千冬は鈴と同じく沈黙を保っている。

「ああ、もうギャーギャー煩えんだよっ！！」

するとそれを見ていたモモタロスが席から立ち上がり怒鳴り始めた。思いもよらなかったのか、箒とセシリアの行動が止まった。そして鈴の近くまで行き、鈴の肩に手を置いた。

「こいつが一夏のことを心配しないわけねえだろうがっ！！」

「じゃ、じゃあ、何故一夏を行かせたっ！？怪我していると分かっていたのに何故っ！？」

「んなもん、決まってるだろうがっ！！」

異議の声をあげる箒にモモタロスは声高らかに断言した。

「一夏がちゃんと無事に帰ってくるっていう約束を果たすのを信じてるからに決まってるだろうがっ!！」

「「「「っ!?!」「」「」

モモタロスが断言した内容に箒たちは驚きを隠せなかった。

「はあく……先輩、その子達その約束を知らないんだから言っても分かんないでしょ?」

「うっ……け、けどよ……こいつら、まるで鈴がまったく心配してねえみたいに言うからよ……」

そんなモモタロスにウラタロスがため息をつきながら駄目出しをしてモモタロス達に近づく。そんなウラタロスにモモタロスは弱弱しくも反論する。

「ま、この子たちは鈴ほど一夏を信用してないってことでしょ」

「「「「「なっ!?!」「」「」

「だってそつでしょ?一夏が帰ってこないって思ってなきや、そんな言葉は出てこないでしょ」

「「「「「.....」「」「」

どうやらウラタロスの言葉は凶星だったらしい。箒たちはだんまりになってしまった。

箒たちのそんな様子を見てウラタロスは先ほどよりも深いため息をつく。そしてさきほどから何も言わない千冬の方を見る。

「.....で、あなたは何も言わないんですか?千冬さん?」

「.....私が何を言ったところであいつは止まらんさ」

ウラタロスの質問にポツポツと千冬は話し始めた。

「・・・いつもそうだ。あいつが言うおやっさん・・・鳴海壮吉に弟子入りする時も私は大反対した。だが、あいつはいくら言っても聞かなかった。拳句、私には黙っていつの間にか弟子入りをしていった」

静かに語り始めた千冬に篁たちもモモタロス達も耳を傾けた。傾けるしかなかった。

「・・・あいつが仮面ライダーになったと知って、私は力づくでも止めようとした。だが、あいつは一步も引こうとしなかった。・・・結局、私は根負けしてしまった」

まあ、あいつのそんな目を見て私は惚れてしまったわけだが・・・と千冬は心の中で先ほどの言葉に補足を付けくわえた。誰もそれに気付かなかったが・・・

「で、今までの事を踏まえて私はこう思ったわけだ。一夏がやることには極力見守るだけにしようとな・・・私が何を言っても聞かないのならな・・・」

「……そうですね・・じゃあ、大人しく『皆』で見てるつもりですか」

千冬は自虐するように笑う。しかし、ウラタロスはそんな千冬にはあまり触れずに一夏の様子を見ようと皆に提案した。

千冬の言った言葉に皆どこか思うところがあったのだろう・・・皆無言で外を見始めた。

外を見てみるとそこにはブラックラビットイマジンと対峙している一夏の姿があった。

「ここまで追ってくるとはな．．．貴様、電王の関係者か．．」

「．．．．」

相對しているイマジンが何か言うが、俺の耳には一切何も入ってこなかった。俺はひたすらある一点のみを見続けていた。そこにあったのは千冬姉さんとボーデヴィツヒが折り重なって倒れているものだ。

俺はようやくイマジンの方に向き直った。聞きたいことがあったのだ。

「．．．．お前は何故過去に飛んでボーデヴィツヒに乗っ取らなかった？」

「おいおい．．いきなり質問か？まあいいぜ．．冥土の土産に教えてやる．．と言いたところだが、残念ながら、それは言えないな」

俺が不意打ち気味に質問をすると、イマジンは快く質問に答えてくれた。が、答えは分からずじまいだった．．．

「・・・お前、その二人をどうした？」

「ん？・・・ああ、この二人か。一番最後に殺そうと思ってな、気絶させただけさ・・・どちらか先に起きた方のやつの目の前でもう一人を殺すのさ・・・最高だろ？」

イマジンはさも愉快そうに笑いながら両手を広げる。

「・・・そうか」

「さあて・・・もういいか？そろそろお前を殺したいんだがよ・・・」

そう言つとイマジンはどこからともなく剣を取り出して構えた。

「安心しな。痛みなく殺してやるからよ」

そう言いながらイマジンは一歩一歩俺に近づいてきた。

「……俺はお前を許せない」

「ああ？」

俺は顔を伏せながら呟く。イメージンは急に呟きだした俺を不審に思い足を止めた。

「お前が跳んできた記憶はボーデヴィツヒの宝だ」

俺は思いっきり拳を握る。血が滲んできたがまったく気にしない。同じく唇を思いっきり噛み締める。

「……それを利用し、あまつさえ人を傷つけるお前は……絶対に許さんっ！！！！」

俺は顔を上げて俺の怒りを全てぶつけるかのようにイメージンに言い

放った。

「おもしれえ……許せないってならどうする気だ？電王でもないお前なんか俺をどうこう出来るとは思えねえがなあ……」

「……確かに俺は電王ではない。だが……」

俺は左手を伸ばし、懐から『アルモノ』を取り出す。それ・ロス トドライバーは赤いL字型をしていた。俺はロスドライバーを腰に当てる。すると、ドライバーの両側から黒いベルトが生まれて、俺の腰に巻かれる。

「……誰かが流してしまった涙を拭くために……悲しい出来事を終わらせるために戦う……仮面ライダーだっ！！！」

そして黒いUSBメモリを取り出す。そして下の方にあるスタートアップスイッチを押す。

S K U I I

「・・・だから俺はボーデヴィツヒを悲しませたお前を・・・倒す」

「まさか・・・お前・・・っ!」

「・・・変身」

俺はそのままメモリをドライバーに差し込む。そして右手でドライバーを右に倒した。

L字型だったのがSを横にしたような形になる。そして再び電子音が流れる。

S k u i l

すると、俺の足元から黒い風が渦巻きながら俺の身体を包んでいく。そして同じように足元から俺の姿が変わっていった。

黒い・・・どこか金属っぽいスーツに肋骨を思わせる銀色の装飾。そ

してどこか骸骨のように見える銀色の仮面を纏う。その首元には白いマフラーが靡いている。更にどこからか取り出した白い帽子を被った。

「お前・・・スカルだったのかっ!!」

「そっだ・・・俺の名前は仮面ライダースカル」

俺は右手を驚いて慌てているイメージに向けて言い放つ。

「さあ・・・お前の罪を数えろ」

「な、なんだあの姿はっ!？」

「骸骨・・・なのですか・・・？」

「なんだか・・・怖い・・・」

箒はスカルの姿に驚愕し、セシリアは疑問を、シャルルは恐怖を露わにした。千冬はというと、目を伏せて再び沈黙していた。そしてラウラはというと・・・

「・・・ヒック・・・ヒック・・・ふええ・・・」

ひたすらに泣き続けていた。嬉しかったのだ。一夏が言った言葉が・・・自分のために戦ってくれる一夏が・・・あんなことをしたにもかかわらず、自分の事を考えていることが・・・

鈴はそんなラウラの背中をひたすら撫でていた。

「・・・ほら、泣きながらでもいいからちゃんと見なさい。あなた

のために戦っている一夏を・・・」

「ああ・・・ああ・・・っ!!」

「・・・それと・・・デユノア、あんた・・・もう一回そんなこと言ってみなさい。あたしは絶対に許さないから」

鈴はシャルルに鋭い視線を向ける。許せなかったのだ。一夏の・・・スカルに恐怖したのを・・・

「あ・・・ご、ごめん・・・」

「・・・フン」

シャルルは慌てて謝るが、鈴は鼻を鳴らして外に顔を向ける。向けながらウラタロスに話しかける。

「・・・どう思うっ？あのイマジン」

「ん〜・・簡単に考えるならどこかの組織に入っている奴ってこと
だけど、オーナーからはそんな情報は聞いてないんだよね〜」

「そうなんだ・・そういえばオーナーどこにいるの？一回も見てな
いんだけど・・」

「さあ・・・？」

二人して首を傾げる。オーナーの行動は比較的付き合い合いの長い二人
でも予測不可能なのだ。

「まあ、いつか・・・となると、あのイマジンははぐれ・・・なのか
な？」

「こればかりは本人にでも聞かないと分かんないんだけど・・・」

「その本人には断られちゃった、と・・・」

「そういふこと」

今度は二人して顔を険しくする。まあ、ウラタロスとはパッと見、変化が分からないが・・・

「どうにかして調べただけど・・・」

「一夏頼みか・・・」

二人は改めて外を見る。一夏の戦闘を見るため。そして状況の変化を見落とさないために・・・

第23話 本日、ヒーロータイム無し・・・シヨック・・・（後書き）

最近新作の案が出て来て止まんないです。まあ、書くとしてもこの小説がある程度進んでからですが・・・

出て来てるのは

・遊戯王GX デッキはバクラのデッキに近い感じかな？

・なのは 主人公はアバレキラーに変身させようかと・・・もしくは一人ゴーカイジャー

まあ、こんなところですかね？

第24話 デュエルがしくて仕方がない……(前書き)

大変遅くなってしまい申し訳ございませんでした。レポートが……
・部活の疲れが……

ISのDVD3巻を購入。なかなかですね。

第24話 デュエルがしたくて仕方がない……

「くっ……まさかお前がスカルだったとはな……」

「……」

俺は無言でスカルの専用武器・スカルマグナムを取り出しながら、
イメージに近づいていく。

「まあ、いい。ここでお前を倒せば俺の箱が付くってもんだっ……」

「……どうやら、どこかの組織に入ってるみたいだね。じゃない
と、そんなこと言わないだろうし。」

イメージは意気揚々と剣を構えた。俺も同じようにスカルマグナム
を構える。

すると、イマジンは俺に斬りかかろうとせず、剣を高々と頭上に掲げた。……何をする気？

「来いっ！モールイマジン共っ！！」

「っ！？」

おいおい……マジですか……

イマジンが声を上げると、イマジンの周りから大量の砂が突如現れ、次々に形を成していった。

その姿は以前に大量発生したことがあるモールイマジンだった。数はザッと10数体。

この前の時と比べれば少ない方だが、現在怪我をしている俺にとっては非常に拙い状況である。

「へへへ……さてと……行けっ！」

『オオオオオオオツ!!!!!!!!!!』

ブラックラビットイマジンの号令と共にモールイマジン達が一斉に俺に襲いかかってきた。・・・戦法を口々に考えないバカか・・・

俺はまず最初に突っ込んできた奴にカウンター気味にハイキックを入れる。

「ゴフッ!?!」

そのまま倒れた奴の頭にスカルマグナムの銃口を当てる。

「・・・まずは一匹」

俺はまったく躊躇わずに引き金を引く。放たれたエネルギー弾はもちろんのごとく相手の頭を貫通し、断末魔の叫びを上げることも出せずに爆発した。そしてその爆発によって俺の身体は爆煙に包まれ

た。

が、俺はその爆煙の中から無傷で姿を現した。・・・あの程度の爆発なら無傷に決まってる。

俺は姿を現して辺りを見渡すと、モールイマジン達が先ほどの俺の行為を恐れてか怯んで動けずにいた。・・・作戦成功。

実は俺が先ほどまでにある程度残酷に殺したのは相手を怯ませて隙を作るためである。そして思い通りにモールイマジン達は怯んでいる。

俺はその隙にベルトのスカルメモリを抜き、スカルマグナムの銃口・バレルスロットを下げる。すると、そこにはメモリを入れるスロット・マキシマムスロットが現れた。俺はそこに先ほどのスカルメモリを挿入し、バレルスロットを元に戻す。

S K U I L L ・ ・ M A X I M U M D R I V E ! !

電子音が響き渡り、銃口にエネルギーが目に見えて集まってゆく。そんな様子を見てモールイマジン達は慌てて避けようとするが・・・遅いっ!!

「・・・スカルパニツシャ」

俺は三回引き金を引いた。しかも同じ方向ではなく、バラバラの方向・・・というかモールイマジン達が逃げ出しそうな方向に。

無論、モールイマジン達は避けきれぬ訳もなく全弾命中し、爆発。

俺はその間にスカルマグナムの中にあるメモリを抜き、ベルトに再び差し込んで次に備える。・・・煙がある程度晴れてくると、僅かに影が見えてきたので、数える。・・・どうやら数体生き残ったみたいだ。

俺が一番近い影にゆっくりと近づきながら、スカルマグナムでそれよりも遠くにいる相手の頭部目掛けて数発ずつ撃ち込む。

向こうからはこちらはほとんど見えないうに等しい。つまり・・・

「「「ギヤアアアアアアアツ!!?」「」」

避けきれずに全弾命中するっと。弾丸が命中した奴らは一人残らず爆発した。そして・・・最後の一匹。

「ヒ、ヒイイイイイツ!!!!?」

最後の一匹は後ずさりしながら逃げようとしている。俺は問答無用で近づき、上空へと蹴りあげた。

そして落下してくるモールイマジンにひたすらスカルマグナムの引き金を引いて撃ち込みまくる。

「ギヤアアアアアアアツ!!!!!!!!!!」

予想通りイマジンは攻撃に耐えきれずに爆発した。・・・殲滅、終了。

俺はただ呆然と見ていたブラックラビットイマジンにすかさず銃弾を撃ち込む。

「はっ!?・・・クッ!」

ちえっ・・・避けられちった。とっとと終わらせかけたのに・・・

ブラックラビットイマジンは間一髪というところで弾丸を避けてしまった。

「くそが・・・っ!あの人数が簡単にやられるとはな・・・っ!
!」

「・・・人数が多ければいいというものではない」

俺は再び引き金を引きまくったが、イマジンは簡単に避けてしまった。

・・・ウサギだけにすばしっこいな・・・

「へへへ・・・でも俺の速さには着いてこれないみたいだなっ!!」

イマジンは瞬時に俺に近づき蹴りを繰り出してきた。

「チッ！」

俺はそれを何とか間一髪のところまでガードするが、勢いを殺し切れずに吹き飛ばされてしまった。

・・・こいつ単体でもかなり強いわけか・・・

イマジンは吹き飛んだ俺に再びすごい速さで近づいてきた。そして続け様に剣を振り下ろしてくる。

「クッ！」

俺はそれを体を転がすことで何とか避け切った。

「チツ・・・しぶとい奴だ」

・・・あいつは油断してるな。・・・なら・・・あの手が使えるか・・・

俺はイマジンの足元に弾丸を数発撃ちこんだ。そうすることで煙幕を張ることが出来た。・・・ただし向こうからこちらが少し見えるぐらいの薄さで。

「チイツ!?!・・・小癪なっ!?!」

・・・小癪な、なんていう奴初めて聞いたよ・・・

俺はスカルマグナムのバレルスロットを下げる。そしてベルトから再びメモリを取り出す。

S K U I L I ・ ・ M A X I M U M D R I V E ! !

「っ!?!?させるかっ!?!」

その音声を聞き、イマジンが煙幕を突き破って俺の前に現れた。そして俺の手にあるスカルマグナムを思いっきり弾き飛ばした。

「へへへへ・・・これでお前の武装もメモリも無くなったな・・・終わりにしてやるっ!?!」

あ、さっきよりも『へ』が一個多い。

イマジンは武器がなくなったのを好機と思ってか一気に攻撃を仕掛けてきた。

・・・まんまと引っかかってくれたよ・・・

俺は剣を握り、振りかぶってきた右腕をすかさず左腕で受け止める。

「何っ！？クッ！！」

そして続け様に右腕で殴ってくるが、それも今度は右腕で奴の肩を抑え込む形で受け止める。

「……これで終わりだ」

「ハンツ！何言ってるやがるっ！お前には武装もメモリも無いんだぞっ！！……ってなんだその足はっ！？」

俺は勝ち誇っている奴の表情が驚愕に染まったのを確認した。

奴の視線の先には俺の右足がある。ただし、普通の状態ではない。膨大な紫色のエネルギーを纏っているのだ。

「ま、まさか……さっきのは囿っ！？」

「ほう……よくわかったな」

そう・・・イメージの言う通り、先ほどスカルマグナムのバレルスロットを下げたのはただのフェイク。煙幕も少し見えるぐらいにしておいたから完全に引っかけたかった。

もうお分かりだろうが、実はメモリはベルトのほうのあるマキシマムスロットに入れたのだ。

「ま、まってくれっ！！組織について何でも話すっ！！だ、だから見逃してくれっ！！もう悪さはしないからっ！！」

「・・・・・・・・組織の名前は？」

自分のピンチを悟ってか、イメージが命乞いをしてきた。・・・・
丁度いいから聞き出すか。

「え、えつと確か・・・・・・・・『ハイパー大シヨツカー』だった」

「・・・・・・・・」

ネーミングセンス無っ！？ま、まあ名前さえ分かれば調べられるしいいか。

俺は両腕を下した。そしてイメージに背中を向ける。

「……………行け」

「お、おう……………なんて行くかよっ！！馬鹿がっ！！」

……………分かりやす。

背中を向けた俺にイメージは剣を思いっきり振り下ろしてきた。まあ、予想通り。

その行動を読んでいた俺は振り向きざまにマキシマムドライブを解いていなかった右足でシンバルキックを叩き込んだ。

案の定、そのキックはクリティカルヒット。イメージは思いっきり

吹き飛ばされた。

「ち、畜生……ぐアアアアアアツ!!」

そしてイマジンは断末魔の悲鳴を上げながら爆発した。

その爆発で発生した爆風を背中に受け、帽子を軽く戻しながら俺はデンライナーへと戻っていった。

「お帰りなさい、一夏」

「ああ・・・ただいま、鈴」

デンライナーに着く前に変身を解いた俺はそのまま食堂車へと足を運んだ。

入るところには笑顔を浮かべた鈴が俺を待っていた。・・・この笑顔を見ると、帰ってきたって感じがする。

553

「怪我は大丈夫？」

「ああ。まともに受けた攻撃はなかったからな」

「そっか・・・ならすぐに戻って医務室に行かないとね」

「・・・どうしてもか？」

「当たり前じゃない。骨折してるんだからね？」

「……………分かった」

「うん、素直でよろしいっ！」

鈴との会話を終えて、俺は席に着いた。が、次の瞬間、俺は一気に意識を失ったのだった。

「寝たのか？」

「ええ。そうみたいです」

千冬が一夏の状態を見ている鈴に問いかける。鈴はそれに普通に返した。

「まあ、あれだけの怪我であれだけ動いたんだ。・・・無理もないか」

「はい」

鈴は一夏の頭を自分の膝に乗せた。つまり簡単に言うとは膝枕だ。そんな様子を見て千冬たちは嫉妬のまなざしを鈴に向ける。だが、鈴はどこ吹く風といった感じで何食わぬ顔をしていた。そして元の時間に戻るまで、一夏の頭を優しく撫でていた。

「お疲れ様、一夏」

第24話 デュエルがしくて仕方がない……(後書き)

DOG DAYS終了……でも明らかに2期やる感じですね。やる
としたら……半年後とか？

DOG DAYS書きたくなりましたね……

第25話 今月末にテストだ・・・そして、アंकゥっ!?(前書き)

今回も遅くなってしまい、大変申し訳ございませんでした。しかも、中途半端になってしまいました。

ではごきげん!

第25話 今月末にテストだ・・・そして、アंकくっ!?

デンライナーが元の時間に着くと、俺は鈴に起こされた。いつの間にか膝枕をされていたのには驚いたが、いつもの事なので気にしないことにした。

そしてそのまま保健室へと連れて行かれた。検査の結果・・・肋骨に罅が入った程度だった。さすがにそれはおかしい。吐血するほどだったはずなのに罅程度で済むはずがない。

考えた結果、理由はスカルメモリにありそうだった。

スカルメモリの能力は極限までの身体能力の強化と、それに耐える体の強化である。つまりは回復力も上がっているという可能性がある。今まで大怪我をした状態での変身をやったことがないため確証はないが、他に理由が考えられない。

まあ、治ったんだからいいやつ！

ちなみにあの後の補足を見ると、イメージが出てきてからの記憶は一般生徒や教員には一切無くなっていた。もちろんカメラ等にも映

つていなかった。ただし、ボーデヴィツヒが暴走したところは残っていたため、トーナメントは中断。一回戦だけをやるということになった。

その日は結局そのまま解散ということになった。俺たちも言葉少なにそれぞれの部屋に戻って行った。

その頃、ラウラは千冬と共に指導室にいた。実はラウラが目覚めた時、千冬から説明がまったくされず、過去に跳んだのである。

……いや、それには語弊があった。『お前を助けたのは一夏だ』としか教えられなかったのである。それ以外の説明はまったくされなかった。なので今説明を受けるところである。

「それで・・・教官。・・・何が・・・起きたのですか・・・？」

先ほどからラウラは視線をジッと千冬に向け続けている。

「ふう・・・一応、重要案件である上に機密事項なのだな」

しかし、そう言っても引き下がる相手ではないこともわかってる。

千冬はここだけの話であることを沈黙で伝えると、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「VTシステムは知っているな？」

「はい・・・正式名称はヴァルキリー・トレース・システム・・・
過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かあれは・・・」

「そう、IS条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・使用すべてが禁止されている。それがお前のISに積まれている」

「……………」

「巧妙に隠されていたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意志……いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

千冬の言葉を聞きながら、ラウラはぎゅっとズボンの上に置いていた手を握りしめた。

視線はいつの間にかうつむき、眼下の虚空ををさまよっていた。

「私が……望んだからですね」

あなたに、なることを……その言葉は口にはしなかったが、千冬には伝わった。

「ラウラ・ボーデヴィット！」

「は、はいっ！」

いきなり名前を呼ばれ、ラウラは驚きも合わせて顔を上げる。

「お前は誰だ？」

「わ、私は……。私……。は……」

その言葉の続きが出てこない。自分がラウラであると、どうしても今の状態では言えなかった。

「誰でもないのなら、ちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィットになるがいい。何、時間は山のようにあるぞ。なにせ三年間はこの学園に在籍しなければいけないからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ・・・」

千冬の言葉が意外だった。まさか、自分を励ましてくれるとは思ってなかったラウラは、何を言うべきかわからない。わからないまま、ただぽかんと口を開けていた。

「・・・それにそんな状態であったのを知っていたのに見逃した私の罪でもある。・・・相談にならいくらでも乗ってやる」

「は、はいっ!!--」

ではな、と言って千冬は席を立ち部屋を出ようとする。しかし、そんな千冬をラウラは呼びとめた。

「ま、待って下さい、教官っ!!--」

「ん?」

「何故・・・何故、織斑一夏はあそこまで強いのですか・・・？」

今にも泣きそうな声でラウラは千冬にそう問いかける。そんなラウラを見つめながら千冬は言葉を紡ぎ出す。

「・・・・・・・・あいつの何を見てそう思った？」

「・・・・・・・・戦いを見てそう思いました」

「そうか・・・」

千冬は再び部屋を出ようと背を向ける。

「き、教官っ！」

「・・・・・・・・私からは何も言えん。そうだな・・・聞きたければ本人に聞け」

「・・・答えてくれるでしょうか？」

「さあな・・・まあ、ダメもとで行ってみろ」

千冬はそう言い放つと今度は有無を言わずに素早く出て行った。
ラウラは一人、部屋に残された。

「織斑、一夏」

ただ一人の部屋でラウラは呟く。その瞳には今までのような憎しみに満ちたものはなく、ただ純粹に興味という感情ともう一つしか写っていないかった。

俺とシャルルは幾許かの休みを取った後、夕食を取るために食堂へと足を運んだ。

それぞれの夕食を取り、席に座ると食堂にあるテレビからトーナメント中止のお知らせが流れる。俺たちは事前に知っていたのでたいして驚かなかった。

「…………優勝…………チャンス…………きえ…………」

「…………交際、無効…………」

『うわあああああああんっ!?!?!!』

すると、突然他の食堂にいた女子たちが思いっきり泣きながら食堂から全速力で走り去っていった。

「……………一体何だ？」

「ち、さあ……………」

シャルルにも分からなかったらしく、俺と同じく首を傾げながら疑問符を出していた。

なんかトーナメントで賭けごとでもやってたのかね？

そんな中、たった一人残された女の子がいた。そちらに目を向けるとそこにいたのは箒だった。

俺は先月した約束を思い出し、食事を中断して箒の元へと歩いていった。

「箒、先月の約束だが……」

「う、あ、ああ……」

「別に付き合っても構わないぞ」

「っ！！！」

俺がそう言つと、箒はビクンッ！！と身体を動かし、俺に掴みかかつてきた。俺は咄嗟に箒の腕を掴んで阻止したが……箒の顔が滅茶苦茶興奮してて、言っちゃ悪いけどちょっと怖いんですけど……

「ほ、本当かつ！？本当に、本当なのだなっ！？」

「……ああ。それで聞きたいんだが……」

「な、なんだ？何でも答えるぞっ！」

「何に付き合えばいいんだ？」

俺がそう言った瞬間、空気が硬直した感じがした。

えっ！？何事っ！？俺なんかしたっ！？

そして筈が顔を俯かせた。俺ももう大丈夫かと思い、腕を離す。

「……………は？」

「いや、だから、何に付き合えばいいんだ？買い物か？」

「……………だろっつと……………」

「ん？」

すると、急に顔を上げた。グアバツ！！と効果音が付きそつな勢いで。

「どうせそんな事だろうと思ったわっ！！！」

その言葉と同時に俺に勢いの乗った正拳突きを放ってきた。俺は条件反射でそれを避けた。すると、筈はむきになったのか何度も放ってくる。俺はそれも全てかわした。

俺が避け続けていると、筈は段々涙目になってきて、そのまま正拳突きを止めると、食堂を走り去ってしまった。……結局何だったんだ？

「……一夏って、時々女性の天敵だって思う時があるよね」

「……なんだそれは？」

何故か俺を睨みながらシャルルはそう告げた。……いや、さすがにそれはひどくない？

「あ、織斑君にデュノア君。ここにいたんですか。さっきはお疲れさまでした……どうかしました？」

「ああ、いえ、何でも……」

俺が先ほどのシャルルの言葉と篝の行動に顔をしかめながら頭を悩ませていると、いつのまにかいた山田先生が訝しげに俺を見た。

「そうですか？ならいいんですけど……あ、二人に朗報をお持ちしましたっ！」

「朗報、ですか？」

「はいっ！なんとですね、今日から男子の大浴場使用が解禁されるんですっ！」

「へえ……それはそれは」

おおっっ！やっとゆっくり風呂に入れるのかっっ！嬉しい限りですっ！！

「ありがとうございます、山田先生」

「いえいえっ！では、私は先に鍵を持って大浴場の前にいるので二人は着替えを持ってきてくださいねっ！」

「……二人？……あ。」

俺とシャルルは非常に拙いことに気が付いた。が、ここですぐに名案が浮かぶほど頭の回転は速くない。とりあえずは……

「分かりました。では、一旦部屋に戻らせて頂きますね」

「はいっ！お待ちしてますねっ！！！」

俺は何か言いたげなシャルルの腕を掴んで部屋へと連れて行った。

「……さて、どうしようか……」

「仮病を使うとか……」

「いや、あの山田先生のテンションだと看病するとか言い出しそう
だ」

「確かに……」

ん〜やっぱりこれしかない、か……

「……シャルル。俺が先に手短に入るから、その後入ってくれない
か？ああ、お前はそれまで脱衣所で待っててもらえるか？」

「えっ!?!」

俺が入らずに待っているっていうのも考えたんだけど、それだと出
た時にすぐに分かってしまう。なら、俺がさっさと入って出てくれ
ばいい。男なんだからそれぐらいで平気だ。

山田先生は脱衣所の扉を開けて、俺たちを中に入れた後、再び扉を閉めていった。

「さてと……シャルル、向こうを向いてもらっていいか？」

「へっ？あ、うんっ！わ、分かったっ！！」

シャルルが向こうを向いたのを確認した後、俺はすぐさま脱いでタオルを腰に巻いた。

「じゃあ、すぐに出てくるから少し待っていてくれ」

「う、うん……分かった」

そして俺は大浴場へと足を踏み入れた。

俺は手早く、だが、シツカリと体と髪を洗い、湯船に浸かった。

うゝむ・・やっぱり風呂は気持ちいいね。まあ、シャルルのことがあるからゆっくりは浸かれなないけどね。

すると、突然カラカラという音が大浴場に響いた。その音は大浴場と脱衣所を隔てる扉が開く音だ。

・・・・・へ？誰ぞ？

慌ててそちらのほうを向くとそこにいたのはなんとシャルルだった。服を脱いだ状態で。・・いや、タオルを巻いているが。・・・・

「あ、あんまりジロジロ見ないで。・・・一夏のえつち。・・」

「っ!?!す、すまんっ!?!」

俺は再び慌てて反対側を向く。 . . . な、なんでシャルルがいるわけっ!?!?

「 . . . すまない。もう5分経っていたか . . . 俺はもう出るとしよう」

「だ、大丈夫だよ。それにまだ5分経ってないし . . . 」

「 . . . 何? 」

. . . え、じゃ本当になんでシャルルがいるわけ?

「 . . . では、何故入ってきた? 」

「え、えっとね . . . 一夏に言いたいことがあったんだ」

「言いたいこと?・・・なら、別に今でなくても」

「今、言いたいんだ」

「・・・分かった」

俺が了承の旨を出すと、何故かシャルルが黙り込んだ。・・・静寂が大浴場を支配する。・・・すごく居心地が悪いです・・・

「あ、あのね・・・前に一夏が言ってくれたことだけど・・・」

「・・・前?」

「えと・・・僕が望むなら絶対に助けてくれるって・・・」

「ああ・・・言ったな」

「あれね、本当に嬉しかったんだ。今までそんなこと言ってくれた

人いなかったから」

「そうか・・・」

・・・まあ、あんな家族環境じゃね・・・

すると、突然シャルルが俺の背中に抱きついてきた。

「お、おいっ！シャルルっ！」

「・・・僕の本当の名前はシャルロットって言うんだ。一夏には呼んでほしいな」

「・・・分かった。分かったから・・・」

「離さないよ・・・もうちょっとだけ・・・」

・・・誰かっっ！！ヘルプミっっ！！

シャルル・・・じゃなかった、シャルロットが抱きついていて、間は微動だにせずだった。理性がガリガリと削られていったが・・・

「・・・僕は一夏がいるからこの学園に残ろうと思う。僕を助けてくれる一夏がいるから・・・」

「・・・ああ。絶対に俺がお前を守る」

俺は後ろ向きにシャルロットの頭を撫でる。

「・・・ホント一夏って女性の天敵だよな」

「・・・だから何故そうなる？」

「フフフ・・・何でだろうね？」

・・・何故か笑って誤魔化されてしまった・・・

しばらく、俺たちはそのままで入浴していた。シャルロットが自分の行動に驚くまで・・・

第25話 今月末にテストだ・・・そして、アंकゥっ!?!? (後書き)

ゴークイシルバー・・・いいキャラしてますね。

最近、本当に疲れが取れない・・・拙いな。

第26話

大学ってこんなに忙しいなんて・・・（前書き）

更新がこんなにも遅れてしまい、大変申し訳ございません！！

まさか、ここまで忙しいとは・・・主に友達付き合いという意味で・・・

では、ごんごー！

第26話

大学ってこんなに忙しいなんて・・・

俺は風呂から上がり、火照った体を冷ますために食堂でアイスコーヒーを購入し一息ついていた。

そして今日の戦いのことを思い出し、あのイメージが漏らした情報を整理する。

・・・ショッカー。どこかで聞いた覚えがあるような・・・鈴に聞けばわかるか。

俺のサポートをしてくれる鈴は情報を常に纏めている。鈴に聞けば何かしら分かるだろう。

「・・・織斑、一夏」

「ん?」

名前を呼ばれたのでそちらの方向を向くとそこにはボーデヴィット
があり、ジッとこちらを見ていた。

「……どうした？ボーデヴィット」

「私のことはラウラでいい」

「……そうか。なら俺のことも一夏でいい」

うぐむ……何だか違和感が凄まじくあるなあ……

「……それで、何か用か？」

「……お前に聞きたいことがある」

聞きたいこと？一体何ぞ？

考えてみるが、まったく予想がつかない。

「……俺が答えられることだったならな」

「では、聞きたい。……何故お前はそんなに強いんだ？」

「……は？」

俺が強い？何いってんのさ、この子。

「……俺が強い等と誰が言った？」

「私がそう思った」

「そうか……」

あーうん。今までの戦いをみてそう思ったんだよね？……ん。

「……俺が強いか・俺は決して強くはない」

「そんなはずはないっ！では、何故私やあの怪物に勝てたのだっ！？」

「それはただ単に上手く立ち回っただけだ」

ポードヴィツヒ……じゃなかった、ラウラの時は隠していた手札を切っただけ。イマジンの時は相手が馬鹿で俺の作戦が上手くはまっただけだもんね。

そう、ラウラに説明したのだが、何故か納得いかないようで、唸っている。

「……お前にとって強さとは何だ？」

「……力だ……いや、だった、の方があっているか……」

ラウラは少し俯きながら答えた。

その言い方だと今は違うみたいだね。

「では、今は？」

「・・・わからないんだ。お前と戦い、そしてお前の戦いを見ていたら力だけでない・・・別の意味で強いと思ったのだ。だからお前に聞きたい」

「・・・そうか」

ラウラは自分の信じていたものが崩れ去って、どうしたらいいのか分からないっていう目をしている。だが・・・

「すまないが、お前の問いかけに答えることは出来ないな。・・・俺にもまだ分かっていないんだ」

「・・・そう、なのか・・・」

「ああ」

「・・・では、何故私はお前の事を強いと思ったのだ？」

ん〜また難しい質問だな、こりゃあ・・・

「・・・俺はお前じゃないからよくは分からない。だが、分かることは一つだけある」

「・・・何だ？」

「俺もお前も強さが何かということを理解していないのさ。・・・いや、違うか・・・お互いにお互いの強さが何なのかを探してるんだ」

強さとは人によって様々。誰一人として同じ強さなんてありえない。だから、人は自分だけの強さを探しているのだ。

俺はラウラの頭を優しく撫でる。

「・・・急ぐ必要はない。ゆっくり探していけばいい」

「・・・ん」

「・・・やれやれ。前からこんなに素直だったら可愛いのかな。・・・いや、あれも素直っちゃ素直か・・・」

「・・・そうだな。お前の強さを探すのに、俺も協力しよう」

「・・・え？い、いいのか・・・？」

「ああ。だが、その代わりに・・・」

「代わりに・・・？」

「お前も俺の強さを探すのに協力してくれ」

ラウラがポカン・・・とした表情でこちらを見てくる。・・・ヤバいっ！メツチャ抱きしめたい・・・っ！

「そ、そんなことでもいいのか・・・？」

「おや？そんなこととは言ってくれな。これはつまり、分かるまではお前と俺はほとんど離れられないということだぞ？」

「・・・構わない。お前となら何処までもいける気がするんだ」

「・・・それは、随分と嬉しいことを言ってくれな」

まさか、そんな風に思ってくれるなんてね。うん、すごく嬉しい。俺はラウラの手を取る。

「・・・なら、俺はお前を俺が死ぬその時まで守り続けよう。あらゆる障害を壊し続けよう。そしてこのことを俺自身に誓おう」

「・・・私も誓う。一夏と共にこれから生きて行くことをっ！っ！」

なんか、鈴の時と似てるね。いや、あのときは言葉が違うけど。

俺とラウラはそれぞれ誓い合った後、それぞれの部屋に戻るためにその場で別れていった。

ラウラは部屋に戻った後、とある人物に連絡を取った。その人物の名前はクラリツサ・ハルフォーフ。ラウラが隊長をやっているドイ

ツのIS配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」の副隊長である。

『通信受諾。隊長、どういったご用件で？』

「そ、そのだな……」

口ごもるラウラの様子にクラリツサは口には出さないが疑問符を上げる。

「……気になる人が出来たんだ」

『気になる、人ですか……』

「ああ……」

そう言ってラウラは一夏のことを頭に思い浮かべる。すると、顔が熱くなり、更には心臓の鼓動が早くなった。

「そいつの・・・一夏のことを思い浮かべると、鼓動が速くなってくるんだ・・・一体何なのだろう、この気持ちは・・・」

『・・・隊長。・・・それはおそろく』

「おそろく？」

『恋だと思われます』

クラリツサはそこまで言うと言った驚きの感情を感じた。今まで恋とは無縁だったと言ってもまったく過言ではないラウラが異性を好きになったのだ。そしてそのことを自分に相談してくれたことに喜びも感じていた。

「・・・そうか、これが恋なのか・・・人を好きになるといふことなのか・・・」

『もしよろしければ、そこまで至った経緯をお聞きしてもいいですか？』

「ああ・・・」

その後、ラウラはクラリツサから根掘り葉掘り聞き出された後、色々教わったそうなの・・・

翌日、俺は一人で教室に向かっていた。最初はシャルロットと一緒に

に行こうと思ったのだが、どうやら用事があるらしく先に行ってくれと言われたので先に行くことにしたのだ。

そしてホームルームの時間になったのだが、シャルロットは未だ教室に姿を現していなかった。俺？俺はとっくに席についてるよ。

み、みなさん、おはようございます……」

教室に入ってきた山田先生は何故かふらふらとしていた。ど、どうしました？

「今日はずね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますが、すでに紹介は済んでいるといいますが、ええと……」

山田先生の話にクラスみんなは一斉に騒がしくなる。今のこの時期に転校生がまた来るわけだから当然と言えば当然と言えば当然だ。

でも、『すでに紹介は済んでいる』？……まさか

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

・ ・ やっぱりか。予想的中だな。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

ぺこりと、スカート姿のシャルロットが礼をする。辺りを軽く見渡すと、クラス全員がぽかんとしたままだ。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということでは
ああ・ ・ ・ また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります・ ・ ・
」

頑張れ山田先生。今度差し入れしに行くから。

「え？デユノア君って女・・・？」

「おかしいと思ったっ！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って織斑君、同室だから知らないってことはないわよね・・・？」

「そっいえば、ちょっと待って。昨日って男子が大浴場使った日じゃ」

おっと、これはまずいか・・・？

「一夏・・・」

「篝？」

俺が何を話そうか・・・違うか。なんて言おうか悩んでいると、篝から声をかけられた。・・・なんか声がものすごく怖い感じなんですけど・・・

不意に声をかけられたのでそちらの方・・・教室の入り口を見ると、そこには案の定ラウラがISを部分展開した状態で立っていた。

「ラウラか・・・助かった。・・・もう解いてやってくれないか？」

「分かった」

俺が頼むとラウラは素直に箒に掛けていたAICを解除してくれた。すると、箒は解除されたのが分かると再び刀を構えた。今度は俺ではなくラウラにだ。

600

「っ！！貴様、何をするっ！！」

「・・・それは俺のセリフなんだがな、箒」

「そ、それは・・・って、あっ!？」

俺は何か言いかけた箒から刀を取り上げた。あんなに感情的になっている状態で刀を持っているのは大変危険だからだ。

俺はそのまま筭の席にあった鞘を取り、刀を仕舞った。そしてそれをとりあえず山田先生に預けた。

「え、えええええっ！？織斑君っ！せ、先生に渡されても困りますっ！？」

「後で織斑先生に渡しておいてください。それをしてくれるだけでいいです」

「先生の抗議は無視ですかっ！？」

はい、無視です。後でお詫びするから許してっ！

俺は未練がましく刀を見ている筭に近づき、一言説教でも言おうかと思っただが……

「一夏」

すると、ラウラは赤かった顔を真っ赤にして気絶してしまった。・・
・・やりすぎた。

その後、俺は織斑先生に説教を受け、シャルロットからは目が笑ってない笑みを受け続け、セシリアからは涙目でジッと見られた。そして、鈴には・・・・・

「・・・・マタカコノヤロウ」

と言われてしまった。・・・・もう、許してください。

「むーん・・・・」

そこは奇妙な部屋であった。部屋の至る所には機械の備品がちりばめられ、ケーブルがさながら樹海のように広がっている。

ここは 篠ノ之束、その秘密ラボである。

「おー、おー」

そんな今、束はなにをしているかというところ、ナノ単位のスカルのプラモデルを組み立てている。

つまり暇つぶしをしている。

「あー、終わっちゃった」

暇つぶしの割には塗装から表面保護、磨きだしと完璧である。そして、束はそれを大事そうにしまった。

「んー・・・暇、暇あ」

ぱらりるぱらりる〜

すると、突然ゴッド・ファーザーのテーマが流れ始めた。

「ここの着信音はっ！トウッ！」

大ジャンプ。もとい携帯電話にダイブ。しかも華麗に。

「も、もすもす？終日？ひねます」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ぶつっ・・・・・・・・切れた。二重の意味で。

「わー、待って待ってっ！」

束の願いが通じたのかはたまたまた神様のイタズラか、携帯電話は再度鳴り響いた。

「はい、みんなのアイドル・篠ノ之束ここに　　待って待ってえっ！ちーちゃんっ！」

「その名で呼ぶな」

「おっけい、ちーちゃんっ！」

「……はあ。まあいい。今日は聞きたいことがある」

「何かしらん？」

「お前は今回の件に一枚噛んでいるのか？」

「今回、今回　　はて？」

束は首をひねる。とぼけているのではなく、本当にわからないのだ。

「VTシステムだ」

「ああ。あれ？うふふ、ちーちゃん。あんな不細工なシロモノ、この私が作ると思うかな？私は完璧にして十全な篠ノ之束だよ？すなわち、作るものも完璧において十全でなければ意味がない」

「………」

「それに私がいつくに怒られそうなことをやると思っかな？」

「………そうだったな」

束は絶対に一夏に怒られるようなことはしない。

それは束が一夏に心底惚れこんでいるというのが最大の理由だ。人というのは惚れた人間の逆鱗に触れるようなことはしたくないもの

である。これは社会不適格者である束にも当てはまることである。それに彼女は……

「もう二度といっくんの怒りには触れたくないしね……」

ぶるつと体を震わせながら束は言う。

「まあ、いい。では、またな」

ぶつと電話が切れる。今度はもう一度かかってくるということもない。束は名残惜しそくに一度携帯電話を眺めたが、二秒後にはけるっとしてそれを放り出した。

「やあ、久しぶりに声を聞いて束さんは嬉しかったねえ。ちーちゃん相変わらず素敵ングだよ。夕日の向こうには行かないでね」

束は軽く鼻歌を歌いながら今度はダブルのプラモデルを作り始めた。同じくナノ単位のを。

ちやらら〜 ちやらら〜 あんたら全員、覚悟しいや。バキューン
バキューンッ！ぐあああッ！ああッ、兄貴ッ兄貴いッ！おっだらあ、
タマあとったらんかあッ！

突然の携帯電話着信 しかし、ものすごい着信音である。悪趣
味だ・・・

その着信音に、千冬するとき以上の反応を見せる束。折れたウサ耳ま
でもがビーンと真っ直ぐに立ち、その反応の大きさを雄弁に物語っ
ていた。

なにせ、この電話が鳴るのは、初めてのことなのだ。

「やあやあやあッ！久しぶりだねえッ！！」

「……………姉さん」

「うんうん！用件はわかっているよ。欲しいんだよね？君だけのオンラインワン、オルタナティブ代用無きもの、ハイ専用の機が。モチロン用意してあるよ。エンド最高性能にして規格外仕様。そして、誇り高き菊と並び立つもの。その機体の名前は

紅椿」

「でもねでもね。これを今の篝ちゃんにはあげたくないかな」

「っ！？何故ですかっ！？」

「簡単だよ。篝ちゃんが安易に力を求めるからだよ」

「っ!？」

束の言葉に篝は思わず息を飲んでしまった。まさしく凶星だったからだ。姉のことだから自分の専用機を用意してるだろうと思ったのだ。

「ダメだね、篝ちゃん。安易に力を手に入れたものの結末は……わかるでしょ？」

「で、では一夏は何故あなたに専用機を作ってもらったのですか?! それこそ安易に力を求めたのではないのですか?!？」

「……いつくんを馬鹿にするのは許さないよ」

今まで聞いたこともないような束の声に篝は硬直してしまった。

「専用機を作ったのは私がいつくんに必要だと思ったから。いつくんはこれから世界を巻き込んだ大騒動に巻き込まれるに違いない。チマチマ訓練機からやっていけるほどの時間もない。だから、それを理解たいつくんはIS学園に入学するまでの間、私のところでひたすら努力してたよ。それこそ寝る間を惜しんでね」

「……………」

束から聞かされたことに篤は沈黙を保った。

「……………一応、今度持っていくけど、受け取るかどうかは篤ちゃん次第だよ」

そう言って束は電話を切った。篤はただ、電話が切れた携帯を握りしめているだけだった。

第26話

大学ってこんなに忙しいなんて・・・（後書き）

最近クオリティが下がっている気がする・・・

モチベーションが低めなせいかな？

第27話 宇宙キタ ッ！！（前書き）

こ一カ月・・なかなか充実したというか忙しかったというか・・・
ひたちなかや、幕張行って部全員でバイトしたりとか・・・・・
そろそろ止めたくなってきた。夏休みなのに殆ど部活とか死ねるん
ですけど。

そんなこんなで更新が一カ月も遅れてしまい申し訳ございませんで
したっ！

では、どうぞっ！

第27話 宇宙キタッ！！

「さて、聞かせてもらおうかラウラ・・・」

「うむ、なんだ一夏。何でも聞いてくれ」

なら、遠慮なく聞かせ・・・

「こんな夜中に俺のベッドに・・・しかも裸で潜り込んできた理由を、聞かせてもらおうか？」

現在、夜中の3時。俺は何故か裸のラウラとベッドの上で座りながら向き合っている。・・・一応、断っておくけど俺はちゃんとパジャマ着てるからね？

「うむ、それはだな・夫婦というのはこうするものだと言ったからだ」

「・・・ちなみに誰からだ？」

「わたしの隊の副隊長のクラリツサからだ」

「・・・随分とまあ、偏ったというか間違った情報をお持ちなこと
で・・・」

俺は内心ため息をついた。そしていつかドイツに行ってそのクラリツサなる人物に説教の一つでもかましてやろうとも思った。

「・・・そうか・・・だが、ラウラ間違っているぞ」

「何？どこがだ？」

「俺とラウラが夫婦という所が、だ」

「な、何っ!？」

ラウラが絶望したような表情で俺を見てくる。

「言っただろっ?俺はお前に惚れたら嫁になってやるとな。・・・俺はまだお前に惚れていないぞ?」

「っう・・・」

そう言つとラウラは俯いてしまった。・・・ちよつと言い過ぎたかな?

俺は向かい合っているラウラの頭に手を伸ばして軽く撫でる。

「・・・頑張つて俺を惚れさせてみるんだな。話はそこからだ」

「……うむ。私は諦めないからな」

「……ああ」

俺はその後、ラウラに部屋に戻るように言ったのだが、ラウラが一緒に寝るといって聞かなかった。

仕方ないので俺は部屋で寝かせることにした。

「……仕方がない。俺はソファで寝る。お前はベットで寝ろ」

「何を言っているのだ。一緒に寝ればいいだろう」

「……一緒に寝るのは恋人か夫婦だけだ。俺たちは友達だから一緒に寝ない。分かったな？」

「……分かった」

「後、服を着る」

「私は普段寝るときは裸だが？」

「……俺のTシャツをやるからそれを着る」

俺はクローゼットからTシャツを取り出し、ラウラに投げ渡した。
すると、ラウラは顔を赤くしながらイソイソと着始めた。……
何故顔を赤らめたし？

「……これはもう返さんぞ」

「……別に構わないが……」

そう言つとラウラは顔を輝かせてそのままベットに横になった。

「……は、寝るとして……」

「・・・ああ」

テンション高いと寝れないんじゃないかな？・・・あれ？前にも似たようなこと思った気がする・・・？

俺は予備の掛け布団を取り出し、それを掛けながらソファで寝ることにした。

翌日、何故か俺の部屋に訪れた筈がラウラを見た瞬間、木刀で斬りかかってきたが、木刀を叩き折って無力化しといた。

休日の朝、俺は私服に着替えて学園の前に立っていた。すると、中からシャルロットが走ってきた。

おお・・・私服姿も綺麗だね。

「う、ごめんね一夏。待たせちゃったかな？」

「いや、俺も今さっき来たところだ。気にするな」

「う、うん……」

(うう……な、なんか今の会話、恋人っぽいな……ちょっと嬉しいかも)

「では、そろそろ行くとするか。……先にショッピングモールだったな」

「うんっ！」

実は今日俺とシャルロットは二人で出かける約束をしていたのだ。前に約束した愛理さんのコーヒーを飲ませてやるというモノを果たすために。

だが、シャルロットがその前に買い物をしたと言いだした。近々ある臨海学校のためだ。俺も買ったかったので丁度いいと思い、ミ

ルクディッパ―に行く前にシヨッピングモールに寄ることにしたのだった。

「ああ、そつだシャルロット・・・服、似合つてるぞ」

「ほ、本当っ!?!・・・ありがとねー夏」

頬を染めてハニカミながら俺に礼を言うシャルロット。・・・あゝ少し褒めただけでそこまで喜ばれるのはちよつと予想外つていうか・・・笑顔が眩しいというか・・・

623

「ただ思つたことを言つただけだ。礼を言われるほどじゃないさ」

「そつだとしても、僕が言いたくなつたから言つたの。・・・ダメ?」

「・・・いいや」

そつ言われたら何も言えないでしょうが・・・

話もそこそこに俺たちは駅に向けて歩き始めることにした。そのときシャルロットが腕を絡ませてきて少し驚きはしたが、シャルロットの好きなようにさせることにした。だって少し歩きづらくなるだけだしね。

「な、何故あの二人・・・腕を組んでいるのですかっ!?!」

一夏とシャルロットが歩き始めて少しすると、二人がいた近くの物陰からセシリアが顔をのぞかせた。その目は嫉妬に燃えていた。

「う、羨ましいですわ・・・私もしたことが無いというのに・・・っ!」

そしてどこからともなく取り出したハンカチを啜え始めた。所謂キ
ーツ！といった感じに。

「鈴さんは何やら用事があるとかで一緒に来てくれませんでしたし・
・仕方ありませんわ。私が一人で二人が如何わしいことをしない
ように見張るしかありませんわねっ！」

セシリアが一人で気合いを入れている。・・どうやら、鈴は何かの
用事があったらしくこの場にはいないようだ。

625

「ほう、楽しそうだな。では私も交ぜるがいい」

「っ!？」

後ろから聞き覚えのある声がし、慌てて振り替えるとそこにはセシ
リアにとってとても苦い思い出のある人物がいた。

「ボーデヴィッツさん・・・」

そう、自身が敗北し、自分の目の前で好きな人のキスを奪ったラウラだった。

「どろろしているのですか？」

「お前と同じだ。では私は一夏を追うので、これで失礼するとしよう」

そう言ってラウラは本当にすたすたと歩き始めたので、セシリアが慌てて止めた。

「ちょっと、ちょっとお待ちなさいっ！追ってどろろしようといひますのっ！？」

「決まっているだろう。私も交ざる。それだけだ」

あっさりと言われて、逆にセシリアは怯んでしまった。こうまでストリートに言われると、なんだかもう悔しいのか羨ましいのかわからない。

「ま、待ちなさい。未知数の敵と戦うにはまずは情報収集が先決。そうでしょう？」

「ふむ、一理あるな。ではどうする？」

「ここは追跡ののち、ふたりの関係がどのような状態にあるのかを見極めるべきですね」

「なるほどな。では、そうしよう」

かくして、何が何だかよくわからないうちにおかしな追跡タッグが結成されたのであった。・・・本当に、よくわからない。

何事もなく俺たちは無事にショッピングモールについた。

「さてと……まず何を買に行く？」

「ん〜……あ、水着を新調しようと思ってたんだ」

「じゃあ、水着売り場に行くとするか」

「うん」

どつやら、シャルロットは水着を買いたいようだ。俺も丁度いいから新しいのを買つか……

そんなことを考えつつ、俺たちは目的の場所へと向かうことにした。

しばらく歩くと、専門店街にやってきた。そこは少し洋風な街並み

をイメージして作られており、歩いているだけで楽しめるものだった。

そんな中を歩いていると、ある店が目に入ってきた。……そういえば、そろそろ誕生日だったか。確か……

「……すまん、シャルロット。先に行つてもらえるか？」

「え？いいけど……どうしたの？」

「ん、少しな……」

最近、何かとすぐに怒ってるからな……ご機嫌取りも兼ねて、だな。

目的の品も買って一安心。俺は先に行ったシャルロットに追いつく

べく足を進めていると、前から見慣れた顔が二つやってきた。

「弾。それに蘭も」

「ん？一夏？」

「えっ！？一夏さんっ！？」

それは弾と蘭だった。どうやら、弾は蘭の荷物持ちにされているみたいだ。

630

「なんだ。お前も買い物か？」

「ああ。近々臨海学校があるのでな・・・そっちは随分と買いこんでいるようだな・・・全部蘭のか？」

あまりにも多い荷物に若干顔を強張らせながら弾に聞き返す。すると、弾は軽く肩をすくめながら答えた。

「まあな。こいつがお前に見せつけるんだって気合入っててダワハアツ!!!?」

俺に答えた瞬間、弾は蘭に思いっきり蹴り飛ばされた。……
どんだけの威力があったのさっ!?

「……」

「あっ、気にしないでくださいっ。えと、一夏さんも水着を買いにっ?」

「あ、ああ。同級生と一緒にな」

「あ、そうなんですかっ?…チツ。連れがいるのか…」

「ん?何か言ったか?」

「あ、いいえっ!何でもないですっ!」

な、なんか恐ろしいことを呟いていたような気が……

俺は蘭の勢いに少しタジタジになりながら蘭の問いかけに答えていく。うん、なんかちょっと怖い……

「……連れを待たせているのでな。そろそろ行かせてもらおう」

「あ、はいっ！では、また今度会いましょうっ！」

「ああ、またな」

そう言っただけ俺は蘭から若干早歩きで離れていった。決して後ろから聞こえてくる打撃音に怯えたわけではない。うん、そんなわけではない。

俺は先に水着売り場に着ていたシャルロットと合流した。男性用と女性用では水着売り場が違ったので俺たちは再び分かれた。

自分のを適当に選んだ俺はさっさと購入した後、すぐさま分かれるときに決めていた合流ポイントに戻った。すると、そこには既にシャルロットの姿があった。

「シャルロット？随分早かったんだな」

「あ、えと……実は一夏に選んでもらおうと思って……」

ずっと、待ってたわけですか……

「……そうなら連絡をくれればすぐに来たのだが……待たせてしまったすまないな……」

「う、ううんっ！僕が好きでやったんだから一夏の気にすることじ

やないよっ!」

そんなこんなで俺たちはシャルロットの水着を見るために一緒に水着売り場に入ったのだった。

第27話 宇宙キタ ッ！！（後書き）

時間軸がそこまで進んでいないという・・・ああ、最近クオリティがマジで下がってきてる・・・

頭の中で出来つつある新作、そろそろプロット書き始めようかな？

第28話 おおう・・・久々すぎだろ俺・・・orz(前書き)

えと・・・大変長らくお待たせしました。え、待ってない？デスヨ
ネー・・・

部活も止め、書くぞつ！と思ったら教習所の期限がギリギリWWW
そして鬱状態になってましたWWW

今でもちつと危ないかもWWW

あ、4日に東京ドーム行ってきま。

そして久々に書いたから駄文にも程があるWWW

第28話

おおっ・・・久々すぎだろ俺・・・orz

一夏とシャルロットが水着売り場に入っているその時、鈴は常に風が吹いている町、一夏と鈴にとって思い出深い町である風都にきていた。

理由は二つ。一夏に頼まれたものを手に入れるのと、とある人たちにまったく連絡を入れていなかったことに対する謝罪のためだ。

その二つをクリアするために鈴はとある探偵事務所を訪れていた。
・もう、お分かりであるだろうが、その探偵事務所の名前は鳴海探偵事務所である。

そして鈴は今、その入り口に立っていた。しかし、一向に入ろうとしない。

「・・・うう・・・普通に入るべきなのか、恐る恐る入るべきなのか
・悩みどころね・・・」

・・・どつやらどつやって入るか悩んでいるようだ。

そんな鈴に一人の男性が近づいていた。その男性は赤いジャケットを着込んでいる。そしてどつやら鈴に気づいたようだ。

「・・・そんな所で何をしている鳳？」

「ひうつ!?!？」

ギギギ・・・と擬音がでそうな動作で鈴は後ろを振り返る。そしてその男を視界に入れると目に見えるぐらい顔色が悪くなった。

「・・・て・・・照井しゃん・・・」

「久しぶりだな鳳。ああ、安心しろ。皆、中にいる」

「い、いや・・・それまったく安心できないんですけど・・・」

鈴は男の名前を消えそうな声で言った。それに対して男、照井竜は笑顔を鈴に向ける。しかし、目は一切笑っていないかった。

そんな照井を見て鈴は冷や汗をダラダラと流し始めた。

「よし。入るとしよう」

「ちょ、ちょっと待って下さいっ！心の準備が・・・ニヤアアアアアアアアアッ！！！」

「ん？」

「どっしたのー夏？」

「今、鈴の悲鳴が聞こえたような・・・ああ、自業自得か」

「何やったの鈴っ!?!?」

そして中に入った鈴に待っていたのは予想通り皆からの説教だった。あのフィリップにすら怒られたのだから皆がどれだけ心配していたのかが分かるだろう。

説教をくらった後、鈴は事務所のソファに潰れていた。

「・・・で、それでなんのようであたんだ?まさか、顔見せだけじゃないだろ?」

「あ、うん。一夏に頼まれて依頼した資料を取りに来たんだ」

「一夏に頼まれた資料?・・・ああ、あれのことか」

翔太郎は一瞬、鈴がなんのことを言っているのかが分からなかったがすぐに思い当たる点があったのでポンッと手を叩いた。

「丁度良かったぜ。ついさっきまとめ終わったんだ」

「あ、そうだったんだ。ならラッキーね」

「今持つてくる」

そう言うと翔太郎は自身が使っている机の上に置いてある資料を取り、鈴に手渡した。

「ほらよ、こいつだ。．．．そっぴやー夏はどっした?」

「ん? クラスメイトと買い物中」

「．．．．デートか?」

事はないって前に言ってくれたから」

（（（惚気た・・・）））

鈴は嬉しそうに顔を赤く染めながら惚気た。そして4人は思った。
ああ、一夏はいつも通りなんだなあ・・・と。

俺はシャルロットが水着を選んでいる間、店の中を見て回ることにした。

にしても・・・色んな柄の水着があるもんだねえ・・・こんだけあると何を選んでいいのか分かんなくなると思っけどね？

「ん？」

すると、店の外に一瞬だけだが見たことのある金髪が見えた。

・・・あれってセシリア、だよな？何でここに？セシリアも買い物に来たのかね？

俺はセシリアを呼ぼうと声を上げようとしたが、すんでの所で踏み止まった。昔、鈴に言われたことを思い出したからだ。

「女性と買い物しているときにその人の前で他の女性のことを話したり、呼び出したりするのはマナー違反、か・・・」

危ない危ない。もう少しで呼ぶところだったよ。・・・蘭はセーフ、だよね・・・？

俺はセシリアを見なかったことにし、シャルロットが出てくるまで再び店を見て回ることにした。

「い、一夏・・・来てもらっていい？」

「ああ、分かった」

更衣室に入っていたシャルロットからお呼びがかかったので俺はそ
っちに向かった。俺が更衣室の前に立つと、気配で分かったのかシ
ャルロットがカーテンを開けた。

へえ……かなり似合ってるじゃん。

「……え、えと……どう、かな……?」

「ああ、すごく似合っているぞ」

「ほ、本当っ!?!?」

「嘘を言っただじする」

「この場で嘘ついてもなんも意味ないっしょ。」

俺は、頬を赤く染めて目を輝かせているシャルロットに苦笑いしながら答える。

その言葉を聞いてシャルロットは更に頬を赤らめた。

「じ、じゃあっ、これ買ってくるねっ!!」

「ああ、行って来い」

俺がそう答えると、シャルロットは着替えるために再び更衣室に入ってしまった。俺はカーテン越しに店の外で待っている旨を伝えて外に出た。

そして店の近くにあった柱に寄りかかりながらシャルロットが出てくるのを待った。すると、向こうから見知った、というかほぼ毎日見ている顔が見えた。しかも二つ。

向こうも俺に気付いたようでこっちに近づいてきた。

「織斑君っ!!」

「一夏・・・こんなところで何をやってるんだ？」

「山田先生、千冬姉さん・・・」

二人ともいつも通りにスーツを着こなしていた。・・・ぶつちやけシヨッピングモールでの服装としては違和感が・・・

「俺はシャルロットと今度の臨海学校のために買い物・・・二人は？」

「私たちも似たような感じですね」

「ああ」

確かによく見ると二人の手には荷物がぶら下がっていた。後は、水着だけですっ！と山田先生が聞いてもいないのに答えてくれた。

「一夏、お待たせ〜・・・って織斑先生に山田先生っ!？」

「あ、デュノアさん。こんにちは」

「あ、こんにちは・・・じゃなくてっ!！」

おお、シャルロットがノリ突っ込み。これは珍しいものが見れたね〜。

「い、一夏っ!何で二人がここにいるのっ!？」

「二人も俺達と同じらしい。それでたまたま俺に会ったというわけだ」

「そ、そうなんだ・・・」

(ふう〜先生たちが来るなんて完璧に盲点だったよ〜・・・セシリアたちは何故か空気を読んでか出てこないからいいけど・・・)

なんだかシャルロットの顔が若干引き攣ってるけど・・・何故に？

すると、突然山田先生が声を上げた。

「あっ、私、買い忘れてたものがありましたっ！デュノアさん、一緒に来てもらってもいいですかっ！」

「えっ！？あの、ちょっとっ！？」

そして山田先生はシャルロットの腕を掴んで無理矢理引っ張って行った。

おっ、い、どこに行くのさ？

山田先生の突発的な行動に殆ど動けず、俺と千冬姉さんは二人だけになってしまった。

「……ふう、山田先生も気を使ってくれる」

「……ああ、成程。そういうことか」

姉弟水入らずでってわけね。まあ、ここんどこ殆どプライベートで会うことはなかったからね。

俺たちは顔を見合わせてお互いに苦笑いをした。

「まあ、せつかくだから山田先生のご厚意に甘えるところでしょうか、千冬姉さん」

「・・・ああ、そうだな」

そう言っただけ俺たちは水着屋に入ってしまった。

千冬姉さんは早速水着を探し始めた。俺はそれを横で眺めている。しかし、意識は完全に別のほうに向いていた。というよりは意識が飛んでいたと言ったほうがいいだろう。

この所休む暇がほとんど無かったせいかな、疲れがあまり取れていない。さらに言えば、昨日の夜は再びラウラが潜り込んでまた騒ぎになりかけた。

「一夏、どっちの水着がいいと思う？」

おとと、ちっと呆けすぎてたみたいだ。慌てて千冬姉さんの方を見るとその両手には白と黒の水着が握られていた。

とりあえずその水着をじっくりと見ることにした。白い方は清楚な感じが一段と出るような作りをしており、黒い方はその真逆で、所謂アダルティな感じだった。

ふむ……この二つならば……

「……黒、だな」

「む、そうか？」

「ああ。俺は黒が似合っと思っぞ」

「そうか……ならばそうしよう」

そう言っつて千冬姉さんは白の方を棚に戻しに行った。

さてと、このあとどうするかね？このまま二人で回るかシャルロット達を呼び戻すか・・・

「そういえば一夏・・・」

「ん？」

俺はこのあとどうするかを考えていると、いつの間にか戻ってきていた千冬姉さんに話しかけられた。

「お前、彼女とか作らないのか？」

（もしいたら・・・ドウシテヤロウカ）

「・・・は？」

いやいやいやいや、なにいつてんのさ？

「急にどうしたんだ千冬姉さん」

「いや、あれだけの女性に囲まれて年頃の男としてはどうなのかと思っ
てな」

ニヤニヤしながら俺を見てくる千冬姉さん。くそっ……からかっ
ているな……

「……別にそういうのは考えていないぞ」

「ほっ……ふむ、ならラウラはどうだ？」

何故そこでラウラを挙げてくる……？ 咄、咄、ラウラは……

「まあ、ラウラはかわいいとは思ってます」

「その言い方だと何かありそうだな？」

「いや、あの奇行はどうにかならないか、とな……」

「……成程な」

あ、理解してくれた。やっぱり千冬姉さんもラウラの奇行には思っているところがあるみたいだね……

654

「……この話は終わりにしよう、千冬姉さん」

「む、そうか？」

「ああ。早めに帰って夕飯の準備をしようと思う。今日は帰って来れるんだろっ？」

「ふむ……ああ、大丈夫だ」

「ならよかった」

そうやって俺たちはショッピングモールを後にした。もちろん、シヤルロットと山田先生を回収して。二人は近くの店を見ていたらしい。

そして今度は出口付近でセシリアとラウラに会った。セシリアがいたのは知っていたが、ラウラまでとは分からなかった。ラウラがこっちを見るたびに顔を赤くしてるけど、何かしたっけ？

時間は一夏達がまだ水着売り場にいるところに遡る。

セシリアとラウラは一夏を監視していたが、結局一夏がいつもの唐変木ぶりを発揮していると分かり、各々でショッピングをすることにした。

しかし、セシリアは自分の目当ての物や好みの物を探しに行ったが、ラウラは今までそういった経験はなくどうしたらいいのか分からなかった。そこで一夏達と合流しようとしたのだが、不意に一夏達の会話が耳に入った。

「まあ、ラウラは可愛いとは思っちゃ」

その言葉を聞いた瞬間、ラウラの思考回路は停止した。まあ、そのおかげでその次の言葉が耳に入らなかったのは幸いといえるべきか・
・

その後、ラウラは復活してはその言葉を思い出し、再びフリーズするを繰り返していた。結局、ちゃんと復活したのは連絡がなく心配して探していたセシリアと会ってからだだった。

寮に帰った後、ラウラはクラリッサに色々と相談したそうだ。その結果がどうなるかは誰にもわからない……

第28話 おおう・・・久々すぎる俺・・・orz（後書き）

溜まってる感想の返信は申し訳ございませんが、個別に返せそうに
ありません。大変申し訳ございません。

第29話 正月・・・正月太りはしたくないなあ〜WWW（前書き）

な、なんとか年内に更新出来た・・・。教習所も卒業。後は免許センターに行くだけっ！

遅ればせながら・・・奈々様サイコーッ！！

では、ごっご。

第29話 正月・・・正月太りはしたくないなあ〜WWW

「これが資料よ」

「ああ、助かった。ありがとう」

休日が明けて、翌日の放課後。俺は鈴から回収を頼んでいた資料を受け取った。

俺はそれをパラパラと軽く目を通す。

「・・・成る程な」

「何か分かった？」

「ああ」

俺は鈴に資料のあるページを見せる。そこにはこの前、あのイメージが言っていたハイパー大シヨツカーについて載っていた。

そこにはこう書かれていた。「該当する組織は無し」と。

「え、どういふこと?…まさか…っ!?!?」

「……フィリップさんの検索に引っ掛かるのはあくまで『この世界』のもの。つまりは……」

「相手は世界を移動できる能力があるってことね……」

「その可能性が高いと考えていいだろう」

イメージが言ったことが嘘だという可能性も無くはない。だが、最悪を想定して動いた方が何かあったときにすぐに対処しやすい。

「士さん達に連絡取りたいけれど……あの人たちとの連絡手段な

んでないし……」

「……出来る限りの対策を練ろう。とりあえずオーナーに連絡して、色々と練った方がいいだろう。……それにあの人なら何か知ってるかも知れないしな」

オーナーは謎が多い。何か知っている可能性は大だ。それに駅長もまた、どこからか正確な情報を仕入れてくれる。とりあえず、その二人に報告は確定だな。

「うん、分かった。……そっちの資料は？」

「……これは秘密だ」

あーうん。今の言い方はミスった。ごめんなさい。

俺がそう言つと鈴は悲しそうな顔で、そして涙目の上目遣いでこっちを見てくる。

「……何よ……パートナーのあたしにも言えないの……？」

「……すまない。言い方が悪かったな。これは個人のプライバシーに関わることなんだ。だから、お前にもこればかりは言えない」

「……分かった。今はそれで納得する」

鈴は不承不承ながらも、どうにか納得してくれた。うん、俺が悪かったです。ああ、石投げないで……

俺は鈴の頭に手を乗せる。

「……すまないな。ちゃんとと言えるようになったら、必ずお前にも言う。それまで我慢してくれ」

「……うん」

俺は鈴の頭をゆっくり撫でながら、再び資料を見直す。だが、先ほど見たのと結果は変わらない。あまりの情報の無さに不安を感じざ

るをえないが、とりあえずそれは置いていくことにした。

さて、もう少しで臨海学校。楽しむとしますか。

「海、見えたあっ！！！」

トンネルを抜けた瞬間、バスに乗ってる皆の声が響き渡った。そう
いや、海をゆつくり楽しむのって久々かね・・・？

窓から見える青い風景に少し頬を緩ませ、飲み物を飲むために視線
を車内に戻すと、シャルロットが視界に入った。なぐんかずっとニ
ヤニヤしてんだけど・・・何故？

「ふんふん」

・・・なんか音符まで出てるんですけど・・・って、ああ成る程ね。

俺はシャルロットが見ているものに気が付いた。それはついこの前、結局あまり一緒に回れてやれなかったお詫びとして買ったプレスレットだった。

「・・・余程気に入ってくれたみたいだな」

「え、あ、うんっ！えへへ・・・」

「まったくシャルロットさんたら朝からえらくご機嫌ですわね」

見えないが俺の後ろの席に座るセシリアは若干機嫌が悪そうに見える。というか不機嫌だね。

「うん、そうだね。ごめんね。えへへ・・・」

あーやばい。眠いや・・・昨日遅くまで資料を見てたからな。

何やらシャルロットとセシリアが色々と言いつているが全然耳に入って来ない。俺はそのまま意識を落とした。

ほどなくしてバスは目的地である旅館前に到着。四台のバスからIS学園一年生がわらわらと出てきて整列した。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「」「」よろしくお願ひしまーす」「」

千冬さんの言葉の後、全員で挨拶をする。この旅館には毎年お世話になっていらっしゃるく、着物姿の女将が丁寧にお辞儀をした。着物がよくお似合いで……。こういう人を和服美人って言うのか……

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね。あら、こちらが噂の……?」

女将がふと、俺の方を見て織斑先生にそう尋ねる。

「ええ、まあ。今年は男がいるせいで浴場分けが難しくなってます。って申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子じゃありませんか。しっかりしてそんな感じを受けますよ」

「そう言って頂けると姉としては嬉し限りです」

すると、織斑先生は俺に挨拶しろと目で言ってきた。なので、俺は軽くお辞儀をしながら挨拶をした。

「織斑一夏です。この度は自分一人の為に多大な迷惑をかけてしまい、申し訳ございませんでした。これから数日、更にご迷惑をかけてしまつてしようが、どうぞ宜しくお願い致します」

「いえいえ。こちらこそ宜しくお願い致します」

お互いに挨拶を済ませた後、織斑先生が部屋割りを発表する。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

発表を終えた後、女将が皆に動くように指示を出す。すると、皆は「いと返事をして各々動き始めた。

「ね、ね、ね。おりむ〜」

「ん？」

「おりむの部屋ってどこ？一覽に載って無かったよ。遊びに行くから教えて」

「いや、俺もまだ教えてもらってないんだ。おそらく教員の部屋の近くだと思うが」

とりあえず、女子と同じ部屋はあり得ない。故に一人部屋だ。ただ、就寝時間を過ぎて女子がやってくる可能性がある。つまり、教員の部屋の近くだと思われる。ま、あくまで予想だけだね。

俺がそう言つと本音や周りで聞き耳を立てていた女子はがっくりと肩を落とした。まあ、だれも鬼がいる場所には近づきたくないよね。

「織斑、行くぞ。お前の部屋に案内する」

「分かりました。．．まあ、後で遊ぶとしようか、本音」

「うんっ、分かったっ！」

織斑先生についていった先はやはり教員の部屋の近くだった。空き部屋があるようなので、その辺りかなと思ったのだが、そこを素通りした。

「ここだ」

「ここは……」

「そうだ。教員室だ」

……ああ。そういうこと。織斑先生と一緒になら誰も来ようとなないわな。うん。

俺は大人しく織斑先生に従って部屋に入った。

中はふたり部屋だというのに広々とした間取りになっていて、外側の壁が一面窓になっていた。そこから見える風景はこれまた素晴らしく、海が見渡せる。

「・・・これはまた・・・すごいな・・・」

それ以外にもトイレ、バスはセパレート。しかも洗面所まで専用の個室になっている。IS学園の寮よりも良い部屋だね。

「一応、大浴場も使えるが男のお前は時間交代だ。本来ならば男女別になっているが、何せ一学年全員だからな。お前1人のために残りの全員が窮屈な思いをするのはおかしいだろう。よって、一部の時間のみ使用可だ。深夜、早朝に入りたければ部屋の方を使え」

「わかりました」

「さて、今日は一日自由時間だ。荷物も置いたし、好きにしろ」

「織斑先生はどうするのですか？」

「私は他の先生との連絡なり確認なり色々ある。しかしまあ

」

ごほん、と咳払いをする織斑先生。そしてどこか照れくさそうに言う。

「軽く泳ぐくらいはするとしよう。どこかの弟がわざわざ選んでくれたものだしな」

「そうですね」

なんとというか、まあ……相変わらず素直じゃないなあ。俺は若干笑みを浮かべる。

「む、なんだ。その笑みは」

「何でもないですよ。では早速海に行ってきます」

「あ……あ……」

俺はリュックサックに、水着とタオル、それに替えの下着を入れて更衣室へと向かった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

俺と篤は更衣室のある別館へ向かう途中でばったりと出くわした。それまではまだ良い、問題は目の前の珍奇な光景であった。

道ばたに、ウサギの耳が生えているのだ。しかも『引っ張ってください』という張り紙がしてある。

デジャビュだ。激しくデジャビュだ……

「……………どうする、箒」

「知らん。私に聞くな。関係ない」

そう言うと箒はスタスタと歩いて行ってしまった。やれやれ、姉嫌いは健在か……

「何をしていますの？」

「ん？…ああ、セシリアか」

俺がウサミミをどうしようか悩んでいるとセシリアが話しかけてきた。

「いせ、このウサミミをどうしようかと……」

「何かあるんですの？」のウサミミ」

「・・・予想が間違っただけなら・・・」

仕方ない。呼べば出てくるかな・・・？俺はとりあえず試しにと
叫んでみることにした。

「いるんだろう、東姉さんっ！！出て来てくれっ！！今出てきたら
特別にハグをしてあげようっ！！」

『はーいっ！！今そこに行くから待っててっ！！』

「・・・まさか零コンマ何秒で返事が返ってくるとは思わな
かった・・・」

すると上空から轟音が聞こえてきた。・・・ああ、またか・・・

上を見るとニンジン型のロケットがこっちに向かって来ていた。同
じパターンかい・・・

「いつ……くーーーーんっ!!!」

と思ったら下からキタアアアアアツ!!!???

束姉さんが何故か床の下から現れた。俺に向かって跳び込んできた束姉さんを俺はなんとか受け止めた。そしてロケットは何故かキチンと着陸していた、静かに。

「えへへへ……いつくんの匂いだあ……3か月ぶりぐらいだよ」

「やれやれ……まさか下から出てくるとは思わなかったよ」

「前と同じじゃつまないもんつ。……それよりもいつくんハグハグっ!!!」

「はいはい」

約束通り、俺は束姉さんを思いつきり抱きしめた。束姉さんも俺を抱きしめ返した。

ああ・・・セシリアになんて説明しようか・・・俺は後ろからヒシヒシと感じる視線に嫌な予感を感じながら束姉さんが満足するまで抱きしめていた。

第29話 正月・・・正月太りはしたくないなあ〜WWW（後書き）

この束さんは一夏の癒しです。そして私の癒しは奈々様の曲です
ww

それでは皆さん良いお年をっ！

番外編 何書いてるんだろ俺・・・？（前書き）

一気に書けちゃいましたので、投稿。ん〜ISがひと段落したら続き書くかな。ISは一応アニメ版までを予定。

とりあえず思ったこと。俺、本当に仮面ライダー好きなんだなW W

W

番外編 何書いてるんだろ俺・・・？

そこは何もない空間。何も存在していなかった。・・・俺以外は・・・。

(・・・ここは・・・どこだ・・・？)

自分が何故ここにいるのかさえ分からなかった。自分の名前すら分からない。本来、普通の人間ならここで発狂するだろう。しかし、何故か俺の心は落ち着いていた。

(不気味だ・・・自分の心が怖く思える・・・)

何故自分の名前すら分からないというのに不気味だと分かるのか・・・それすらも分からない・・・何故・・・何故だ・・・

何故、俺はここにいるっ！！！！???

何故俺は何も覚えていないっ！！！！???

何故俺はこんなにも知りたいという欲望が強
いっ！！！！???

何故、何故、何故っ！！！！???

俺には何も無いから知るといふことを欲求するのか……?何故だ・
……?分からない……誰か……教えてくれ……

簡単な話だ。お前が死に全てがリセットされたか
らだ

すると突然頭の中に声が聞こえた。老人のような子供のような男のような女のような・・・まったく判別がつかない声だった。

何故俺は死んだ？そしてお前は誰だ？

私はお前より上の存在。そう認識しろ

分かった。で、何故俺は死んだ？

知りたいという欲望が強すぎたからだ

・・・意味がよくわからない。何故欲望が強すぎると死ぬ？

お前の欲望が世界の許容範囲を上回ったからだ。
故に防衛措置としてお前を殺した

・・・理解した。では、俺はこれからどうなる？

お前の死はこちらが行ったもの。故に別の世界に
転生することにした

転生させる理由が分からない。このまま魂を消滅させればいいのか？俺を転生させることで発生する利益は？

まず、魂はこちらの意志で消滅させることは出来ない。魂とは自然に摩耗し消滅するものだからだ

理解した。

次に転生させるメリットだが、お前のその欲望の大きさは非常に稀有だ。故にこちらで用意するリミッタを付けた上でお前がどう動くか観察させてもらう

成る程。俺は実験動物ということか。

そういうことだ

ではそのリミッタとは？

すると突然俺の周りに9つの紫のメダルが現れた。そしてそのまま俺の体内へと入っていった。

これは？

これは欲望を消す能力を持つ。しかしお前にはこれを使ってようやく人並みになる

人並みにしては意味がないのではないか？

お前がこのメダルの力を超えられるかをみたいのだ。正確には人の欲望は何処まで行くのかをだ

理解した。

そのメダルは護身用にもなる。不測の事態や
前が使いたいときに取り出せ。念じれば出てくる。使い方はあとで
教えよう

了解した。で、いつ行けばいいんだ？

今は眠れ。後、もう一つの力を付与させてから
行かせる

もう一つ？多すぎではないか？

それぐらいお前には気を使っているという事だ。
目が覚めたらすでに転生している。その後はお前の思っように動く
がいい

了解した。

俺はそのまま意識を落としていった。ああ・・新しい世界か・・・
タノシミダア・・・

転生してから数年が経った。分かったことはこの世界は俺が前にいた世界と文化的に同じということだ。何故かそのことは理解できた。故になんの違和感もなく世界に溶け込むことが出来た。

俺が生まれた家族は世界的財閥の一家だった。ちなみにその一人息子。しかし、両親は俺に家を継がせる気はないらしい。『自分の

やりたいことをやれ』と先日言われたばかりだ。……俺は今9歳。そういうことを言うのはまだ早いと思うが……

そうそう、あの存在が言っていた力の使い方だが、9歳の誕生日の日に枕元に置かれていたドライバーとやらを使つらしい。手紙も一緒に置かれておりそれに書いてあった。

後、もう一つの力の件だが……

「起きて下さいマスター。朝食の時間です」

「我が起こしに来たのだ。さっさと起きぬかつ！」

「起きろーっ！起きろーっ！！」

やれやれ・・・相変わらず賑やかだ。

閉じていた目を開けるとそこには3つの顔が目の前にあった。ただし、人の顔より大分小さい。

「……起きてる。だからそこをどいてくれ3人とも」

俺がそう言つと素直に3人はどいてくれた。俺はベッドから身体を起こし、軽く伸びをする。

閉じていたカーテンはいつの間にか開いており、部屋に日差しが差し込んでいた。

「おはよう、3人とも」

俺が三人に挨拶をする。

「おはようございます」

「うむ、やっと起きたか」

「オッハーツ!!!」

3人ともそれぞれに挨拶を返してくれた。・・・ちなみにその挨拶はもう古いぞ。

上から順に、茶髪ショートカットで青い眼の星光シュテル・ザ・デストラクターの殲滅者。銀髪ショートカットに紫色の×型の髪留めを付けた碧眼の閻統べる王ロード・デイアーチェ。水色のツインテールで赤眼の雷刃レヴィ・ザ・スラッシャーの襲撃者。

この3人が俺のもう一つの力らしい。こいつらは融合騎というもので俺と名前通り融合することが出来るらしい。というか出来た。先日試してみたのだ。その結果は・・・まあ、秘密ということだ。少しか言え、それぞれの魔法が使えるようになる、といったところか。

3人を先に行かせた後、学校の制服に着替えて食堂に向かう。食堂に入ると既に両親と3人が既に席に座っていた。

「遅いぞーっ！」

「ああ、ごめんなレヴィ」

「はしたないですよ、レヴィ」

レヴィがフォークを順手に持って両手をブンブン振り回しながら俺に怒ってくる。それに俺が謝ると同時にシュテルがレヴィを窘めると、レヴィがシュンと大人しくなる。そんなレヴィの様子を見て両親は微笑ましそうに見ている。ディアーチェは呆れていたが……

「そうそう……言わなきゃいけないことがあるんだが……」

皆で一緒に食べ始めると急に父さんが話を切り出してきた。

「来週、日本に引越すから」

「アラアラ……いいわね〜日本」

「日本ってスシ、テンプラッ!? 行きたい行きたいっ!」

「私はサムライが見たいです」

「我はフジヤマを登りたいっ！」

「俺は着物を着たいな」

着物は世界でもトップクラスの優雅さを誇る民族衣装だ。やっぱり本場で着物を買いたいな。

「……皆、何も思わないの？」

「「「「もう慣れた」「「「「

「……ちいで……」

家の仕事の都合上引っ越しはいつもの事。国単位での引っ越しのこと。皆もう慣れてることだ。

「でも今回の理由は仕事じゃないんだよっ！」

ん？じゃあ何だ？

「いやね、仕事もそろそろ落ち着いてきたし、部下に全部任せて故郷でゆっくりしたいな〜って・・・」

「そんなことして大丈夫なのか？」

「ああ。引き継ぎとかは全部密かに終わらせたからね。本当に重要なモノだけを回してもらおうようにしてるから半隠居出来る状態な
さ」

「・・・何でそんなに頑張ったのさ・・・」

「仕事に飽きたからっ！！」

「・・・世の中の社会人に謝れこのヤローツ！！！！」

とりあえず、母さんが後で叱るだろうから今は特に言わないでおこう。今聞くべきは・・・

「場所はどこなんだ？」

「ああ。それは父さんの生まれた場所、

『海鳴市』

だ。」

番外編 何書いてるんだろ俺・・・？（後書き）

とりあえずここまで。無印にするか、ASにするかは不明。もし評
価が高かったら続き書くかも・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6860r/>

IP～インフィニット・ストラトス・パラドックス～

2012年1月2日23時54分発行